

---

# そんなのって有りですか！？

鐵 迅渡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんなのって有りですか!?

### 【Nコード】

N8664D

### 【作者名】

鐵 迅渡

### 【あらすじ】

それぞれの理由で地球に飛ばされてきた別世界の魔王いっこうと勇者いっこう。彼らを助けたのは唯我独尊・独裁主義のトラブルメーカーな男だった。そんな彼等が織り成す奇奇怪怪な物語。

## 第一話…これが俺らの日常さ(前書き)

息抜きで描き始めたのでおろそかな部分や説明が足りない部分とかもあると思いますがあしからず。

## 第一話：これが俺らの日常さ

よう、俺は鎖野狂式くさりのきやうじっただの学生さ。

今俺はこのくそ暑い中制服を着て教室でうだっている。エアコンは入っているが窓際だと日が照ってあまり意味がない。

「バカな事はやめなさい、そこを動くんしゃないぞ〜」

「うるさい！お前らに俺の気持ちができるものか！うわああああああああああん！！」

教師が何か物凄くやる気なさげに何かを言っている。

まったく、うるさいなあ。

いつものことなんだからほっときやいいのに。

え？何が起きているかだって？それは見てわかるとおり、バカが飛び降り自殺しようとしてるだけさ。(・・・いきなりシールドとかいわない。)

ただ事じゃないって？いいんだよ、事あるごとに

「死んでやる〜！！うわあああああん」とか言いながら今みたいなことやってるから。

それにそろそろ・・・【バン！！】ほら来た。

「狂式、あいつ止めてきてよ！授業が進まないじゃない！！」

教室のドアを勢いよく開けて入ってきたのはこのクラスの委員長さまありしまかおりの有島香織だ。

スタイルも顔も良い、長い黒髪が特徴の女子なのだが性格に難ありの困ったやつだ。どう困ったやつかというと、

「誰が困ったやつだ！」

おっと、こいつはうつかりだ。つい口に出しちまったらしい。飛んできた上履きをキャッチしつつ、香織の方を向く。ようするに超攻撃的なのだ。

「今のは聞かなかった事にしてやるから馬鹿原野を止めてこい！」

「上履き飛ばした後に言うセリフか？それに何で俺が止めなきゃいけないんだよ」

「今回も貴様の毒舌が原因だろうがああああ！！！！」

またもや飛んできた上履きをキャッチする。

まったく、他の奴に当たったらどうする気だ。とは思つが今、教室には俺と香織しかない。理由は簡単、自殺見学に皆校庭に行っている。

もはや学校名物になっている状態だ、よく飽きないよなクラスのやつらも。

因みに今、飛び降りようとしてるやつは原野<sup>はの</sup>殉<sup>じゆん</sup>と言う。

「早く行け！！そして上履きを返せ！！」

返せと言つくらいなら投げなければいいのに、なんて思うが口には出さない。

後がめんどくさいからな。

香織に上履きを渡して屋上に向かう。

ああ、めんどくせえ。

よし、俺に迷惑を掛けた罰としてなんか奢らせるかな殉に。

<原因作つた張本人が何を言ってるやら>

なんか言つたか作者？

<な、なにも……>

そんなこんなで屋上に着いたわけで……え？作者がいきなり登場していいのか？そんなの俺に聞くな。

「おい馬鹿殉、めんどくせえから戻ってこい。そして、俺にチヨコパフェ奢れ。」

「ひどい！？死を決意した奴に言うセリフかそれが！？」

「うつせーな、早く戻ってこいつつってんの。でないと秘密ばらすよっ。」

「秘密でも何でもばらすがいいさ！止めてくれるな狂忒！」

「そか、じゃあ茜さんにお前の机に隠してある

「あああああー！！！！」

「申し訳ありませんでしたああ！！！！それだけは勘弁してください！！！！」

物凄い勢いでフェンスを越えて俺の前で土下座した殉。

「じゃあチヨコパフェ奢れ。」

「是非奢らせていただきます！！！！」

<え、エゲツねえなあ……>

ほっとけ

<んで、読者に代わって言うが茜さんって誰だ？>

ああ？茜さんは茜さんだ。

<いや、それじゃわからんから>

ちっ、しょうがねえなあ。

<ちっ、とか舌打ちするなよ>

茜さんは殉の姉貴だな。普段は物凄く優しい人なんだが怒らせると超恐いらしい。

<無視ですか、ってらしいってどういうことよ？>

実際に怒った茜さんに会ったことがないからわかんねえってこと。

<さいですか。>

〜放課後〜

なぜいきなり放課後に飛んだ？

<授業風景とか寝てるから書けんのだよ・・・>

それって、テメーの自業自得じゃねえ？それに寝てるとか、お前学校に何しに行っただよ？

<グハツ！そ、それを言うか・・・てかお前に言われたかねえよ。>  
もういいや、めんどくせえからもう出てくんな。

<うわひど！わかったよ、わかりましたよ。でしゃばり過ぎましたよ。それじゃあな！うわあ〜ん>

よし、めんどくせえ作者も消えたことだし、物語始めるかな。

「キョウ君起きてよ〜、もう帰宅時間だよ。」

「聖子、そんなのほっときなさいよ。」

「でも、それじゃあキョウ君がかわいそうだよ。」

そういつて聖子と呼ばれた女子は潤んだ目を香織に向けた。  
しばらく見つめられていた香織だったが、聖子の小動物オーラに負  
けて結局狂式を起こすことになった。

「はあく、まったく聖子には適わないわ」

なんて事言いなが靴から何かを取り出す。

【ブン！】

勢いよく投げられたそれは・・・

「今日はスリッパなんだね。」

ニコニコした聖子がそんなことを言った。

因みに、香織の靴からは毎日違った投擲物が出てくる。

あ、そういうや昨日は野球ボールだったな。あれは結構痛かった。

なんて話をしているうちに投げられたスリッパが狂式の額に直撃し  
た。

「ふあ・・・、今何時間目？」

「は？なに言ってるのよ、もう放課後だって馬鹿じゃないの？」

眠い目を擦っている狂式に彼を見つめる聖子。

紹介が遅れたが彼女は津三木<sup>つみきしむぎ</sup>聖子。

この学校のMs、クイーンの称号保持者だ。

Ms、クイーンとは、「美しく、可愛く、綺麗」の3つを基準に女  
子を判断する学校内男子が作りあげた裏行事である。今では先生方  
も参加しているとかしていないとか。

性格はどうでもいいらしい。でなかったら香織が上位ランクインし



てるはずがない。

「あゝ・・・殉は？」

「いつものごとく生徒指導室よ。」

「あいつも災難だな。」

帰り私宅をしつつ心にもない同情を口にする。

「原因はあんただろうが！毎度のことながら！」

「ま、まあ、私も今日のは少し言いすぎかなって思うよ？」

「うへへ、次からはもう少し加減してやるかな？」

そんな会話をしていると殉が戻ってきた。

うっわ暗！！つかキモ！！近寄りたくねえ〜つかこっちくんなん！

「狂弑、全部声に出てるわよ。」

「おっと、こいつはうっかりだぜ。」

「お、おま、うわあああああん！」

「うるさいわ！」

【スパーン！！】

うわ、あれは痛そうだな。

スリッパで思いつきり頭叩かれてたけどあんないい音なるもんなん

だな。  
今度俺もやろう。

「狂式！お前も喋んな！」

「うへ〜い」

香織が殉に説教を始めたので俺がなんであいつが自殺しようとしたかご説明しよう。

〜回想〜

2時間目の授業が終わっていつものごとく俺、殉、香織、聖子の4人で話してたんだな。

んで、ふとした拍子に彼女だの彼氏だのの恋愛話になったわけだ。

「そっぴゃ、殉、お前彼女どうした？」

「う・・・、わ、別れたって言わなかったか俺」

「そうか？俺は初耳だぞその話。」

なんてね、前にも聞いたがあえてもう一度聞いてやる。

聖子や香織は俺が確信犯だと気づいているらしい、二人とも飽きれてるがそんなの関係ないね。

性格最悪とか言わない。

「んで、なんで別れたんだ？」

「そ、それは・・・お、俺が忙しくてあんまり会えないからって

彼女が怒っちゃって……」

「そうなのか、そりやお前が悪いな。罪悪感抱いてるくらいなら土下座でもしてくりゃいいだろうに、お前にプライドのPの字すらないんだし。」

「お、おま、俺にだってプライドくらいあるわ！」

「うそつくなくて、どうせ忙しくて会えないってのもうそで顔がだめだったからふられたんじゃないかねえのか？それにお前影薄いししょうがないよ。」

この時点で反論できない状態までへこんでる殉にさらに追い討ちをかける俺。

「だってさ、Gと殉ってどっちの存在感があるかって聞かれたら、皆間違いないGって答えるぜ」

Gって何かって？それは黒くてカサカサしててたまに飛ぶ脅威の生命体さ。

「お、俺って……うわあああああん！！狂弑なんか大嫌いだあああああ！！」

「俺も大嫌いだ、いつそ俺の前に姿見せるな目が腐る。」

「もう死んでやるううう！！うわあああああああん！！！！」

～回想終了～

お、香織の説教も終わったみたいだし帰りますか。

「おっつし、帰るか」

「そうね、あたしもバカ相手にして疲れたわ」

「ひ、ひどい・・・」

「殉さん、そう落ち込まないでください」

学校を出た俺ら一向を囲むように現れたチャラチャラした奴ら。

「ねえ彼女たち、こんな奴らと居ないでさあ、俺らと遊ねえ？」

ぞくに言う不良って奴らだ。軽く10人は居るだろうが相手にするだけ無駄だな。

俺は無視して歩きだす・・・が止められた。

誰にかつて、そんなの

「おい、お前どこ行こうとしてんだよああ!？」

「どこつて、家？」

不良に決まってるじゃないですか。

「おい狂弔！絡まれてるあたしたち無視かこら！それになんで最後疑問系なんだよ！」

「なんとなく、それに俺居なくても殉いるだろうに」

「殉じゃ頼りなさ過ぎるだろおお！」

とことん扱いのひどい殉は置いて、不良どもを無視していたため怒ってしまったらしい。

「俺らを無視するとはいい度胸じゃねえか、女みたいな顔しやがってよお！」

不良の一言に狂弑が動きを止めた。

「お、おい狂弑落ち着け、バカどもの戯言だと聞き流せって」

殉があせって狂弑をなだめていると

「誰がバカだ、クソチビがあ！」

殉までもが動きを止めた。

その後ろで香織と聖子がめっちゃ苦笑いしてるのに不良たちは気づかなかった。

「あゝあ、あいつらバカだねえ。狂弑と殉に女顔とチビは禁句なのに……」

狂弑と殉から逃げるように距離をとる香織と聖子。

「おい、男女！なんか言ったらどうなんだあ！」

「ぶっ殺されてえのかチビ！」

これを合図にしたかのように狂弑と殉が動き出した。

「男女……だと？」

「チビツつたのか？」

あまりの殺気に不良たちが一步下がる。

「な、なんだ聞こえなかったのか？何度でも言ってやるよ男女！チビ！」

【ブチ！】

狂式と殉が切れた。

「「ぶつ殺してやる！！」」

普段いじられ役の殉だが切れるとかなり強い。

因みに、狂式は合気道をやっているが殉は柔道をしていたため普通に強い。

それに輪を掛けて狂式は気功術、殉は札術を体得しているから不良どもに勝ち目はない。

なぜあの二人がそんなものを身につけているかはまた今度。

ここからは狂式と殉の一方的な暴行が始まるのでこの隙に登場人物の紹介をしよう。

鎖野狂式くさりのきょうじ、顔：麗人、髪：銀髪セミロング、年齢：17歳、性別：男、身長：175cm

原野殉はらのじゅん、顔：童顔、髪：茶髪ショート、年齢：17歳、性別：男、身長：163cm

ありしまかおり  
有島香織、顔：上の中、髪：黒髪ロング、年齢：17歳、性別：女、  
身長：167cm

つみぎしゅん  
津三木聖子、顔：上の上、髪：ブラウンブラックショート、年齢：  
16歳、性別：女、身長：165cm

はらのあかね  
原野茜、顔：不明、髪：不明、年齢：推定17歳以上、性別：女、  
身長：不明

さくく  
作者、顔：モザイク、髪：不明、年齢：作者紹介参照、性別：以下  
同文、身長：不明

<こんなところかね>

「あれ、作者さん出てきてよろしいのですか？」

「というより、こんなときに紹介しなくても・・・」

<いいのです！詳しくはまた別の機会に紹介しますから>

「で、なんで茜さんだけ不明なのよ？」

<それは名前しか出てきてないからさ、現在分かることをちよちよ  
いっとまとめただけだからね。>

「作者あ！出てくんなっつったろうがあ！..」

<ぶべらあ！>

投げ飛ばされた不良の下敷きになって目を回してる作者。  
つてか、扱いひどくねえ？

そんなことより

「終わったみたいね」

「そ、そうですね・・・不良さんたちが少し可哀想な気もしますが・・・」

「同情しちゃだめよ聖子、自業自得だから。」

不良たちをぼっこぼこにして気が晴れた狂弑と殉が立っていた。

「いくぞ、おまえら」

なぜかああいう時だけはとても息の合う二人。

すこし羨ましいと思う・・・てあたしはなにを考えているんだ！  
つて、え？なんであたし視点？

<ぐふ、そ、それは狂弑が言葉にできない状態だったからで今からもどグエエ！>

「ん、今なにか踏んだ気がするがまあいいか」

<く・・・狂弑、作者に対するこの仕打ち覚えとけよ・・・カフ>  
作者が瀕死状態なのでしばらくはあたし視点でいいのかな？いいよね。

「おゝい、なにしてたんだ香織置いてくぞ」

「う、うるさい、今行くわよー！」

なんか視点持ちって複雑な感じね。



にしても、置いてくなんて狂気のやつひどいわ。

でも、聖子はいいなあ。狂気の隣歩いて、あたしは・・・べ、別に好きとかそういうのじゃないけど・・・。

本人に言ったら怒るけど狂気すごく綺麗だし、やっぱり見惚れちゃうよね。

見惚れるだけよ！別に惚れてるわけじゃないんだから！

・・・今ツンデレとか言った奴こっち来なさい、二度と言えなくしてあげるわ。

「おい香織、顔赤いけどどうした？」

「え、あ、あはは、なんでもないわ！じゃ、あたしこっちだから、また明日ね！」

「ん、ああ、また明日な」

「じゃあな有島」

「香織ちゃんまたね、気をつけて」

は、恥ずかしかつた！まさか顔に出てるなんて思わなかったわ。やっぱり視点持ちつて変な感じ。

<で、唐突だが狂気のどこに惚れたんだ？>

え、そりゃああの綺麗な顔と・・・って作者！？

<おう、なんだ？>

あんた復活してたのね。

<まあな>

いつからよ？

<最初から >

【バキ！】

ならさつさと視点戻しなさいよ！おかげで余計な事まで・・・／／／／／／／／／／／／

<グハ、い、痛い・・・>

まったく、ほんとバカなんだから。

<でも、見るほうとしてはとつても面白かつて>

【スパーン！】

すこし黙りなさい・・・

<申し訳ありません・・・涙>

ふん、いいからさつさと視点を狂式に戻す！戻す！

<アイアイサー>

ふあゝ・・・ん、視点が戻ったらしいな。

ちっ、もう少し香織視点で居ればよかったのに、作者の奴戻しやつて・・・まあいいか。

にしても、真っ赤になってる香織は面白かったな。また見たいものだ。

「あ、やっぱり確信犯だったんですね。」

「え、なにが？」

おっと、またやってしまった。ついつい口に出してしまうんだよね。

「作者さん踏んだり、香織ちゃんの顔が赤いのを指摘したのも全部わかってやったんだなって。」

いやはや、参った。聖子はなんでもお見通しだな。

「ばれてたか、香織に告げ口でもする気かい？」

「い、いえ、ただ狂式さんらしいなって思っただけです。では、私はこっちですから、狂式さんまた明日。」

「じゃあな狂式、俺もこっちだからよ。行きましよう聖子さん。」

聖子の言葉に便乗するように殉が言った。

「ええ、それでは」

「おう、また明日な」

殉と聖子と別れて一人帰路に着く狂式。

さて、帰ったらモン ン2の続きでもやるかな。

不気味な音が木霊する。

ここは狂式達が住む世界とは異なる世界。

咆哮する魔獣の音が響き渡る、ここは最果ての地。魔の者が棲む地だ。

その地に聳え立つ古城の主、魔族の長、魔王。

魔王とは言いが別段人間と争ったりしているわけではない。

だが、なぜこのような最果ての地に住んでいるのか。

それは幾千もの昔に起きた天変地異が原因だった。

苦しんでいたのは人も魔族も同じだったが、人は魔族を恐れ畏怖し、

天変地異の苦しみをすべて魔族のせいにしたのだ。  
それがきっかけとなり魔族はこの最果ての地に追われることとなっ  
た。

だが、今は他の種族との交流もある。

この世界では魔王は恐怖の象徴ではないのだ。

「なあフィヴ、外の世界が見てみたい。」

そう言ったのは人間にで言うところの15、6歳の女の子だった。

現在は彼女が魔王だ。

その理由は次作で語るとしよう。

## 第一話：これが俺らの日常さ（後書き）

第一話完成です。

「完成ですつてお前、なんだこの終わり方？もつとましな終わらせかたなかったのかよ？これじゃまるで途中で考えるのめんどくさくなつて投げた感じじゃん。」

「いやいや、投げたわけじゃないよ。次に続けるための布石だよ。だつてこつという終わり方したほうが気になるじゃん？」

「ふん．．．まあいいや、実は他の小説を書くのが疲れてこつちに逃げてきたなんて言えないもんな。それより作者」

「う．．．な、なんだよ？」

「お前、話の中に出て来すぎ。もう少し自重しろつて。それにお前なんかが出てくる暇あるならさつさと勇者と魔王出せよ。」

「お前なんかつて．．．酷い．．．」

「あゝあ、作者落ち込んだじゃつたよ。まあいいや、じゃあ、作者の代わりに俺が言つかな。」

「お読みくださつてありがとうございます。俺や殉、これから出てくるだろう勇者や魔王のことをよろしくお願いします。」



## 第二話：魔王と勇者と青年の出会い（前書き）

更新が少し遅れました><

月曜日に更新するつもりだったのですが話しをまとめるのに時間がかかってしまい火曜日になってしまいました。

申し訳ありません！

## 第二話：魔王と勇者と青年の出会い

この世界は魔王が恐怖の象徴ではない世界。  
名をケルトリアと言う。

草木の育ため最果ての地と言われるこの場所に聳え立つ古城。  
その王室でなにやら話し声が聞こえる。  
すこし、覗いてみることにしよう。

「なあフィヴ、外の世界が見たい。」

そう言ったのは人間で言うところの15、6歳の女の子だった。  
短めに切り揃えられているライトグリーンの髪の間から見える小さな2本の角が、彼女が人間でないことをものがたっている。  
背丈は高いほうではない。たぶん160cmもないだろう。  
そんな幼さの残る彼女が現在の魔族の長、魔王である。  
その魔王である彼女の側近・・・というより世話係のような存在が  
彼ら、フィヴとフィルである。  
なぜ二人なのか？それは彼らが双子の魔族だからだ。  
フィヴとフィルは双子なのに対照的な性格をしている。フィヴは活  
発で積極的だが、フィルは物静かで消極的だ。

「そう言われましても、あなたは今や魔王という立場。軽々しく出  
歩けるものではないのですよ。」

彼女は生まれてからこの最果ての地から出たことが無い。



しかし魔王となった今では他国との貿易もあり、最果ての地以外の話を耳にすることも多い。

そうなれば15、6歳の少女が興味を持たないはずが無いだろう。だいが話がそれてしまった、なぜ彼女が魔王をしているのかを話そう。

魔王には、魔族の中でもっとも魔力が高い者が選ばれる。年齢や性別などとは関係なく、5人の審判員に選ばれた者が魔王となる。

魔王の地位を継承する条件は先代の魔王の命が尽きたときだ。

それが病気で命を落とそうが、寿命をまっとうしようが、殺されようが、先代の魔王の命が尽きたときのみ魔王の地位が継承される。なぜこのような制度なのか、それは魔族の持つ魔力は生まれてから死ぬまで変化しないからだ。

先代の魔王が病気で若くしてこの世を去ると、幼い者が魔王になる場合がある。

彼女、セフィリアン・シートがいい例だ。

彼女が魔王になってから半年、政はすべて先代の魔王の側近が執り行っている。

魔王の側近も地位が継承されれば継承される。側近を選ぶ権利を持つのは魔王のみ、最大4人まで選ぶことができるのだ。そして選ばれたのが先ほども紹介した彼らだ。

「それでも外の世界が見たい。あたしは魔王って名前の飾りなんだから居ても居なくても変わらないでしょ？」

「そんなこと言うものではありませんよ。」

「政以外にやることなんて無いじゃない、やっぱりあたしなんてただの飾りなのよ！」

彼女はそう叫びながら王室を飛び出していった。  
フィヴは急いで追おうとして勢い良く閉められた王室の扉に激突して目を回していた。  
それから数日が経ったある日、魔王ことセフィリアスの姿が最果ての地から突如として消え去った。  
そして、それを追う様に魔王の側近であるフィヴとフィルの姿もいつの間にか消えていた。

息を切らし、剣を支えに立つ者が居た。

その前に横たわるのは禍々しい色をした肌に長く伸びた2本の角と爪、巨大な体躯を持ち、世界を恐怖のどん底に叩き落した悪魔、魔王だ。

「どうやらこの世界はケルトリアとは違い魔王は恐怖と悪の象徴らしい。」

「やった、ついに魔王を倒したんだ・・・」



それに決着がつき勇者を追って来たのだ。

「ぐう・・・貴様らあああああああああ！」

魔王が叫ぶ。それと同時に倒れていた勇者がいつの間にか起き上がり、折れた剣の剣先つかみ魔王の心臓部に突き刺した。

今度こそ魔王は絶命したが魔王の放った最後の技が暴走し、勇者たちもろとも魔王城を飲み込んで技は消滅した。

狂武がいつもと同じ帰り道を歩いていると、近くのグラウンドからものすごい地響きと光が見えた。

まったく、今日はやたらと問題が起きるな。

少しはゆっくりさせろよまったく。

なんて事を思いながらそのグラウンドに足を運ぶ。

グラウンドに着くとその真ん中に二人ほど誰かが倒れていた。

一人はライトグリーンをした髪を短めに切りそろえた女の子だ。高

価そうな装飾を施してあるゆつたりとしたグレーの服に黒いマントを着けている。

もう一人は兜をしていて顔は半分くらいしかわからないが、たぶん女の子だろう。全体的に明るめな色の布地に鎧を着ている。

そして共通することが一つ、なぜか二人ともぼろぼろなのだ。

ライトグリーンの髪の少女はなぜか服の裾やらが破けていたり、袖なんか片方なかったりする。

兜を着けている少女は着けている鎧がほとんど壊れていて使い物にならないような状態だ。

そんな二人を前にした狂気。

さて、どうしたものか。

ここに放置していくわけにも行かないしな、かといって二人を抱えて家までいけるわけではない。

手は2本しかないのだ。

おし、とりあえず

「おい、お前ら起きろ」

頬を軽く叩き呼びかける。

すると少しして二人が目を開けた。

「あれ、あたしはいつたい・・・ここは・・・？」

「ここは・・・そうだ、メシア！イヤクウ！」

頭を抑えてゆつくりとあたりを見回すライトグリーンの髪をした女の子と、キョロキョロと何かを探るようにせわしなく周囲を見渡す鎧を着た少女。

「おう、お前らこんなところで何してんだ？と言うより何者だ？」

その言葉でようやく狂気の存在に気づいた二人が立ち上がり狂気を見る。

もともと立っていた狂気は思う、こいつら結構背低いな。年齢的には14、5歳に見えるな。

「お前はいつたいなんだ」

「あなたはいつたい誰ですか？」

二人の対応は俺が何者かと言うことらしい。最初に質問したの俺なのに・・・まあいいか。

「俺は鎖野狂気くわのきやうじ、とある学校の2年だ。で、お前らに聞きたいことが山ほどある・・・が、とりあえず俺の家へ来い。まずは傷の手当てをさせる。」

正直なところ、この特殊な格好をした彼らとこの場に居たくないのだ。俺がまるで危険な趣味の持ち主に思われる。それだけはマジで勘弁だ。

しかし、彼女らは怪訝な顔をして俺のことは見たまま動こうとしない。

「ん、どうした？」

もしかしたら俺の言っていることが分からないのかもしれない、なんて思った矢先。

「怪しすぎる、いきなり家に来いって何をたくらんでいる」

「あなたは、いきなり何言ってるんですか？」

露骨に警戒されている。

狂式は眉をヒクヒクと痙攣させながら極力表情を崩さずに二人を指差して言った。

「お前ら、怪我の手当てしなくていいのか？それにその格好何とかなないと不審に思われるのはお前らの方だぞ。」

そう言われて二人とも自分の姿を再確認した。

「ふん、だからどうした」

「た、確かに酷い格好ですが・・・」

今更ながら言うが狂式はあまり我慢強い方ではない。というより超がつくほどの短気だ。

なにか【ブチ】という音が聞こえた気がする。

その直後、狂式が切れた。

「そんな格好でいるお前らとこの場に長く居たかねえんだよ！！人が気を使って声かけてやったってのにそういう態度を取るなら俺はもう知らん！」

突如として切れた狂式に体をビクッと振るわせた二人を他所に、狂式は踵を返して歩き始めてしまった。

とっさのことで何がなんだか分からなかった二人だが、今彼が居なくなってしまうたらとてつもなくまずい状態になるのではないかと思ひ狂式を追い、謝った。

「う、疑ったりして悪かった。」

「ごめんなさい、いろいろと混乱していて……。」

一瞬だけ止まった狂式だが、二人の言葉を聞いてか聞かずか「付いて来い」と一言だけ言うともまた歩き始めた。

後ろの二人は少し首を傾げて狂式に付いて行った。

しばらくすると狂式の自宅に着いた。

二階建ての一軒家で庭付きと結構広い。

狂式は二人をリビングに案内した後「少し待ってる」と言ってみてリビングから出て行ってしまった。

二人残された彼女らはしばらく無言だったが、その空気に耐えられなくなつたのか兜をかぶつた少女がライトグリーンの髪の少女に話しかけた。

「ねえ、どうしてあそこに倒れていたの？」

突然話しかけられてびっくりしたのか、少し体を振るわせた。

「それは」

ライトグリーンの髪をした少女が口を開いたとき、ガチャと音がしてリビングのドアが開き狂式が戻ってきた。

「とりあえずお前からこっち来て座れ。」

リビングの真ん中で立ち尽くしていた二人をソファに座らせてガ―ゼと消毒液を使い二人の傷を治療していく。

このとき治療の邪魔だと言うことで兜を着けた少女に鎧と兜を取る



ように言った。

鎧の下にも布地の服を着ているので裸になるわけではない。言われたとおりに兜と鎧を取った彼女は、短めの黒い髪を少し乱している。

そして、一番特徴的だったのが左右の目の色が違うことだ。確かオッドアイとか言った気がする。左が赤で右が青色をしている。しばらくして傷の手当てが終わると二人にマグカップを渡した。

「ホットミルクだ、砂糖が入ってるから少し甘めだぞ。」

そういわれて恐る恐るコップに口をつける二人。

「ん、おいしい」

「なぜか落ち着きます。」

少し驚いた様子の二人に、椅子に腰掛けた狂式が尋ねた。

「んでだ、まずお前らの名前を教えてください。」

まずライトグリーンの髪をした少女が名乗った。

「あたしはセフィリアン・シートよ。」

次にオッドアイの少女が名乗った。

「ボクはリアルト・シャルンです。」

「セフィリアン・シートにリアルト・シャルンねえ。んじゃセフィリアンとリアルトは何者で、なんであそこに倒れてたんだ？」

もつともな疑問で、さつきリアルトがセフィリアンに聞いたのと似たような質問だ。

二人はその質問に同時に答えた。

「あたしは……」「ボクは……」

「魔王よ」「勇者です」

その言葉に三人は固まってしまった。

リアルトはセフィリアンを見つめ、セフィリアンはリアルトを見つめ、狂式は二人を見つめている。

しばらくして、三人は別々の行動を取った。

リアルトは座っていたソファから右方向に跳ねるように立ち上がる。

セフィリアスも座っていたソファから左方向に飛ぶように立ち上がった。

そして狂式は大笑いをしている。

「勇者？魔王？ばっかじゃねえの！あっはははは可笑しー頭大丈夫かお前ら。」

しかし二人はその言葉にも耳を傾けず互いを睨み動かさずしない。

「まさかあんたみたいなのが勇者だなんて思わなかったわ！」

「それはこつちの台詞だ。そんな姿の魔王なんて始めてみたけど、魔王は魔王だ！」

火花がちりそうなほどにらみ合っている二人をなだめるように狂式

が喋る。

「おい、お前らとりあえず座れ。何の因果があるかは知らないけど今は俺の質問に答えろ。殴り合いだの殺し合いだのはその後俺の家以外の場所でやってくれ。」

だが二人の耳には届いていない。

少しして取っ組み合いが始まった。武器を持っていないため取っ組み合いになったのだ。

けれどその二人の頭に狂気の拳が炸裂した。

「てめえら俺の話聞いてたのか？今は俺の質問に答えろつつつたよなあ？そんなにこの場で天昇したいのかごるあ！」

拳骨の痛さと狂気のアマリにも強い殺気に二人は震えながらソファに座りなおした。

「んで、なんであんなところで倒れてたんだ？」

二人が何か目配せしているのを見て見ぬ振りをしながら言葉を待った。

先に話し始めたのはリアルトだった。

「ボクは、多分ここじゃない世界で仲間とともに魔王を倒したんです。でも、魔王の最後の攻撃が暴走してこの世界に飛ばされてきました。」

「リアルトが居た世界はなんていうんだ？」

「ボクが居たのはセルレイヌという世界です。」

「わかった。で、セフィリアンはどうしてあそこに倒れてたんだ？」

「あたしは魔王の仕事が嫌でお城を抜け出したら勇者って名乗る人たちに襲われて、殺されそうになったから魔力を開放したら制御できなくなっちゃって気が付いたらあそこに倒れてたの。」

「仕事って、世界を征服することか？」

狂武が不思議そうな顔でつぶやいた。

「ううん、あたしの居た世界、ケルトリアでは魔王は恐怖の象徴ではないわ。人間の王と同じで種族を束ねるだけの者よ。」

それで、なぜ二人がボロボロだったのかその理由がはつきりした。二人が勇者と言う単語と魔王と言う単語にやたらと反応したのはそういうことがあったからなのか。にしても二人とも名前長いよな・・・、よしセフィとリアって呼ぶことにしよう。

狂武が考えて居るとリアが話しかけてきた。

「あ、あの、貴女は何者なんですか？」

こいつは何抜かしてやがるんだ？  
前に自己紹介しただろうが！なんで思うが口には出さない。俺って優しい！

「俺は鎖野狂武、見てのとおり学生さ。」

すると今度はセフィ尋ねてきた。

「いつってどこなんですか？それに、学生って何？」

「ここは地球の日本って場所だ。そして学生とは、生きるすべてを学ぶ者のことさ。」

二人は未だによく分からないといった顔をしているが無視する。

「ところでよお、お前らはさ、両方とも何らかの暴走でこの世界に飛ばされて来たわけだろう？元の世界に帰る術はあるのか？」

「あ……」

二人の顔が真っ青になってゆく。

「はあ……その顔見るとないんだろ。仕方ないから家に置いてやる。だからさっさとこの世界のこと慣れる。わかったな？」

「は、はい、ありがとうございます。」

「わかったわ。ありがとね、えっとキョウジ……でいいのよね？」

「おっ」

こいついきなり呼び捨てかよ。まあいいか。

かくして、勇者ことリアルト（以下リア）と魔王ことセフィリアン（以下セフィ）の奇妙奇天烈なドタバタ生活が始まるうとしていた。

## 第二話：魔王と勇者と青年の出会い（後書き）

「おい作者」

なんだよ？

「さつきリアが『あなたは何者なんですか？』とか聞いてきたときの”あなた”って貴女書いてなかったか？」  
んなのしらねーよ。

「調子ぶっこいてると絞めるぞごるあ」

知らないものは知らないんだからしょうがないだろう。

それに、俺は急がしグエエ

「逃げんな、少しばかり自分の立場を知る必要性があるようだない、息が・・・狂式、し、絞まってる絞まってる絞まってる・・・。」

「この小説を読んでくださった皆さんありがとうございます。これからこの狂式を応援してください。それでは」  
だ、誰もお前なんか応援しな「黙れゴルァ！」ゴフ

**第三話・勇者の仲間と魔王の下部と狂武一行の対面（前書き）**

更新遅くてすみません。

言い訳ですが何かと忙しくて……

では本編をどうぞ！

### 第三話：勇者の仲間と魔王の下部と狂武一行の対面

- 視点：リア -

昨日からこの鎖野宅でお世話になっているリアルトです。

今、狂武さんは学校という場所に行っているのですがここにはいません。「あたしは魔王だ!」とか言ってるこいつと、ひとつ屋根の下に暮らすことになったのですが・・・正直、不満でしょうがないのですが文句は言えません。キョウジさん怖いから・・・。

その後、こつちの世界にボクの間達も来ているかも知れないって事をキョウジさんに話したら、「この近くに飛ばされたんならすぐ見つかると思うぞ」って言ってました。

何でだか理由は言ってくれませんでした。なにか同情しているような、哀れむような感じでした。

【キョウキョウキョウ】

「よっつと」

まだ寝ているセフィの顔に油性ペンと書かれたこれで落書きをした。昨日、キョウジさんが作ってくれた夕食のから揚げ、ボクの分食べたお返しだ。

食べ物への恨みを晴らしてリビングへ戻り、キョウジさんが学校に行く前に用意してくれた服に着替えた。

この服、すごく肌触りがいい上、ボクが今まで着ていた服より動きやすいんですよ。びっくりです。

落書きというなの復讐を済ませてスッキリしたので、今は読書を読みます。

一応文字は読めたので、狂武さんの部屋から勝手に取った『リル鬼ごっこ』って名前の本を、リビングのソファに座って読んでます。



本当はこの世界のことについて知ろうと思ったのですが、それっぽい本がなくて替わりにこの本を持ってきたのですが、なんだか面白くて。  
仲間のことも心配なのですが、多分キョウジさんがどうにかしてくれると思うのでおとなしく家で待ってることにしてるんです。

「きゃあああああ、何これ！」

突如として響き渡った声にリアは一瞬本から目を放したがまたすぐに戻す。

ドタドタドタという足音とともに可愛い猫の絵が描かれている服を着たセフィがリビングへとやってきた。

「ちよつとリア！あたしが寝てる間に顔に落書きしたでしょ！」

即座にばれたけどまあいいや、セフィだし。

セフィを無視して本を読んでいると、セフィがいきなり何かを投げつけてきた。

しかしリアはそれをヒョイっと避けてしまった。

因みに投げられたものは……

「ちよつとリア、聞いてるの!？」

……子猫の絵の描いてある目覚まし時計だった。

因みに、これは狂式のお気に入り目覚まし時計だということを二人は知らない。

「セフィ、危ないから物投げるのやめて」

目覚まし時計に続いて投げようとしていた子猫の置き物をおろさせ

た。  
が、最初に投げられた目覚まし時計はリアの後ろで無残な姿になっている。

「リアがあたしの顔に落書きするからでしょ！これ洗っても落ちなかったのよ！！」

置き物は下ろしたものの怒りは収まっていない様子のセフィ。

それに対してリアも昨日から揚げを取られたことを思い出したのか声を少し荒げている。

「それはセフィが昨日ボクのから揚げ取ったからでしょ！すっごく楽しみに取っておいたのに！！」

「まだそんなこと気にしてるの？食べちゃったものはしょうがないでしょ！早く食べなかつたリアが悪いのよ！！」

「そういう事言うの！？悪いのそっちなのに！？もういい、食べ物の恨みは恐ろしいって事思い知らせてあげるよ！！」

「上等じゃない！あたしの顔に落書きした罪、どれだけ重いか教えてあげるわ！！」

この二人は仲が良いのか悪いのか分からないが、すごい適応能力だと感心する。

- 視点・狂式 -

さて、リアとセフィが家で激戦を繰り広げるとは露知らず狂式はいつものごとく授業を聞かずP Pでモハン2をやっている。さすが教室一番後ろの窓際、先生の目なんかとどきやしない。ついでに言うと今は英語の時間、この先生は授業が本当に下手なのだ。

生徒の間では、先生に教えてもらわずに自分で教科書読んだほうが勉強になるといわれるほどである。

まあ、そう言い出したのは俺なのだがそんなの知ったこっちゃない。

「おい鎖野、授業中に何をやっている!？」

あ、くそ!もう少しで古龍が倒せるというのに……ここは適当に言い訳を言うしかないな。

「夕飯の献立考えてました。」

教室がドッと湧き立った。

さすが俺、ナイスギャグセンスだ。

「うそつくんじゃない!今手に持っているものをそのまま出してみる!」

ふはは馬鹿め、俺がこのことを予想していないとでも思っていたのか円形禿げめ！

モン　ン2を一時中止をして机の中に即座に隠す。それと同時にレシピ帳と書かれたノートを出す。

「これがその証拠です。」

英語の教師は悔しそうにしていたが俺を出し抜こうなんて後1000年は早いぜ！

く昼休みく

「ったく、あの禿げめ、毎授業毎授業俺に突っかかってきやがって」

「コーヒー牛乳を飲みながら愚痴る俺。

「それってあんたがゲームやってるからじゃないの？」

「分かってんならそう注意すりゃいいのに、まあ注意されてもやめねーけどな」

「ばっかじゃないの？進級できなくなるわよ」

「香織、そういう台詞はテストで俺より高い点数取ってから言えっ  
ての」

「ふう……」

狂式は何かと勉強はできる方で、成績も学年で10位以内は入っている。

「ところでよお、昨日異世界から来たとか言う変なガキを保護したんだが、お前らんとで痛い格好をした奴見なかったか？」

だいはしよっているが昨日のことを簡潔に話した。

「異世界ってまた？」

香織が首をかしげているのに対し殉と聖子は苦笑いをしていた。

詳しくはまた今度話すが異世界からの来訪者は前にも一度来ている。そのため、狂式も彼らが異世界から来たというのを素直に信じる事ができたのだ。

「ふむ、知らないならいいか」

チツ役にたたねえ奴らだ。

まあ、そのうち見つかるだろう。

さて、飯も食い終わったことだし、あそこに行くとするか。

俺はごみを全部殉の鞆の中に押し込めて席を立つ。

「キョウ君どこ行くの？」

どこって決まってるじゃないか。

「保健室」

「具合でも悪いの？」

そんな分けない、寝に行くだけですよ。世界史と古文なんか聞かなくてもわかるつつつに。

「ん〜、寝てくる」

そういつて教室を後にした。

- 視点：セフィ -

「はあ、はあ、り、リア・・・あんなかなかやるじゃない」

「はあ、はあ、せ、セフィこそ・・・伊達に魔王なんて言ってないね」

相当疲れたのか二人はソファに倒れるように座っている。

そこでリビングの状態に気づいた。

今のリビングは一言で言い表せる。惨劇だ。

椅子や机が大破していて、床や天井には穴が空き、窓ガラスや食器などはすべて割れている。

そこで我に返ってあたしはキョウウが帰ってきたときのことを想像し

て震え上がった。

「ま、まずいよこれは……」

「キョウジさん帰ってきたら間違いなく怒られる……いや殺されるー!」

「ね、ねえセフィ、ここは一時休戦してこの部屋を片付けない?」

「そ、そうね、あたしまだ死にたくないもの……」

どうやらリアも同じ考えだったらしい。

そうして二人はリビングの片付けを始めた。

壊した物や場所はあたしの“リペア”の魔法で直し、リアがそれを元の場所に戻したりする。

それから2時間近くして片付けは終了したのだが、ひとつだけ“リペア”の魔法で直らない物があった。

それは、最初に壊した子猫の絵の描かれた目覚まし時計だ。

「……どうしよう、これ」

そうつぶやいたのはリアだ。

「どこかにこつそり捨てて、いつそのことなかったことにしましょー!」

あたしが目覚まし時計ゴミ箱に捨てようとしたとき

「ただいま」

という声がして狂武が帰ってきた。  
あわててそれを自分の後ろに隠す。

「お前ら何やってんだ？まあ、いいかそれよりリア、こいつらお前の仲間か？」

「え！？」

そういわれて狂武が引きずってきた人物を見ると一人は赤い髪に大剣を背負った少女だった。もう一人は青色の髪をした少年だった。たしかあの青髪は・・・フィル？

「く、いい加減手を放せ！」

大剣を背負った少女が狂武の手を逃れ大剣を構える。  
もう一人の青色の髪をした少年はなぜだか気絶している。

「メシア！無事だったんだね！」

リアが大剣を構える少女に近づいていく。

「リアルト、無事でよかった。こっちにイヤクウも着てるから後で迎えに行こう。でもその前にこいつを倒す！」

何があったかは知らないがやたらとキョウは恨まれているらしい。

「こいつは違うのか？」

狂武が自分の前にその少年を持ってきた。

あ、やっぱりフィルだ……



「フィル!？」

思わず叫んでしまったわ。

まさかこっちに来ているなんて思ってなかったんだもの。

「こいつはセフィの方が」

キヨウがフィヴをソファに寝かせると大剣を構えた少女が切りかかって来た。

けどキヨウはそれをいとも簡単に避け、さらに相手の勢いを利用して壁に向かって投げ飛ばした。

後ろからなのにごい……。

「って、何してるんですか!何があつたんですか!？」

リアが突然の出来事に半分パニックになっている。ざまあみろだ。でも、フィヴがこっちに来るってことはフィルも居るのかな? フィヴが起きたら聞いてみよう。

「ん、リアに頼まれてたからな。昨日お前ら見つけたところの周辺を探してみたらこいつらを発見したわけなんだけど。起こした瞬間襲ってきたから返り討ちにしてやったまでさ。他にも二人ほど居ただけど逃げられた。」

あれ?おかしいな、フィヴとフィルってそんなに弱くないはずなんだけど……。

魔族の中でも上位に入るくらいの強さはもってるはずんだけどな、二人そろってるとあたしでも苦戦するのに。

あっさりやられちゃってるって、どんだけ強いんですかキヨウは!

「メシア、イヤクウと一緒に居たのに負けたの？」

リアがメシアと呼ばれた少女を支えながら聞いた。

「面目ない、けどこっちの動きが全部見切られるんだ・・・」

メシアと呼ばれた少女が悔しそうにキョウを睨んだ。  
そんなとき、【ピンポン】という音がした。何だろう？  
するとキョウが壁についている何かを使って話している。

「おう、お前ら悪かったな。あがってくれ」

なにやらキョウの友達が来た見たい。

「まったく、人をこんなことに使うなっつうの。」

「あまりこっぴつうのは良くありませんけど、今回は目を瞑るとしましよう。」

「助かったよ、サンキュウな聖子とおまけ」

「おまけ！？俺には殉つて名前があらあ！」

キョウが着てるのと同じ服を着た人達だ、ただその手に捕まっ  
ているが・・・

「ファイヴ!?」「イヤクウ！」

リアとあたしは同時に叫んだ。

「あ、魔王さま！よかった。すごく心配したんですよ」

「リアルト、メシア、大丈夫だった？」

それぞれにいろいろ言っているが。

「いや、イヤクウこそ大丈夫？」

なにやら二人とも紙を張られているだけなのに動けない様子だ。

キヨウが紙を剥がすと二人はすぐさま立ち上がりあたしらのところに駆け寄ってきた。

「おし、自己紹介と行きますか。リア、セフィ、他には大丈夫だよな？」

「ボクの方は大丈夫です。」

「あたしわ分からないけど・・・フィヴ、飛ばされてきたのってお前たちだけ？」

「そうですね、魔王様を助けに行ったら魔力の暴走に巻き込まれたんです。僕らだけ・・・」

「んじゃ、大丈夫だな。っと、ソファで寝てる奴ちと起こせ。」

キヨウに言われてあたしとフィヴでファイルを起こした。

軽く揺すっても起きなかつたら殴ったのは黙っておこう。

「んじゃ、自己紹介はじめっぞ。俺は鎖野狂式くまりのきょうじ、しってるやつは今



も札術の一種だな。」

「狂式、なぜ俺の見せ場を取る……」

「んなの決まってるだろ、殉だから。脇役が目立つなっつうことだ。」

「ひ、ひどい！お前なんか大嫌いだあああああああ！！！」

あゝあ、泣き崩れちゃった。

なんか可哀想だけど、こんな人がそんな力もってるなんて意外ね。

「はい、次いつてみよあゝ」

キョウ、もうすでにやる気ないね。

「始めましてみなさん。」

「あ、始めまして」

まともに返事してるのリアだけだよ。

少しは場の空気を読もうよ……

「私は津三木聖子（つぎみせいこ）つていいいます。恐れながら巫女（まじ）という役職につかせていただいています。」

「先に言っておくが、巫女ってのは神に仕える女のことな。」

「はい次々セフィGO」

あ、あたし!?

「え、えっと、セフィリアン・シートです。ケルトリアって世界から来た魔王です。」

「ボクはセルレイ又って世界から来たリアルト・シャルンです。一応・・・勇者です」

「どんどん言っちゃって、次その大剣持ったの」

「メシア・クルース、戦士」

「イヤクウ・ベルモントです。魔術師です。」

「じゃあ次はそっちの二人よろしく」

「フィヴ・ラウシン、魔王であるセフィリアン様の側近だ。」

「フィル・ラウシン。フィヴと同じで魔王の側近。」

これで全員自己紹介が終わったのかな？  
ってキヨウ寝てるよ!?

人に自己紹介させておいて自分が寝るって・・・  
メシアはすでに大剣振り下ろそうとしてるよ。  
はわわわわ、危ない

「あゝ・・・ちゃんと起きてるから大丈夫。」

キヨウ、その言葉にまったく説得力がないよ。  
だって寝息聞こえてたもん。

「自己紹介してもらったのは他でもない。俺ん家にこれだけの人数置けないから殉と聖子の家に行ってもらいたいのね。」

「んで、もう一人、呼びつけて置いたからあとでそいつにはこのカセットテープ渡すから自己紹介はいいや」

「そいつは有島香織ありしまかおりってんだけど、そいつん家に・・・そうだなラウシン兄弟行って。んで、殉の家にはイヤクウ、聖子の家にはメシアでいいか。」

「おい、勝手に決めるな人間、俺たちは魔王さまの側近だぞ、なぜ離れなければならんだ狭いのならば貴様が出て行けばいいだろう」

あ、ちょっと待ってフィヴ、キョウを怒らせるようなことをしたら・・・遅かった。

「何か言ったかゴミ虫が」

ちよ、すごく怖いよキョウ・・・・・・・・・・眠くて機嫌悪いみたい・・・・・・・・あゝあ、あたししーらない。

狂武がフィヴの頭を片手で掴んで力を入れている。

あゝ、あれ痛そう。

そう思うが止めない、とばっちりはごめんだもの。

ひとしきりフィヴに制裁を加えたキョウが

「ピザ頼んでおいたから、食ったら言った通りちゃんと帰れよ。俺は寝る。」

と言った。

キヨウはそのままソファで寝はじめてしまった。  
でも、ピザってなんだろう。

「さっすが狂気、わかってるじゃん。」

「もうそんな時間でしたか、それではお言葉に甘えさせていただきますしょう。」

ジユンとシヨウコはなにやら準備を始めた。

「ほらほら、ぼーとしてないで皆さんも手伝ってください。  
しょうがなく準備を手伝うことにした。」

「えっと、セフィちゃんはこのお皿を向こうのテーブルへ持っていで、メシアちゃんはこのコップを運んで。」

「フィル、フィヴ、イヤクウせいので持ち上げてくれよ。いくぞ、せいの！よし、このまま少し向こうにずらすぞ。」

リビングのテーブルを移動させてスペースを作った。

「よし、次はさっき持ってきたテーブルを立てて移動させたテーブルにくつつけるぞ。せいの！っと、よしこっちの準備はできたよ。」

リアは新しく出したテーブルをふいている。

【ピンポン】

また誰か来たみたい。

それを分かっていたかのようにシヨウコが玄関へと向かった。





怖!

って、メシアが果敢にも挑んでるよ!?

それに続くようにフィヴとフィルも・・・ってなんでメシア?

「メシア、戦闘狂だから・・・強い人には向かってっっちゃうんだよね。」

リアあああああああ!悠長に話してる場合!?

早く止めないと!

「やかましい!!ピザ届いたんならおとなしく食ってる!!!」

キョウに言われて全員席に座って美味しくピザをいただきました。



第四話・買い物へ行こう〜前編〜（前書き）

やっと第四話です。

どんどん更新していきたいと思えますんでよろしくお願いします！

## 第四話：買い物へ行こう〜前編〜

- 視点：狂式 -

「ふあ〜・・・」

大きな欠伸をしながら目覚めた狂式。

まだ寝みい・・・。

つたく、リアハカども&セフィが来た夜、あいつらの服だのを用意するのに無駄に手間取つちまって全然寝れなかつたつうの・・・。

んで、今何時だ？今日は土曜日のはずだから学校はねえが、規則正しい生活は基本中の基本だからな。

リビングにかかっている時計を見ると現在の時刻は午前8時10分前だった。

ん〜・・・ちと寝すぎたか。

さて、あいつらでも起こしてくるか。

今日はリアとセフィの服だのを買いに行かなきゃいけねんだよな。家に女用の服なんざねえしよ。

それに食材も追加で買いに行かねえと・・・三人分となると今までどおりってわけにはいかねえな。

そんなことを考えながら顔を洗い、歯を磨いた俺はリアとセフィが寝ているであろう二階の俺の部屋に向かった。家は一軒家の二階建てだからな。

なんで俺の部屋かって？

他の部屋が物置状態だからな。あいつら用の部屋も用意してやらなきゃいけねんだよな・・・だる。

俺はそう思いながら部屋を開けた。

「お前らいつまで寝てる気d・・・」

思わず言葉が止まっちゃったぜ。

セフィとリアが寝てるのは分かるが、なぜラウシン兄弟やらメシアやらイヤクウまでもが俺の部屋で寝てるんだ？

俺は確かにピザ食ったら帰れつつたよな？

猛烈に湧き上がってくる怒りを抑えながらリアとセフィ、あとおまけどもを起こすことにした。

深呼吸してから息をめいっばい吸い込んで・・・

「貴様らいつまで寝てる気だ！！！！！！いい加減起きやがれ！

！！！！」

喉の調子は良好だ。

そこに居た半分の奴は今の声で目が覚めたらしい。

フィルとメシアとリアがとっさに飛び起きて身構える。

ふむ、やはり寝ていても襲われたときに対処できるようにしてるみたいだな。

に、しても今の大声で起きないセフィ、フィヴ、イヤクウはいったい何なんだ？

「あ、キョウジさん・・・おはようございます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・おはよう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

勇者ご一行は礼儀を知っているようだが、メシアはなぜか俺のことを睨んでいる。フィルにいたった挨拶もなしだ。今度礼儀って物を俺が叩き込んでやるか。

で、これからまだ起きていない奴に天誅を食らわせに部屋に入ろう

としたとき足に何かが引つかかった。

すると・・・突如として上から大量の本が振つて来た。しかも俺大切に集めていたラノベ（ライトノベル）じゃねえか。全部華麗にキャッチしてそれを机の上に置く。

「さて、今のブービートラップを仕掛けた奴は後で覚えとけよ」

あっけに取られているフィルとメシア、たぶん犯人はこいつらだろう。

んで、寝ているバカども起こす。

「いい加減【ゴンー！】起きろと【ゴンー！】言ってるだろ！【ゴンー！】

」

揺さぶるなんて生ぬるいことなんざしない。頭をぶん殴ってやった。

「いったい・・・」

「星が舞ってるよ・・・」

「っ・・・」

このお越し方にリア達が身震いしてた気がするが気にしない。

セフィ、イヤクウ、フィヴの順番に起こしてやった。

んで殴ったときに気がついたんだが、セフィとフィヴの頭には角生えてるのな。

髪に隠れてて分からなかったがあんなの殴ったらこっちの手が痛いだろう。

まあ、どうでもいいけどな。

「テメエら、さっさと着替えてリビングに降りて来い。んで、なんで貴様らが居るのか理由を聞かせてもらおうじゃないか。」

少し殺気を込めて言ってやったさ。どうやら相当応えたらしい、全員震えていた。

俺は部屋のドアを閉め、一足先にリビングにもどった。

まったく、予想外もいいとこだつつうの。

トースターに食パンを入れて、フライパンで目玉焼きとベーコンを焼いていく。

コンロが3つあると同時にいろいろとこなせて便利だと、改めて実感する。

てか、食パン足りるか？

ひとしきり準備ができたら次はリビングの片付けだ。

ピザを食べた残骸がまだ残っている。

箱ばっかり、一切れも残ってない。

ふ、俺の読みがまたあたったな。流石俺、自分が怖くなるぜ。

テーブルの上に出ているお皿とコップを全部流しへさげ空箱をゴミ袋の中へ押し込める。

たく、あいつら後片付けくらいしてけつての。

テーブルの上の片付けが終わり、トーストの乗った皿を並べているとあいつらがリビングに入ってきた。

「やっと来たか、朝飯はできてるから適当に席に着け」

テーブルの上には6人分のトーストと大きな皿に盛り付けられたサラダ、牛乳の注がれたコップが置かれている。

6人はそれぞれ席について朝飯を食べ始めた。このときただきますが聞こえたのがセフィとリア、それにイヤクウだけだった。他の奴らには今度、礼儀って物を俺が……(略)

俺はあいつらが朝飯を食ってる間に食器でも洗っちゃおうか。



あ？俺は朝飯食わないのかって？食パンが6枚しかなかったんだからしょうがねええだろ。

食器を洗っているとテーブルのある方から騒ぎ声が聞こえてきた。家は対面式キッチンじゃないからなテーブルがあるほうが後ろになつて見えないんだよな。

「これは・・・いったいなんですか？魔王さま、わかりますか？」

「わかるよ！目玉焼きって言うんだってキョウウが言ってた」

「そう・・・もぐもぐ」

「メシア、相変わらずだね」

「ぐくん・・・イヤクウに言われたくない・・・」

「ちょっとセフィ！ボクのベーコン取らないでよ！」

「早く食べないのが悪いんだよぐだ」

「またそういうこと言う！？お返しだ！」

「あ！！あたしの目玉焼き！」

騒がしい奴等だな。飯くらいおとなしく食べないのか？  
ため息混じりに食器を洗う。

狂弑は意外と家庭的だ。言葉わるいけど。  
程なくして食器が洗い終わった狂弑はごみをまとめ始めた。

これ捨てて戻ってくるころにはあいつらも飯食い終わってるだろう。  
キッチンのごみをまとめて、朝食を取っているテーブルのある方に

目を向ける。

.....

リアとセフィがなぜか取っ組みあいをしており、メシアとフィルがサラダを取り合っていてイヤクウとフィヴは何をどうしたらよいのか分からずおろおろしている。

「な、何やってんだてめえら！！飯くらいおとなしく食べねえのか！！！！」

一喝してから、リビングに置いてあったハリセンで全員に天誅をお見舞いしてやった。

「ベーコン取られたただの目玉焼き取られたのでいちいち喧嘩するな！！言えば俺がまた作ってやる！そしてそこ！未だにサラダの取り合いしてんじゃねえ！！サラダもおかわりぐらいあるわ！！」

つかれる.....

こいつら本当に疲れる。まだなんでここに居るのか話すら聞いてないのにいつもの倍以上に疲れた。

セフィ用の目玉焼きとリアのベーコンをつくり、サラダを新たに盛り付け、テーブルに運ぶ。

「はあ、俺はこれからゴミ捨ててくるけどその間騒いだりしたら容赦なく沈めてやるから覚悟しとけや。」

それだけ言うと俺はゴミを捨てるため家を出た。

外に出ると今日もいい天気だ、近所のおばさんが挨拶をしてくるので適当に挨拶を返しつつゴミを捨てさっさと家に戻る。あいつらだけを家に残してくるのは物凄く不安だ。

家に着くと以外にもあいつらはおとなしく飯を食っていた。という

か食い終わっていた。

「あ、キョウウおかえり〜」

「キョウウさんお帰りなさい。」

「お、おう、ただいま。あゝ飯食い終わったなら食器こっちに持って来い。」

「「「はい」」」

返事したのは“いただきます”を言った三人だけだ。他はしぶしぶといった感じで食器をもって来た。

俺はそれを受け取って流しに置いていく。

洗うのもう少し漬けてからだな。

テーブルのところまで来て、俺も椅子に腰掛けた。

「さて、なんでお前らはここにいるんだ？その理由を分かりやすく俺に話せ。」

全員が黙る。

俺が寝てる間にいったい何があった。

しばらくすると、実に話さずらそうにリアが話し始めた。

「えっと、実は・・・」

〈回想 始〉

ピザを食べ終わったあと、狂気の部屋に行ったりア達。

「さっきは蹴っちゃって悪かったわね、これから仲良くやりましょ  
う」

と、言いながら香織はラウシン兄弟に手を差し伸べた。握手をしよ  
うということらしいが・・・ラウシン兄弟は普通に無視。

香織が目に見えて怒りのオーラを立ち込めさせている。

これではさっきの二の舞になるのではないかと思う状態だが今回は  
誰も止める奴は居ない。

すでに一触即発の状態のこの二人を他所に聖子はメシアと、殉はイ  
ヤクウと打ち解けようと試みていて。

「メシアちゃんは何か好きなことある？」

「・・・・・・・・・・強い奴と戦うこと」

「あ、あのそれ以外には？」

「ない・・・・・・・・・・」

聖子もかなり苦戦しているようだ。

「イヤクウって魔術師なんだろ？魔法使って見せてくれよ。」

「断る」

「なんで!?!」

「術の構成を知られることなんかしたくないんだよ。知られば対処されるようになるから。」

「おし、じゃあ俺も札術披露するからお前も見せてくれよ」

「それならいいだろ？お互いに見せ合うんだ」

そんな時、聖子と殉の携帯が同時になった。

二人とも両親かららしい。

「すみません、電話ですので少し待っててもらえますか？」

「わりい、電話だちとまっててや」

二人には電話がなんなのかわかっていなさそうだったので、聖子たちが電話に出ている間に電話についてリアが説明したのだった。

「はいもしもし聖子です。」「ういゝつすなんさね」

「聖子、狂武君に言われていた一人預かってくれないかって話あったじゃない？それ、無理になっちゃったの。ごめんねさいね。」

「殉、家で一人預かるの無理になったから」

「え、いったいなぜですか？」「はあ？何言ってるのってか何で？」

「えつとね、従兄弟のユキちゃんいたじゃない？あの子が受けた学校がこつちのほうだからって家に来ることになったのよ。だから、狂武君に謝っておいてくれないかしら？」

『寺建て直すんだってよ、だから無理。わかったらさっさと狂式に謝っておいで。ブツ・・・ツーツ、ツーツ、ツーツ』

「わかりましたわ、それでは・・・ピ」

「ざけんなババア!!」

この電話の間じゅう香織とラウシン兄弟は戦闘と繰り広げていた。

「人が下手に出てりゃいい気になって!!もう家に泊めてあげないわ!!」

「泊めていただかなくてけっこうだ!!」

「ごめんなさい、メシアちゃん。そういうわけで家に泊めて上げられなくなっちゃったの。」

リアちゃん、キョウ君に伝えておいてもらえるかしら。」

「あ、はい。わかりました。」

「リアちゃん、あいつにこの紙渡してくれない?」

「はい」

〈回想 終〉

ということなんですよ」「

リアの説明を聞いて納得した。まあ、家庭の事情ならしょうがないか。

二名ほど違うけど・・・。

「はぁ・・・分かった、全員家に泊めてやる。その代わり色々手伝ってもらっぞ。」

リアとセフィはやたらと喜んでいるが他の奴らはあまり嬉しそうじゃないな。

まあ、今はそんなことよりだ。

「この目覚まし時計を壊した奴だれた？」

さっきゴミをまとめたときに発見したんだ。

これは許されざることですよ？なにせ俺の一番のお気に入り目覚まし時計だからな。

この目覚まし時計を見た瞬間リアとセフィが硬直したのを俺は見逃がさなかった。

「正直に申し出る。そうしたら怒らないから」

極力笑顔で言ってやった。こういふとき怖い顔しても無意味だからな。

「キョウジさん、ごめんなさい！それ壊したのボクとセフィなんです。」

「ごめんねキヨウ」

二人が素直に謝ってきた。仕方ない許してやるうじゃないか、これで・・・

【スパパーン！】

おお、いい音。

「い、痛い・・・」

「キヨウ怒らないって言ったのに」

ハリセンで頭を叩いてやった。

人の物壊しておいて制裁がないわけなかるうに。

「だから怒ってないだろ、叩いただけだ」

頭を抑えているリアとセフィを横目に時計を見る。

現在の時刻は午前9時半買い物に行くのは午後でいいか。

「よしお前ら、部屋の片付けするから手伝え」

そう言つて二階の一室に向かった。

ここは、両親の寝室だが今は物置だ。

そうだな、ここはリア達女子の部屋にするかな。

ドアを開けるとダンボール箱の山が目飛び込んだ。

ため息が出る。これ全部が海外に単身赴任で行っている父親から送られてきたものだ。

単身赴任といつてもすでに10年くらい帰ってきていない。どうやら向こうでの事業が成功して今は社長なんて事をやっているらしい。正直いって全部要らないのだが、もしかしたらって時のためにここ



にぶち込んだ。

「ここから片付け始めるぞ……っていねえ……どういことだこれは」

切れそうになった血管を一筋の理性で保ちリビングに戻ると各々くつろいでいやがったよ。

「おい、貴様らなにくつろいでやがる……片付けするからついで来いっつったよな？」

「え、だってめんどく……」

「だって……なんだ？」

「なんでもありません。今すぐに行きます。」

口答えしたセフィを一睨みで黙らせる。  
後にリアがドラゴンと対じたときより怖かったと語った。

「ふう、これでここは終了だな。」

あれから2時間が経過した。  
堆く積まれていたダンボール箱の山を全部片づけで雑巾まで掛け終わらせた。

やっぱり7人でやると早く終わるな。

に、しても勇者一向、魔王一向体力ないな。  
でも仕方ないか。なれないことやれば誰だつて疲れるもんな。

「お前ら休んでていいぞ。」

その一言にいち早く反応したセフィ

「うきゅ〜、やっと休めるよぉ〜」

なんだかこいつ性格変わって来たな・・・いや自が出てきたといつた方がいいのか。

この歳で魔王とかやらされてたんなら強がっちゃうのも無理はないな。

「冷凍庫の中にアイスが入ってたはずだから皆でそれ食ってる」

「ほんと！？よっしゃ〜アイスだ、アイス〜！」

ものすごい勢いでリビングに向かったセフィ、それに続くように皆もリビングに向かった。

「キョウジさんは行かないんですか？」

リアが俺に気づいて聞いてきた。

こいつは回りに気の配れる奴なんだな。その分苦労も多そうだがな。まだこいつらと会ってから日が浅いからそれぞれの性格を把握しきれないんだよな。

「俺はまだやることがあるからな」

「ならボクも手伝いますよ」

「いや、お前もリビングでアイス食ってる。俺一人で事足りるからな。」

「そうですか？じゃあ、先行ってますね。」

「おう」

俺はもうひとつの部屋に入る。

この部屋は何もない。というよりはなんで作ったのかすらよく分からない部屋だ。

両親いわく弟ができたとき用に作ったらしいが結局使われていない。雑巾掛けすればそれで終わりだ。

「ちやつちやと終わらせちまつか」

俺は雑巾を絞ってその部屋を雑巾で拭き始めた。

ケホケホ、すげえほこりだ。

難なく雑巾を掛け終わってリビングに戻ってみると、全員ぐったりしている。

「どうしたお前ら、そんなにぐったりしてよお」

「おなか減ったのおゝ・・・」

そつえばもう12時だもんな。そりゃ腹も減るか。

「今作ってやるからちとまってな。」

手軽にチャーハンでも作るか。  
30分してチャーハン6人前が出来上がった。  
俺ん家の炊飯器だと6人分しかご飯炊けないからな。新しいの買わないと……。

「できたぞ」

「待つてましたあ！」

セフィは元気だなあ。

席に着くと早速食べ始めた。

にしても、ほんと美味そうに食ってくれるな。こういうのを見ると作ったかいがあるってもんだ。

さて、ニユースでも見るかな。

俺がソファの方に移動しようとしたとき、不意に服を引っ張られる感じがして何かと思い振り返ると、メシアが俺の服をつかんでいた。

「ん、どうした？」

「お前は……食べないのか？」

へえ、こいつは意外と周りのことよく見てるんだな。

関心しつつ応える。

「ああ、家の炊飯器だと6人分しか飯が炊けないからな。お前らの分しか作ってねえよ。」

その言葉を聞いて全員の手が止まった。

「キョウウの分、無いの？」

「気にしないで食ってる、俺は今あんまし腹へってねえんだよ」

なんてね、めっちゃ腹減ってるけどこいつら成長期だしな。しっかりと食わせてやらねえといけないからな。

「でも、ボクらだけってなんだか悪いですよ」

「うっせえ、腹へってねえんだからいいんだよ。それに午後から買い物行くから、ちやっちやと食っちゃいな。」

「ほんと!?! やったー買い物、買い物」

セフィがはしゃぐ。それにつられて他の奴も止まっていた手が動き始める。

「つたく、変なところで気使いやがってよお。」

ソファに座ってテレビをつけるつと隣にメシアがやってきた。

「なんだ、まだなんかあるのか?」

「嘘ついてる。朝も食べてない・・・」

まったく、こいつはしっかりと見てやがったのか。

「心配してくれてるのか? はは、ありがとな。俺のことはいいからさっさと席戻って飯食っちゃいな」

そう言ってメシアの頭を撫でてやる。すると顔を真っ赤にして戻っていった。

可愛い奴だな。

つと、聖子に電話して買い物付き合ってもらわなきゃな。野郎どもは俺でもいいがセフィ達女子のことは流石に俺じゃまずいもんな。

「もしもし、聖子か？わりいんだけど買い物つきあってくれねえ？」

「ああ、そつだ。それじゃ2時に……」

第四話・買い物へ行こう〜前編〜（後書き）

後編へ続きます。

第五話・買い物へ行こう〜後編〜（前書き）

更新遅れてすみません。

今回は若干短めです。



## 第五話：買い物へ行こう〜後編〜

- 視点：狂式 -

はあ、今日何度目になるか分からないため息をつき額を押さえる。

「てめえら！店中で騒ぐなっつってんだろ！！」

今俺は駅前のデパートに買い物に来ている。

午前中は部屋の片付けをした。

んで、あいつらに必要な服だとか家具だとかを買いに来たんだが・・・。

やっぱりまだ子供なんだな。こつちの世界の物が珍しいのか、そりやもう騒ぐ騒ぐ・・・。

おかげで頭痛いわ。

「さつさと服選べつての！まだまだ買わなきゃいけない物あんだよ！」

だが、俺の言葉などまるで聞こえてないかのように騒ぎまくるバカ共。

ムカついたので天誅をお見舞いしてやった。

「痛い」

イヤクウとフィヴは頭を抱えてその場にうずくまった。

しかし、フィルだけは俺の天誅を避けた。

なかなかやるなフィル、だが甘い！！

その直後、フィルの頭に俺の靴が命中した。

「な、なんで靴がそんなに重いんだ・・・」

イヤクウ達同様に頭を抱えるフィル。

「俺の靴は安全靴に手を加えて5キロにしてあるからな。鍛えるためにな。まあそんなことよりさっさと服選んでこい、まだまだ買う物は沢山あんだから時間かけさせんな」

「はあ〜い」

無邪気に返事をして駆けだした二人を見送った俺と・・・

「フィル？」

「何だ？」

なんでこいつはここにいるんだ？

「服選びに行かないのか？」

「別に、服にこだわりは持ってないし、着ればいいとしか考えてないからフィヴ任せ。だからここにいます。僕はまだ信用したわけじゃないからな。」

そう言うフィルに俺は

「どうぞご勝手に、でも俺は自分で選んできたほうが良いと思うぞ。」

「

と、言っちゃった。

フィルが首を傾げているのでイヤクウとフィヴがいるところを指差した。

イヤクウとフィヴはなにやら、やたらとフリルのついた服やら無駄な装飾の多い、女性用の服ではないかと思われる服を持ってあーだこーだ話している。

その声は俺らのいるこの位置まで届いている。

「見てフィヴ！ピンクのフリフリなんてフィルに似合いそうじゃない？」

「いや、フィルにはこっちのぼんぼんのついた服が似合うよ！」

「じゃあこっちのなんてどうかな？」

早くも打ち解けているイヤクウとフィヴだが、なんて未恐ろしい会話をしていることだろうと、俺は思った。

当のフィルはと言うと、すでにイヤクウ達のところに行き、その手に持つてる服を取り上げ戻しているところだった。

さて、聖子達の方はどうなったか・・・。

リアが要るから大丈夫だとは思うがその分セフィが・・・あとメシアも意外と曲者だよな。

なんてことを考えながら三人を見ていた。

- 視点・聖子 -

いやはや、リアちゃん達はなんていい子なんでしょう。

キョウ君が言うには「やたらと問題を起こすから気をつけてくれ」  
つとのことでしたが、仲良く服を選んでいる所を見るととても問題を  
起こしそうには思えませんねえ。

しかし、実際はそんな穏やかな光景ではなく・・・

「ちょっとセフィ！そんなフリフリのついた服をいっただいどうしよ  
うとしてるの！」

「どうするもこうするも買うに決まってるじゃん！」

「バカなこと言ってないでもっとまともな服選んでよ！キョウ君さ  
ん待ってるよ！って、メシア何やってるの!？」

「試着・・・？」

「なんで疑問系なの!？それに試着ならあそこの中での!？こん  
なところでいきなり服脱ごうとしないでよ!？」

「うん」

「で、今度は何やろうとしてるのセフィ!？」

「リアの服を脱がせようと思って・・・テへ」

「へて じゃないよ！なんでそんなのボクに着せようとするのさ！ボクのはもう選んであるよ！」

そんな激戦が繰り広げられているとは露知らず、聖子も自分好みの和服を探していた。

でも、キヨウ君も男の子なんですわねえ。

電話で、買い物に付き合ってくれて言われたときはなぜかと思いましたよ。

私なんかよりよっぽど買い物上手なキヨウ君が、俺じゃどうしようもないなんて言うものですから何事かと思ったのですよ。

でも、来て見て分かりましたわ。リアちゃん達の下着のことだったのですわね。

これじゃあキヨウ君ではどうしようもありませんわね。あ、このお洋服の模様可愛いですわ。

私口下手なんで話すのは苦手なのですが、視点持ちは話さなくていいので楽ですわねえ。

これから私視点でいてくれませんかしら？こっちのお洋服も素敵です。

そんなこんなで狂式が聖子達と合流したのは1時間後のことだった。

聖子達と合流したあと、聖子にイヤクウ達を預けて俺はあいつらの寝るベッドを買いに来た。

人数多いし置く場所ないから二段ベッドだな。

高い買い物だが仕方ないか・・・。

ん？なんで俺がそんなに金持つてるか疑問だつて？

そんなの簡単だ、年末 ヤンボで1等あてた。

まあ、他にもいろいろ事情はあるが・・・その辺はまた今度な。

「あの、すみませんこの形式の二段ベッド二つください。」

布団をひかせても良かったんだが、流石に6人分も家に敷布団は無い。

んで、「布団買うくらいならベッドでもいいか」ってことで今ベッドを買いに来てる。

一頻り手続きだのを終わらせたんで、聖子達の所に向かった。

あいつらは今自分好みの食器を選んではずなんだが・・・食器売り場にいないってどういうことだ？

しょうがない、聖子に電話してどこにいるか聞いてみるか・・・。

俺がポケットから携帯を取り出したとき、聖子の方から電話がかかってきた。

「もしもし」

『も、もしもし、キョウ君？』

「そつだが、お前ら今どこにいる？」

『えっとね、食器買い終わってもキョウ君が来る気配がなかったから、屋上にあるゲーム置き場で遊んでるの』

ふむ、だからここにいなかったのか。

「そうか、……わりいんだけどそいつら引き連れて先に帰っててくれないか？」

『え、いいけど、キョウ君はどうするの？』

「俺は夕飯の買い物して行くから遅くなる」

『わかった、またね』

「またな」

電話を切ったあと、俺は食品売り場に向かった。

に、しても買い物早かったな……絶対にもっと時間かかると思ってたんだけどな。

まあ、いいか。

でも、人が多いな……駅前だから仕方ないのだが、やっぱり人ごみはなれない。

やっとのことで食品売り場に着くと、そこにはなぜかリアとセフィとメシアが居た。

「なんでお前らがいるんだ」

「荷物持ち……」

「ボクらキョウウジさんの手伝いできたんです」

「だからお菓子買って！さっきシヨウゴが買ってくれたのすっごく

美味しかったんだ！」

なるほど、物で釣ったか。  
妙に納得してしまった。

それからリア達と買い物を買って済ませて今はデパートの中にある喫茶店で一息ついている。

セフィがやたらと寄りたがるから仕方なく入ったのだが、おすすめにチョコパフェと書いてあるのを見てしまった以上頼まないわけにはいかない。

何を隠そう俺はチョコレートが大好きだからな。

「んで、お前らは何を頼むんだ？」

まあ、俺が頼むんだからこいつらはダメなんて意地悪はしない。

「ボクとメシアはこのストロベリータルトって言うのでお願いします。」

「あたしはキヨウと一緒に！」

「はいよ、すみませーんオーダーおねがいします。」

「はいおまたせいたしました……狂式？」

「は？」

思わず声を上げちゃった。

オーダーを取りに来たのは何と香織だった。

「へー、お前給仕のバイトなんかしてたんだ。しかも、こんなとこ



るで」

「う、うるさい！さっさと注文しろ！」

いや、人生何があるか分からないとはまさにこのことだな。こんなところで香織に会うなんて夢にも思ってたぞ。注文を取り終えると香織はさっさと行ってしまった。顔が真っ赤になってて面白かったけどな。

「あの、キョウジさん」

「ん、なんだリア？」

「今のって昨日家に来た人ですよね？」

「そうだけど、それがどうした？」

「い、いえ、なんでもないです。」

まったく話が読めず首をかしげていると。

「キョウが昨日寝言でカオリの名前呼んでた事聞こうとしてたんじゃないの？」

なんてことをセフィが言った。

俺は別段なんとも思っていないのだがリアがめちゃくちや慌ててる。その慌てっぷりは飲んでいた水を吹き出さんばかりの勢いで思いきりむせている。

「で、キョウはどんな夢みてたの？」

「バカセファイ！そんなこと聞くなんて失礼だよ！」

「気になる……」

「メシアまで!？」

リアは苦労性だな。

気管支に水が入って思いっきりむせてたしまだ涙目だ。

「ん、別にたいした夢じゃねえよ。ガキのころ、香織にいじめられてた夢見てた。いや、あのラリアットは見事な一撃だったと今でも感心するな。」

んな話をしてたらチョコパフェとストロベリータルトを持った香織がいた。

あ、タイミング悪かったかな？

「あ、あんた、なんつー夢見てんのよ！人を何だと思ってるの！」

俺らの前にそれぞれの品を置きながら香織が怒鳴る。

「何だと思ってるって野獣？」

「ばか！」

香織が手に持っていたトレーで容赦なく人の顔を叩きやがった。実にいい音がしたね。バシーンって……冗談にならないほどいてえ……。

俺の反射神経なら避けられないか？って

いや、今のは見切れねえって。まったくモーションが無かったんだから。

それにチョコパフェ食ってるときに叩くんじゃねえ……。その様子を見ていた3人がなにやらため息をついている。

「キョウウって意外とバカだね！」

「うん」

「キョウウさん……」

なんだってんだ……。

因みにバカとか言ったセフィのチョコパフェを半分くらい食ってた。むかついたから。

それから俺らは会計を済ませた。

このとき、香織に二度と来るなと言われたが、よし、またからかいに来よう。

それから家に帰ってきたんだが……

「おっす狂気！邪魔してるぜ」

なんで殉がいるんだ？

そして聖子はどこに行った？

自分の顔がすごく引きつってるのが分かる。

「いやあ、今日さ家に親いなくてよお夕飯ご馳走になりました！ちなみに、聖子さんは用事があるからって帰ったよ。」

「なるほど、聖子がない理由は分かったから貴様も帰れ」

容赦なく殉の頭を蹴り飛ばす。

「ひでえ！親友になんてことを！」

「貴様と親友になったことをこの上なく後悔してる」

「お前！人がせつかく暇つぶしになるだろうと思ってDX人  
ゲイ  
△持ってきてやったのに！」

「タノンダオボエハナイ」

しかし、他の奴らが興味を持ってしまった。

「ジユン、なにそれ？」

「お、セフィちゃん興味あるか？」

「あるー！」

「それじゃあために皆でやってみますか！」

はあ、もうほんつと頭痛いわ・・・

俺は額を押さえながら夕飯を作りに向かった。

今日の夕飯は激辛カレーだ覚悟しやがれ。特に殉、貴様は辛いのが  
苦手だったな、はっはっは！のた打ち回るがいい！

その晩、狂式以外の悲鳴が鎖野家に響き渡った。

第五話：買い物へ行こう〜後編〜（後書き）

ゲホゲホ

「なんだ、風邪でも引いたのか？」

そうらしい、気温の変化に弱いんだよ俺。

「ふうん、あつそ」

あ、何お前大丈夫の一言も無いわけか？

「だってお前、殺しても死にそうも無いじゃん。それにバカは風邪引かないって言うからどうせ更新遅れた言い訳だろ？」

んなわけないだろうバカが、ゲホゲホ

「あ〜はいはい、じゃあさっさと帰って寝てれば？」

いや、唯一の俺の出番が・・・

「うつせえ寝てる！」

ゴフウ！お、おま・・・鳩尾は・・・

「つたく、無駄な手間かけさせやがって。多分、次の後書きに作者は来れそうも無いので俺が適当にもう一人呼んでくるんで次作もお楽しみに！」



第六話・狂気の風邪（前書き）

やっと更新できました・・・。

## 第六話・狂気の風邪

・視点：セフィ・

やっほーセフィだよ！

キヨウ達と一緒に暮らし始めてもうすぐ二週間が経とうとしてるんだけど、何だかキヨウの様子が変なの。

いつもならあたしとリアが騒いでると「静かにしろ！」ってハリセンで叩いてくるのに、ここ二、三日は「うるせえぞ」としか言わないし、それにあんまり元気もないの。

朝、誰よりも早く起きて朝ごはんの用意をしてるはずなのに、やっぱり二、三日前から青い顔をしてふらふらと起きてくるようになってたんだ。

あたしは起きるのが一番遅いのに、そのあたしより遅いんだもん。それで気になったから、昨日はキヨウを起こしに行ったの。

そしたらキヨウ、凄くうなされてて、汗びっしょりだったの。

今日も起きてないなキヨウ、でも土曜日って学校がお休みの日らしいからゆっくり寝かせてあげよう。

「おはようセフィ」

「「おはようございます魔王様」

「おはよ〜」

リビングに行くとりア達が挨拶してくれた。

なんかこういうのって気分がいいね！

でも、なにかたりない気がするよ？



「あれ？イヤクウとメシアは？」

うん、二人の姿が見当たらない？

「イヤクウ達ならキヨウジさんの様子見に行つたよ。」

なるほど、キヨウが心配だったのはあたしだけじゃなかったのか。あたしが椅子に座ると丁度キヨウが起きてきた。やっぱり青い顔でふらふらしてる。

「キヨウおはよ」「キヨウジ、起きちゃダメ」・・・？

あたしの挨拶はメシアの言葉に遮られた。起きちゃダメってどうしたんだろう？

「狂武くん熱あるんだから寝てないと」

「うるせえ、大丈夫だつってんたる」

でもその言葉は弱々しく、起きているのもつらそうだった。

「キヨウ熱あるの？辛いなら寝てなきゃ治らないよ？」

あんまり辛そうなキヨウは見えてたくないな。

あたしもキヨウに寝てるよう言った。

「じゃあよ、俺が寝てたとして飯はどうすんだ？食わないツツツ訳にもいかねえだろ。」

う・・・確かに、ご飯が食べられないのはきついよ・・・でも今

のキョウに無理はさせられないよね、うん。

「あ、あたし達で何とかするから大丈夫だよ、リア」

あたしに料理なんて無理だからリアに任せるつもりで話を振った。急に話を振られてリアあせってる。

「う、うん！そうですよ、ですからキョウジさんは寝てください。」

けどリアって料理できるのかな？  
そんな疑問が頭をよぎったとき

「リアルトって料理苦手じゃなかったっけ？確か一緒に旅してたときにそんなこと話した記憶あるよ僕」

「うん」

イヤクウとメシアが鋭い視線でリアを見ている。  
リアは目線をそらしている。

この家にはまともに家事ができる奴が一人も居ないのか……。

「「「お前が言つな」「」」

はにゃ！？言葉に出してたみたい。視点持ちつて意外と怖い……

「ほら、だから俺が寝てたんじゃお前らが飯食えないだろ。それに、まだこっちに来て日が浅いんだ。調理器具の使い方なんてわかんねえだろ。家には専門的な器具まであんだから。」

「い、一日くらい食べなくても大丈夫だよ！あたしだって魔王だし、リア達だって旅してたんだから食べない日とかもあつたでしょ！だから一日くらい食べなくても「ダメだ」ふえ？」

「成長期のお前らが食事を抜くなんて事すんな。体に良くねえ」

キヨウは怖いけど根は優しいんだよね。だからあたしはキヨウに・・・  
／／／／／／／  
な、なんでもない！それより今はどうにかしてキヨウを寝かせないと。

「で、でもそれってキヨウも同じじゃないの？」

お、キヨウが黙った！これはきつと効果があつて

「セフィ・・・」

「ふえ？なにキヨウ？」

「少し・・・黙ってる」

ヒイイイ、キヨウ怖い！いつもの三倍くらい怖い！

今の一言に全員が黙りこんでしまった。

けどすぐに声を和らげて

「お前らが俺の心配してくれていることは分かってんだ。ありがとうな。俺は大丈夫だから気にするな」

なんて事を言った。

うう、キヨウこんなときにそんな綺麗な顔で笑わないで。惚れちゃ

いそうになっちゃったじゃない・・・もともと惚れて・・・なんでもない！なんでもないよ！うん  
いつも一緒に居るし、口悪いから忘れがちだけど、キョウってすごく綺麗なんだよね、顔に限らず声も。なんていうか透き通るような声質だし、ソプラノともアルトともつかない声してるから優しくしゃべると本当に女の人なんじゃないかって思う。普段はあえて声低くして喋ってるみたいだけど、あたしはやめてほしいと思ってるんだよ。

「さて、朝飯でも作るか」

騒いでてすっかり忘れてたけど、もう9時にもなるのに朝ごはん食べてないんだよね。

おなか減っちゃった。

それからキョウが焼いてくれたトーストとスクランブルエッグを食べた。

キョウはお粥って言うのを食べてた。そのあとキョウはソファで寝ちゃってる。

あたしたちは今リビングでドラマって言うのを見てるの。イヤクウ達は自分たちの部屋でゲームでもしてるんじゃないかな？この前ジヨンが置いてったやつ。大 闘なんとかブラザーズDXってゲーム一応あたしたちの部屋にもテレビはあるんだけど、今はキョウの近くに居たいから・・・ノノノ  
ふあゝ・・・なんだかあたしも眠くなってきたな・・・  
あたしも寝ようっと。

立ち上がってキョウの寝ているソファの近くに腰を下ろす。

足を投げ出すように座ってそのままソファに寄りかかり、セフィは眠りに落ちた。

- 視点：イヤクウ -

「えい！あ、それ酷い！」

あ、どうもイヤクウです。

つてあれ？なんで僕視点なんですか？

まあ、気にしても仕方ないですね。

僕達は今スマツ ユブラザーズDXというのをやっているんですが、なかなか面白いんですねこれが。

テレビ画面ではフェヴが使っているピンクの丸いのが僕の使っているキツネみたいなキャラを吸い込んでいるところです。

因みにファイルは緑色の服を着た剣士を使っています。

「あゝ負けちゃった。ところでさ、ファイル達って魔族なんだよね？悪魔とどう違うの？」

ゲームに疲れた僕は前から疑問に思った魔族と悪魔の違いについて実際の魔族であるファイルに聞いてみた。

フィヴは相変わらずゲームに熱中していて話なんてまったく聞いていない。

「そうだね、難しい説明になるけど僕らが住んでいた世界では、悪

魔は理性を持たず、無差別に生き物を襲う奴らのことを言うんだ。それに対して魔族は魔の力を司る種族って意味になるの。魔族の対極に位置するのが神の力を司る種族、神族になるんだ。神族を天使だのと勘違いしてるやつも多いけど、神族と天使はまったく別物だよ。天使は悪魔の対極だから出会うものすべてに祝福を与えるの。ちなみに、魔族にはそれを象徴する角があり、神族にはそれを象徴する輪を持っているんだ。」

「む、難しいんだね・・・」

「ついでに言うと、人族の対極に居るのが獣族、妖精族の対極にいるのが亜種族と呼ばれているやつらさ。」

これでも頭はいいほうなだけだな・・・

「ごめん、もう少し簡単に説明してくれる？」

「えっと、攻撃魔法と補助魔法って言えば分かりやすいのかな？攻撃魔法を主に使うのが魔族、補助魔法を主に使うのが神族になるんだ。」

「ふーん、じゃあ人間の魔法使いとどう違うの？」

「それは体内で魔力を精製できるかできないかの違いだよ」

「どういうこと？」

「イヤクウは魔法を使うときに杖をもって呪文を唱えたりしないか？」

「するけど、それが普通じゃないの？」

「人間はそうかも知れないけど魔族の僕らは杖なんか要らないし、呪文も必要ないんだ。それが体内で魔力を精製できるかできないかの違いなんだ。」

「どうして！すっごく羨ましいんだけど」

「人間は体内で魔力を精製できないから、空気中に漂ってる魔力を杖に集めて魔法を使うのに対して魔族は自分の体の中にあるから直接使える訳なんだよ」

「へえ、フィルって物知りなんだね、見直しちゃったよ。」

すると唐突にフィヴが会話に割り込んできた。

「他にも魔族には特殊な力があるんだよ！」

「そうなんだ、ってフィヴゲームは？」

「ん、飽きた！」

フィヴはフィルと違って飽き性だなんて思う。双子なのになんでこんなに性格が違うんだろう・・・気にしても仕方ないか。

「でも、特殊な力ってなんなの？」

「ふふふ、知りたい？」

今ちよっただけフィヴに殺意が芽生えたよ。

「すっごく知りたいです」

自分でも思っただけだと思いつきり棒読みだよ。あ、でもフィヴはそんなの気にしてないみたい。

「そこまで言うなら仕方ないな！特別に教えてあげるよ！」

フィヴの隣でフィルがため息をついている。心中をお察しするよフィル。

「僕の能力は“ナイトメア”悪夢を見せたり他人の夢を見たりすることができるといっても見ることは僕だけなんだけどね」

「そんなことができるんだ」

これには素直にびっくりしたよ。でも、ちょっと引っかかるな……

「僕のってことはフィルは違うの？」

「うん、僕のは“ミラージュ”といって屋気楼を見せることができるんだよ。対象を指定すればそれを映し出すこともできるよ。」

「と、いうと？」

「たとえばね、今やってたゲームの戦闘シーンを指定すれば……」

フィルはそう言って目を瞑り自分の額に手を当てた。するとさっき



やっていたゲームの戦闘シーンが突然部屋に現れた。  
しかし、フィルが手を離し、目を開けるとそれはすべて消えてしま  
った。

「つとこんな感じに見せる事ができるんだけど、疲れるからあんま  
りやりたくないんだよ。」

「すごい・・・」

僕が関心していると、フィヴが何か良くないことでも思いついたの  
だろう、顔が物凄くにやけている。正直少し気持ち悪い・・・

「ねえイヤクウ、フィル、最近狂さんよくうなされてるよね？」

突然なにを言い出すのかと思ったら・・・、今キョウジさん熱出し  
てるんだからそっとしておいてあげようよって言おうとしたとき、

「どんな夢見てるのか気にならない？」

「・・・・・・・・・・ちょっと気になるかも。」

「でも、他人の夢見るなんて悪いよ。うなされてるんだから良い夢  
じゃないはずだし、それにそんなことできるの？」

「僕とフィルが力をあわせればできるよ!」

フィヴはやる気満々だけどフィルはすごく嫌な顔している。

「僕、疲れるから嫌だって言ったばかりなんだけど・・・」

けれどフィヴはまったく聞いていない、フィルはため息をつき肩を落としている。

どうやらこうなったフィヴはなにを言っても聞かないらしい。

「よし、じゃあ狂さんが寝てるリビングに行こう！」

フィブはそう言って部屋を出て行った。仕方なく僕らも後を続くことにした。

- 視点：リア -

ボク達がドラマを見終わって見るとなぜかセフィはキョウジさんの寝ているソファ―に寄りかかって寝ていたので毛布をかけてあげようとメシアと一緒に毛布を取りに部屋に戻ったとき、イヤクウ達の話声がボクたちの部屋まで届いた。

あの話には正直、ボクもメシアも驚きを隠せませんでした。

今はリビングでメシアと料理の作り方の乗っている本を読んでいきます。

またこういうことがあったときに、キョウジさんに少しでも負担をかけないようにするためです。

「メシア、これなんて簡単そうだよ」

「うん・・・、でもこっちの方がおいしそう」

「まずは簡単なのから始めないと、失敗して散らかしたらキョウジさんきつと怒るよ?」

「・・・それは嫌」

感情表現は乏しいメシアですが、なれるとすごく親しみやすいんですよね。

でも、キョウジさん大丈夫かな?時々うなされているのですが、その度に心配になります。

セフィがちゃっかりとキョウジさんの指をつかんで寝ているのが少し羨ましいですが、セフィもキョウジさんのこと心配してるのが伝わってきますね。キョウジさんがうなされるたびに指を握る力が強くなるんですから。

そうしていると、フィヴ達のリビングに入ってきてキョウジの近くに寄っていった。  
なにする気だろう?

「どうしたのフィヴ、お昼にはまだ少し早いし、キョウジさんならまだ寝てるよ?」

「キョウジ・・・起こすのよくない」

メシアもそれに気づいていたのかフィヴ達にキョウジさんを起こさないように注意してる。

けど、フィヴは「寝ててもらわないと困るからちょっと静かにしてて」とか言ってきた。

ほんと、なにする気なんだろう？

様子を見てみると、フィヴがキョウジさんのおでこの手を当てて何かをぶつぶつぶつぶやいている。

しばらくすると、

「リンク完了、いつでもいいよ」

とフィルに合図をだした。

今度はフィルがフィヴの頭の後ろに手を当てて目を閉じた。すると、リビングがいきなり外に変わった。

「え!？」

「!？」

思わず声とあげると、イヤクウに静かにと注意されてしまった。

どうやらこれがフィルの特殊な力らしい。

ボク達は「夢を見ることができ」る」辺りまでしか聞いてなかったから、フィルにこんな力があるなんて思ってたませんでした。

イヤクウの話によるとこれはキョウジさんの夢を映しているらしいんです。

キョウジさんの見ている夢、ちょっと気になる。

けど、ここはどこだろう？

見たことのない景色だった。

といっても、まだこの世界にきてから二週間しか経っていないから知っているのはこの家の周辺だけなんだけど。

「はにゃ?これは・・・フィルのミラージュ?」

どうやらセフィが起きたらしい。





『はにや？これは・・・フィルのミラージュ？』

どうやらキヨウジさんが眠り始めてからさつきボタンを押すまでのここでの会話は全部入ってるみたいです。

キヨウジさんがそれを最後まで聞き終わると物凄い笑顔でボク達の名前を呼んだ。

すみません、すごく怖いです・・・

フィブにいたってた即座に逃げ出そうとしてキヨウジさんに捕まっています。

「覚悟はできてるんだろうな？」

ヒイヒイヒイ、ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！  
あああああああ！

「天誅！！！！！！！！」

【スパパパーン！！！！】

うう、痛過ぎて言葉にならない・・・

全員涙目でうずくまっている。

で、キヨウジさんは・・・ちょ！倒れますよ！？

あわててキヨウジさんの所に駆け寄ったとき、丁度良くジュンさんが来てくれてキヨウジさんをベッドまで運んでくれました。

その後、ジュンさんが頼んだ牛丼を皆で食べてキヨウジさんの看病をしました。

ジュンさんに怒られているキヨウジさんはなんだか「屈辱だ」とか言っていました。





**第七話：真夏に始まる風物詩！？（前書き）**

すみません、更新がだいぶ遅れました。

その分、良い物ができたと自分では思っています。

この話を読んだ感想や評価をドシドシ書いてくだされば光栄です。

## 第七話：真夏に始まる風物詩！？

- 視点：狂式 -

今は夏休み前の自宅学習ってことで学校がねえ。

まだ初夏だと言つのに連日35度を突破するという異常気象。

それに突き刺すような殺人光線が降り注ぐ炎天下の中、窓を全開にしたりビンゲで俺は本を読んでいる。

「キヨウ〜・・・暑いい〜」

「そりゃ夏だしな」

「違うよキヨウ部屋が暑いって言うてるの〜、エアコンつけてよ溶けちゃうよ〜」

殺人光線の餌食になっているセフィがクーラーを入れると騒ぎまわっている。

騒がしい奴だな。そんなに暑いのが嫌ならそんな日のあたるところにいるんじゃないか。といつても絶対に動かないだろう。なぜなら

「扇風機の前に座り込んでいるやつがなにをほざいてやがる」

という訳だ。

せつかく人が読書してるって言うのに。

でも、確かに今年は例年に比べて格段に暑い。

けど、窓を開けとけばそこまでもない。

風も吹き込んでくるし、カーテンをすれば殺人光線も幾分和らぐ。

そこに扇風機があれば十分快適だ。

扇風機の前に居るバカは動く気配は一向にないがな。  
俺は今、ゆっくり読書がしたいんだ！

「だって〜風がないと暑いんだもん〜」

「……………暑くなくなりゃいいんだな？なら俺が身も凍るような話をしてやるよ」

「ほえ？どんなお話？」

「怪談話さ……………」

俺はそう言って静かに語り始めた。

そう、それはわりと最近の出来事だ。

とある青年がいつものごとく塾を終え帰路に付いていた時の事。

塾は終わるのが遅く、青年が家に着くのはいつも真夜中の12時を過ぎる。

その日もいつも通り、塾が終わったのが夜の10時。

青年はいつもと変わらない帰り道を歩いていた……………はずだったが、  
だがいつの間にか青年はまったく知らない道を歩いていたのだ。

そのことに気づき、すぐさま引き返そうとしたが、青年は今まで自分がどの方向から歩いてきたのかがまったく分からなくなっていた。  
困り果てた青年は、誰かに道を探ねようと適当に進み始めた。

しばらくすると、十字路で一人の老人に出会った。

その老人は薄暗い夜の闇の中でも一際目立っていた。

しかし、青年にはそんなことを気にする余裕はなく、その老人に駆け寄ると

「×通りにはどう行けば良いのでしょうか？」と尋ねた。

すると老人は、自分が歩いてきたであろう道を指してこう言った。

「ここをまっすぐに進めば出られますよ。ただし、何があっても十字路では決して立ち止まらないでください。」

青年は老人にお礼をいい、老人が指差したほうに駆けていった。

老人と別れてしばらく行くとさつきと同じような十字路に差し掛かった。

青年は老人に言われたとおり立ち止まらず、通り過ぎようとしたとき

「もし、ここいらで黒い鞆が落ちてはおりませんでしたか？」

という声がして、十字路の真ん中で声のした方へ振り向いた。

そこには190センチはあるのではないかと思われるほど背が高く、背広を着込み、つばの広い帽子を深く被った男性が立っていた。

男性はキョロキョロと辺りを見回すようなしぐさをすると、近くの電柱に立てかけられるように置かれた黒い手提げ鞆を見つけ、それを取りに行った。

「いやあ、すみませんねえ呼び止めてしまつて。」

青年はなんて答えていいかわからず言いよどんでいると

「ああ、私ちよいと急ぎの用がございますので失礼させていただきます」

とだけ言い残し、暗い夜の道の彼方へ消えていった。

それから青年がしばらく行くと、また十字路に指しかかった。

「おや、あなたは先ほどの」

また唐突に声を掛けられた。

先ほど同様に立ち止まり、声のする方を見るとさつきの男性がそこに立っていた。

よく見るとその男性は仮面を被っており、素顔はわからない。

「失礼を承知でお願いがあるのですが、聞いてはもらえぬでしょう

か？」

なにやら男性は忘れ物をしてしまったらしく、急ぎ取りに戻らなければならぬらしい。

しかし、それには鞆がどうしても邪魔になるということなので、鞆をもって先に行つて欲しいとのことらしくつた。

青年は困っている者をほおって置ける性格ではなかつたため、それを快く引き受けることにした。

青年が鞆を受け取ってからしばらく歩くとまた十字路に差し掛かつた。

今度は男性が先に十字路に着ており、青年から鞆を受け取ると深々とお辞儀をして去つていった。

それからまたしばらく進むと、同じような十字路に行き着いた。

青年がこの十字路はいつまでつづくのだろうか、いつになれば元の通りに戻れるのだろうと考えていると、前の道から先ほど分かれた男性が歩いてやってきました。

いい加減不審に思い

「ご利用の方は大丈夫なのでしょうが？」

と尋ねると、男性はゆっくりと仮面に手を掛けながらこう言った。

「あなたは、四つ路で同じ者に四度合よたひうことの意味を知っておりますか？」

青年は男性から目を離さないようにしながら首を横に振つた。

「それは……死界、つまりは冥府へ誘われるということですよ。」

男性はそつといいながら仮面をはずした。

その顔は、自分と同じ顔でその手に持っていたはずの黒い鞆はいつの間には柄の長い鎌に変わつていた。

青年は、少しずつあとづさりをして距離を取ろうとした。

すると何かにぶつかり振り返るとそこには最初に出会つた老人が居た。

しかし、その老人はすでに赤く染まつたその手で青年の首をつかみ、

鬼のような形相で

「何があっても立ち止まるなど言ったのに」

と、それだけ言うと彼の目の前で首を飛ばされ、青年を真つ赤に染め上げたあと、落ちた頭は断末魔の叫びをあげながら青年の首に噛み付いた……………

その後、その青年の姿を見たものは誰も居ない。

今でも、その青年が最後に通った道を通るとどこからともなく断末魔の叫び声が聞こえて来るそうだ。

「どうだ？少しは暑さも紛れただろ」

俺の話聞き終えたセフィは青い顔をして震えていた。

いつ間にやら集まってきたリアやイヤクウ達も同様に震えている。

「こ、怖かった……………」

「キョウジさんの話し方がもう……………」

ふう、たまにはこうやって怪談話するのもわるかあねえ…………が、しかし、人の事をなんだかんだ言ってるこいつらがちょっとむかつくな。

なにが「本物のお化けみたい」だ、このやろつ。

「てめえら、悪さはっかりしてるとその青年みたいに冥府に連れてかれちまうぞ」



半泣きで俺にすがりつくセフィとイヤクウ  
本当に迎えに来たわけじゃねえよバカ  
俺がインターフォンについているボタンを押すと

「迎えに来たぜー!!」

とか、バカみたいに元気な声が聞こえてきた。  
俺には殉の姿が見えてるからなんとも思わないが、後のメンバーは  
マジでパニックだ。

「ほ、本当に迎えに来たああああああああ!!!!!!!!!!」

「いやああああああ!!!!!!!!キョウの言うこと何でも聞く  
から!!」

「てめえらうるせえ!!!!!!少し黙れ!!!!」

ソファのクッションの下に隠れているメシアや抱き合って震えている  
フィルやフィヴ、リアは完全に気絶してる。  
あゝめんどくせえ!!!!

「殉!あがって来い!セフィとイヤクウはいい加減離れる!メシア、  
ちよつとリアたたき起こせ!」

一喝して、混乱を収めてからソファに座りなおす。  
疲れる・・・ん、そーいや殉のやつ、迎えに来たとか何とかほざ  
いてやがったよな?

「オッス狂弔!!今年もアレの季節だ!早く行こうぜ!!」



「アレ・・・？ああ、アレか！そくだな日ごろのストレス発散といこうじゃないか！」

やべえな、すっかり忘れてたぜ。

夏、会談とくればもうアレしかない。

会話に花を咲かせてる俺たちを他所にセフィ達は状況が今一理解できていない様子だった。

「キョウジさん、さつきから言ってるアレってなんですか？」

気絶から復活したリアがそう尋ねてきた。

そついやこいつらは知らないんだっけな。

「お前、夏に怪談話ときたら次はもうアレしかないだろうが」

全員頭の上にはてなマークでも出してます的な顔してやがるな・・・  
・まあしょうがねえか。

「百鬼夜行だ！」

俺と殉が見事にハモった。

こいつ、学校ではいつも弄り倒してるのによくもまあ、ここまでボジティブにいけるな。

それにここまで俺と息が合う奴も珍しい。

実はマゾですとかいうなよ？気持ち悪いから。

「百鬼夜行？」

「なんだ、テメエらしらねえのか？」

「いいんじゃないのか狂式？行きゃわかることだし」

「それもそうだな、よしお前ら、これから出かけるから武器もってこい」

あいかわらずなにがなんだかわからない様子だが俺の言葉に各自、武器を取りに言った。

その間に“百鬼夜行”について説明してやろうじゃないか！！

普通、百鬼夜行ってのは深夜の町を集団で徘徊する鬼や妖怪の群れ及びその行進のことを言うだろ？。

だが！！こんな真昼間からそんなことやるわけねえ！

これから起こる“百鬼夜行”の正式名は“百鬼夜行・バトル・トーナメント！！”通称CBT。

どうだ、こんなの誰も予想してなかっただろ？

最初、CBTのことを知ったとき俺も啞然としちまったのを覚えてるぞ。

ドタドタと言う足音とともにリビングにリア達が戻ってきた。

「よし、そんじゃま、いきますか」

俺たちはまず学校へ向かった。あ、もちろん武器は大っぴらに持ち歩くとやべえからギターケースやらにしまつてある。用意周到だろ？全部殉に用意させたんだがな！！

学校の正門に着くと、今度はそこから10分くらい歩いたところにある空き地に向かった。

いや、空き地だった場所に向かったと言った方がいいのか？

今俺らが居る場所は、PASSING SHOWERという名のカフエに居る。

PASSING SHOWERというのは通り雨という意味らしい。

どうでもいいか。なぜ俺たちがこんな店に来ているのかというと。

「すみません、百鬼夜行の参加登録お願いします。」

ウェイトレスらしき女の子にそう言っただけで俺たちは適当な席に着いた。

「あの、キョウウジさん。これからなにがあるのか教えてもらえませんか？」

「まったく、しょうがねえな」

俺はさっきした説明をもう一度こいつらにしてやった。

まあ、さっきはこいつらいなかったんだけどな。

一通り説明が終わると香織と聖子が店にやってきた。

「どうも、こんにちは皆さん。」

「応援に来てあげたわよ」

香織は相変わらず性格がきついな。

「うるさい！」

おっとまた口に出しちゃったぜ。

「……ん？気づかれちゃったか？わざとに決まってるんだろ。」

投げられたスーパーボールを見事にキャッチして聖子に渡す。

香織に渡したらまた飛んできそうだから。

「皆さん登録のほうはお済になりましたの？」

「いんちゃ、まだっすよ聖子さんやっば登録は全員そろってからじゃないと。」

やっばここに来ると空気が違うな、何かピリピリした感じがする。

「あの、シヨウコさん。さっきから登録とかなんのことを言ってるんですか？」

「あら、キヨウ君説明してないのですか？」

「一応はしてもらったんですがよく分かんなくて・・・」

「そうですね、では私が少し詳しく説明させていただきますね。」

百鬼夜行・バトルーナメント（CBT）とは！？

これは、毎年夏に開催される特殊な空間で行われる最強決定戦なんです。

個人戦、団体戦と分かれていて両方に出ることが可能です。

個人戦では文字通り一対一で戦い、最強を決める戦いです。

団体戦は三人一組で戦い、チームのリーダーがやられた時点で負けるという形式で行われます。

戦闘は特殊な空間で行われるため、殺されても肉体にはなんら支障はありません。

勝利条件は相手を倒す、気絶させる、戦闘不能な状態にする三通りがあり、なにをしてもかまいません。

その空間の強度は星が大爆発を起こしても揺らぐことがないほどと言われていますので、どれだけ暴れても問題はありません。

参加者は色々な場所から来るので、もしかしたら知り合いが居るかもしれません。

優勝者には豪華な賞品が渡されます。

と言ったところでしょうか」

聖子が丁寧に説明を終えたところで登録用紙が届いた。

「聖子は団体だけだったよな。んで、俺と殉が個人もっど……んで、お前らはどうすんだ？」

「え、ボクたちですか？えっとイヤクウ、メシア、どうする？」

「僕は団体でなら出てもいいけど、個人戦は遠慮しとくよ。」

「両方である……」

「じゃあ、ボクも両方をお願いします」

俺は登録用紙にリア達のフルネームととも居た世界を書いた。登録に必要なんでね。

「あたしたちも出るよ！」

セフィが無駄にでかい声を上げた。

「僕達は魔王様にお任せしますが、個人戦は参加しません。」

さすが双子、よくハモるね。

「んで、セフィは団体だけか？」

「両方でる！」

スコーンを食べながら俺は登録用紙に記入していく。

「ちょっと狂気！あんたなんでスコーンなんて食べてるのよ！」

「このスコーン美味いから。」

「そうじゃなくていつ頼んだって聞いたのよ！」

「ああ、俺、ここのお店の常連だから。俺が来る＝スコーン＋ティ  
ーセットって決まってた」

「そんなの聞いてない！あたしの分は！？」

ギヤーギヤーと騒ぐ香織を無視して登録用紙をウエイトレスの女の子に渡した。

すると、女の子はこちらです。と言って店の入り口とは違うドアを開け中に入るよう促してくれた。

「なにしてんだ、会場行くぞ」

今だ騒いでるバカ共に声を掛け会場へ足を踏み入れた。

やべえ、胸が高鳴るわ。

年に一度のお祭りだからな。

会場は、RPGによく出てきそうな酒場を何倍にも大きくしたよう  
なつくりで到る所に液晶画面が取り付けられ戦闘観戦ができるよう  
になっている。

「うわあ、すごい人だね……」

リア達が関心していると……

「狂武、今年も来たな。」

野太い声が俺の名前を呼んだ。

その声のするほうを見ると、屈強な男がこちらに手を振っている。

「よう、ゼウスさんにオーディンさん、ラーさんも。今年は勝てそ  
うですかい？」

その名前に驚いたのは他でもないリア達一行。

「か、か、神が、なんで神が普通にこんなところで酒のんでるんで  
すか!？」

どの世界でもユグドラシル説はあるらしい。そのせいかセフィ達も  
オーディンを指さして固まっている。

「がはは、よかったなあオーディン!お前は人気者らしい!」

豪快に笑いオーディンの背中をバシバシと叩くゼウス

「まあ、このイベントは参加するものを拒まないからね、それにど  
んなに暴れてもかまわないなら日ごろのストレスも発散できよう……

・・ゼウスいい加減痛いぞ」

ゼウス達と会話をしているとまた声を掛けられた。

「狂弔！オーデイン！」

声のするほうに顔を向けると

「おお、サタンじゃないか！それにルシファアも・・・あれ、ベルゼブブは？」

悪魔の三賢人までもが登場した。

「今年こそ貴様らから優勝をいただいてやるから覚悟しておけよ！」

そう言ったサタンだが

「だが、今は戦い前だ一杯やろうじゃないか、なあ狂弔！」

なんとも言いがたい性格だ。

「ベルゼなら肩慣らしとか言って消えた」

ルシファアが答えてくれた。

リア達は空いた口がふさがらないのか硬直したまま動かない。

それもそうだろう、最高神と悪魔王と呼ばれるような奴らが同じ席に座り一緒に酒を飲んでるなんて想像できる奴がいるか？

普通は居ないだろうな。俺は慣れたがな。

サタンやゼウスたちと話していたら開会式が始まった。

さて、これから面白くなりそうだ・・・



第七話：真夏に始まる風物詩！？（後書き）

いやあ〜ついに始まったね、百鬼夜行・バトルーナメント

「どうでもいいが更新遅れすぎじゃねえ？なにしてたんだよ」

それは簡単さ！神やら悪魔やらに関する知識がこれっぽっちしかなかったから書きたくても書けなかったのさ！

「威張るな！」

ブベラ！い、痛い、いきなり殴るなよ・・・どうせこれから思う存分暴れるんだから力蓄えとけよ

「ふん、そんなの知ったことか！・・・ところでなんでリアはずっと黙ってたんだ？」

『え、いや話に参加するタイミングがなくて・・・』

「そうだな・・・会場言ったときどう思ったよ？」

ああ、それは俺も気になるな

『とりあえず、びっくりしました。まさか神さまや悪魔の王が参加してるなんて思っても見ませんでしたから』

「そりゃそうだな、俺も最初はびびったし」

お前でもびびるのか

「ぶっ飛ばすぞ」

お、おっとそろそろ次の話を書きに行かないと！  
それでは次につつきます！ごきげんよう！

「逃げんなゴルァ！」

『あ、えっと、さようなら！』

第八話：百鬼夜行・バトルーナメント〜開催〜（前書き）

表現の足りない部分があるかも知れませんが、そのときは教えていただければ幸いです！  
では、どうぞー！！

## 第八話：百鬼夜行・バトルーナメント！〜開催！

- 視点：狂式 -

『レディース エーン ジェントルメン！今日この会場にお集まり頂いた紳士淑女の皆様方！今年もやってまいりました！百鬼夜行・バトルーナメントの始まりです！！』

実況を勤めるのはこの俺、がしゃどくろと『座敷童子です。』

なんか実況のがしゃどくろ、無駄にテンション高いな。

つてか、座敷童子って実況できるのか？人選・・・妖怪選ミスじゃねえ？

『まずは去年の個人戦のベスト10を紹介するぜ！！』

まずは優勝した【オーデイン】だ！

オーデインはユグドラシルという世界樹に存在する九つの世界の最高位のさらに上、最高神として知られている！ユグドラシルの神話はこの世界も共通だから覚えとけ！！

んで、こいつは去年グングニルという神器を使い決勝戦を勝ち上がったとんでもない奴だ！

今年はどうなバトルを見せてくれるか見ものだぜ！！

続いて準優勝の【鎖野 狂式】！

こいつはなんと人間のくせに神や悪魔を打ち倒し、決勝でオーデインを瀕死ギリギリまで追い詰めた怪物野郎だ！

本人曰く、「どんな攻撃もあたらなければ意味は無い！」まさにそ

の通りだぜ！しかーし最後の最後で必中のグングニルの餌食になっちまったのは致命傷だぜ！言うのやるのじゃ難しさ全然違っつつうことだな！

今年は打倒オーディンで優勝を狙うのか！？

惜しくも三位になったのは【サタン】だ！

サタンが地獄の支配者であるのはご存知の通りだが、元が天使というのが驚きだ！正体不明で姿形が毎回変化するのが厄介なところだ！去年は準々決勝でオーディンに敗れたが3位決定戦で見事ゼウスを打ち破りその座を手にした！「俺の復讐劇はこの程度じゃ終わらねえ！」あの言葉には痺れたぜ！！

今年はいっただいどんな姿をしてるやら！サタンの神への復讐劇はどこまで行くか楽しみだ！！

四位は言わずとも知れず【ゼウス】になるぜ！

ゼウスはオリュンポス12神の長で神々の王の異名を満ち合わせているが四位つてのはどういうことだ！？支配者を意味するその名が泣くぜ！

去年は得意の雷がすべて避けられ、一方的にやられて終わっちまったが安心しろ！落雷を避けるなんざ狂式あいつにしかできない芸当だ！

今年はどうな秘策たすけを携えて来たのか期待してるぜ！！

五位に食い込んだのは以外にも竜族の【テュポーン】！

百の頭を持つ最強の怪物だ！！その強さは至高神ゼウスを上回るほどらしいぜ！

去年はあの狂式かいぶつが相手だったから五位どまりだが相手が違ったらわからなかったな！

今年は大番狂わせが起こるのか!?

ここからは省略形で行くぜ!!

六位は【ヴァルキリー】

七位は【ルシファー】

八位は【朱雀】

九位は【ジャック・オ・ランタン】

十位は【黄龍】

個人戦はこんな感じだ!

次は団体戦のベスト10を紹介するぜ!!

優勝したのはこいつらだ!

【鎖野 狂式・原野 殉・津三木 聖子】

お前らなら優勝は狙えるぞ!準優勝

【インキュバス・サキュバス・バフォメット】

第三位が以外にも!?

【ウンディーネ・シルフ・サラマンダー】

第四位じゃ納得しねえだろう!

【孫悟空・猪八戒・沙悟浄】

第五位でも十分です　じゃねえんだよ！

【オーデイン・ロキ・ヴァルキリー】

第六位つてあんたらいったいなにやってんの！！

【サタン・ルシファー・ベルゼブブ】

第七位インドの三神つて何のことだ！

【シヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマー】

第八位お前ら妖怪の鏡だぜ！

【又猫・九尾の狐・鎌鼬】

第九位一匹足りねえんじゃねえか！？

【玄武・白虎・青龍】

第十位石化の力は伊達じゃねえ！

【ステンノ・エウリュアレ・メデューサ】

これで一通り紹介を終えたぜ！

だがしかし！今年はいいつらを脅かす奴らがうじゃうじゃ参加してやがるぜ！覚悟しときな！

開会式はこれで終わりだ！！この後トーナメント表が張り出されるからしつかりと目に焼き付けとけよ！！！！』

長々と実況のがしゃどくろが喋っている中、座敷童子は穏やかな寝息をたてていた。

ん〜・・・あのバカドクロ長々と喋りやがって・・・

「キョウジさん!!」

「キョウウ!!」

おわあ!びっくりするから耳元で大声出すなバカリアとバカセフィ。

「準優勝って、オーディン様を瀕死ギリギリまで追い詰めたって・・・  
・いったい何したんですか!？」

「団体戦の方、優勝してたよね!賞品なにもらったの!？」

テメエらばらばらに質問してくるんじゃないやねえ!

「優勝賞品は結晶体だったな、確か・・・」

空の涙の結晶だろ？

「そうそう、それだ・・・ってあんだ誰だ?」

誰だこいつ、真っ黒い鎧で全身を覆っていて誰だか全く分からん。  
だけど、どっかで聞いたことある声だよな・・・

忘れたとは言わせん!!今まで俺にしてきた仕打ちの数々・・・  
絶対に許さんぞ!

「・・・・・・・・・・・・・・・・あぁ!お前か!!」

誰だか分からず首を傾げている二人にそつと教えた。





かそんな世界がマジで存在していたなんて。

だから言っただろう！あらゆる世界と繋がっているよ！

「うるせえ消えろ」

ふん、強がっていられるのも今のうちだ！

暗黒騎士はどこからか現れ、唐突に消えていった。  
完璧な負け台詞を残しながら。

「でも、本当にすごいよね」

「うん、強そうな人たちばかりだよね……」

なんて話をしているとトーナメント表を見に行った殉がもどってきた。

「個人戦のトーナメント表見てきたぞ！」

「おう、どうだった？」

「えつとね、一番早いのがリアちゃんの二回戦目で、リアちゃんの相手はグリフォンだったよ。」

んで次がメシアちゃんの5回戦目、相手はドッペルゲンガー。三番目は7回戦目のセフィちゃんです。相手がリトルデーモンだったな。その次が11戦目の俺で、相手は暗黒騎士だったさ。狂気はシードだから最後だ。」

「了解、そんじゃ俺は適当にぶらついてくるわ」

俺は殉達と別れ、一人敵情を視察し始めた。

- 視点：リア -

二回戦目か、緊張するなあ  
キョウジさんが一人でどこかへ行ってしまったのでボク達はジユンさんに色々聞いてみた。

「試合会場に行くにはどうすればいいんですか？」  
それらしき入り口は見当たらない。

「ああ、それはあそこに立ってる水色のローブ来た人に、『何試合目出場者の誰々です』言えば送ってくれるよ。それに試合が終わった後呼び出しがちゃんと入るから大丈夫だよ」  
なるほど、それなら心配なさそうです。

【これより、百鬼夜行・バトルトーナメント第一回戦を始めます。  
出場者の方は転送者の所までお越しください。】

そんなアナウンスが流れたのと同時に室内に取り付けられたモニターがバトル会場を映し出した。そのモニターからは実況のがしゃどくろの声が聞こえてきた。

『これから第一回戦、ヴァルキリーVSヒドラの対戦が始まるぜ！』

画面に映し出されたヴァルキリーとヒドラ。

ヴァルキリーは大体予想通りの姿をしているが、ヒドラは大きな蛇の体にいくも頭を持った姿をしている。

どうやらバトルはフィールドに出た時点から始まるらしい。

画面が切り替わり、何もないフィールドにヴァルキリーの姿が映ったと思ったら相手のヒドラめがけて剣を振るっていた。

『おおっと！いきなりヴァルキリーの猛攻撃だあ！！なんて早さだ！目で追うのがやっとだぜ！！』

ヒドラはヴァルキリーの攻撃を避けようと必死だが着実にその数ある頭を落とされていく。

落とされる度に再生していくが、その再生速度よりヴァルキリーがヒドラを刻んでいく速度の方が早い。

そしてついにヴァルキリーの剣がヒドラを真っ二つにした。

『ば、バトル終了！！あつという間に終わっちゃったこのバトル！やはりベスト10入りした実力は半端ない！！』

フィールドに居たヴァルキリーと真っ二つにされたヒドラの姿が画面から唐突に消えたかと思うと、ボク達が入ってきた入り口からもどってきた。

「ヴァルちゃんおつかれ〜！」

ジユンさんが手を振りながらヴァルキリーさんに声を掛けた。

「その呼び方はやめてくれと言ったはずだ。」

「まあまあ硬いこといわないでさ！やっぱり余裕だったね〜さすがベスト6！」

「今年は優勝を狙う・・・どうやら今年の賞品は神器を上回る物らしいからな」

「またなんていう物を賞品にしてるんだか・・・」

ジユンさんと椅子に座ったヴァルキリーさんがなにやら優勝賞品のことについて話している。

【第二回戦を始めますので、出場者の方は転送者の所までお越しください。】

「あ、ボクの番だ・・・行ってこなきゃ」

やっぱり緊張するな。

「硬くならずにな！まあ、勝敗はともあれがんばってきな！」

「リア！がんばってね〜！」

「落ち着いて戦況を見極めれば勝てる、あたしが言うのだから間違

いない」

「う、うん、がんばる・・・」

ジュンさんやヴァルキリーさんやセフィに応援され、ボクは転送者の所に向かった。

転送者の所に行くと、「出場者の方ですか？」と聞かれた。

頷くと「それでは、転送します」って言われていきなり飛ばされてしまった。

フィールドに直接飛ばされるのかと思いきや、控え室みたいなところに飛ばされた。

あっけに取られていると

「戦いを始めるにあたっていくつかご説明させていただきます。」

いきなり声がした。

室内にはボクしか居ないのに。

「この戦いでの勝利条件は相手を戦闘不能にする、参ったといわせる。のどちらかありません。そして、このフィールドで大怪我をしたり、殺されたりしても会場に戻ればすべて無かったことになりますので存分にやっちゃってください。フィールドに着いた瞬間からバトル開始ですのでお気をつけください。それでは、5秒後にフィールドに転送します。」

ボクは剣を握りなおして、転送を待った。

【ヒュイン】

と音がして、一瞬真っ白になったかと思うと何も無い広野に立って

いた。

もちろん目の前にはグリフォンをと呼ばれた対戦相手が居る……  
つて完璧に獣ですよあれ!?

しかも、ボクの3倍はありそうなほど大きいし……。  
なんてことを考えていると、相手が物凄い勢いで突進してきた。

「わわわっ!」

とつさに横に飛んで剣を構える。

グリフォンを見ると、向きを変えてまたも突進してきた所だった。  
それよ避け、空いたわき腹を剣で切る。

グリフォンは甲高い泣き声を上げて空へ飛び上がった。  
そして、その鷲の羽根を羽ばたかせ突風を起こした。

「そ、そんなのあり!?!」

吹き飛ばされそうになるのを剣を支えに何とか持ちこたえる。

くそ、これじゃあ近づけない!

この状況を何とか打開しようとしていると、急に突風が止みグリフ  
オンが突進してきた。

剣を地面に突き刺し、飛ばされないようにしていたボクはその突進  
を避けることができなかった。

「ぐああ!」

数バウンドした後グツタリと横たわる。

グリフォンが前足を高く上げ、ボクの頭を踏み潰そうと迫り来るグ  
リフォンの姿が目に入った。

ボクってこんなに弱かったっけ?魔王を倒したのって誰だったんだ  
?ボクじゃないのか?なのになんでこんな事になってるんだ?ボク

は強くなくちゃいけないんだ！！ボクは勇者なんだ！  
目の前に迫る前足を寸でのところで回避して起き上がった。  
不意をつかれた相手の顔を蹴り飛ばし、合間を取る。

「これで……決める！！」

リアが剣を地面に突き立てて呪文を唱え始める。

「我前に立ちふさがりし愚かなる者を幾百ものその槍で貫け！アー  
スランスー！」

様子を伺っていたグリフォンの足元に魔方阵が浮かび上がりそこから突き出た何本もの土の槍が相手を貫き、戦闘不能にした。

戦いが終わった後は、また【ヒュイン】という音がして気づくとカ  
FE P A S S I N G S H O W E R の室内に立っていた。  
そこにはさっきのグリフォンもいた。

「おつかれさまです」

その言葉で我に返るとウェイトレスの女の子がボクに飲み物を渡してくれた。

「あ、ありがとうございます」

中身は紅茶だった。

「次もがんばってくださいね」

「は、はい」



返事をして、会場にもどった。

会場に戻るとジュンさんが手を振りながら「おつかれさま〜」って言った。

そして、いつの間にか戻ってきてたのかキョウジさんはチャーハンを食べていた。

お皿の枚数がすでに2桁突破してるのは触れないでおこう。

「ギリギリだったな。緊張して体が動かなくなってたか？まあでも、良くあの状況から挽回した。えらいぞ」

そういつてボクの頭を撫でるギョウジさん……これ、やめないで欲しいな。

ボクの願いも虚しくキョウジさんは再びチャーハンを食べ始めた。それと入れ替わるように、ヴァルキリーさんがテーブルの上に置かれた飲み物を飲み干してから感心するように言った。

「もっと長期戦になると思っていた。次はよろしく頼むぞ」

へ？どういうことですか？

思わず首を傾げると

「トーナメント方式で行くと、ヴァルちゃんの次の相手はリアちゃんになるんだー。がんばってリアちゃん！」

ってジュンさんが物凄い笑顔で応援してくれているけど……勝ち目なさそうだな。

【第三回戦を始めますので、出場者の方は転送者の所までお越しください。】

アナウンスが流れて出場者の人が画面の中に現れた。  
ボクはキョウジさんの隣に座ってそれを見ていた。



## 第九話：百鬼夜行・バトルーナメント！激戦！

- 視点：狂式 -

「に、しても殉が初戦で負けるなんてな」

俺以外の試合を終え、皆で飯を食っているところだ。

対戦結果は、リア、メシア、セフィの三人が上がり、殉だけが負けた。

メシアは対戦相手のドツペルゲンガーに怒涛の大剣乱舞をお見舞いして圧勝。

セフィは以外にも苦戦をしていたが、どこで学んだかトラップを設置していて、それに相手をはめてぼこぼこにしていた。

「それを言わないでくれ……」

殉はと言うと、暗黒騎士とか名乗るライト……もとい変人相手にいい勝負をしていたが根本的な強さが違っていた。

〈回想 始〉

スクリーンで暗黒騎士と殉が戦っている。

暗黒騎士が剣先から柄の部分まで真っ黒な剣を殉の首めがけて突き出したところだ。

殉はそれを防壁符と呼ばれる札を使い阻止した。

突きを弾かれてできた一瞬の隙に殉が反撃をするがそれを剣で防がれる。

こんな攻防をしばらく繰り返したあと、殉が決着をつけるために距

離を取った。

「暗黒騎士とか言ったな。なかなか強かったがこれで終わりだ!!」  
十枚の札を出し、念を込める。  
すると、殉の持つ札が光を帯びていく。

その光で殉が見えなくなると、殉は札を投げ放った。  
投げられた札は暗黒騎士を囲むように止まり、殉の“行け!”の合  
図とともに襲い掛かった。

これは殉がもつとも得意とする技で『十符線』（とふせん）という。  
技名通り、十枚の札が相手を囲み、線を描くように貫く技だ。  
しかし、暗黒騎士はその攻撃を一太刀の元に叩き伏せた。

『奥義、闇一閃』

闇一閃と言われた技が殉の十符線を切り払い、殉の防壁符をも断ち  
切った。

「我を倒そうなどと笑止千万!無に帰るがいい!」

『奥義、深き三閃』

暗黒騎士が繰り出した三本の黒い斬撃を受け、殉は倒れた。

く回想 終く

「うう、せっかく勝手リアちゃんやセフィちゃんにかっこいいと  
る見せようと思ったのに・・・」

結構ショックだったらしく未だにへこんでいる殉。

「変なことばかり考えてるからだよ」

一言、殉に止めを刺してやった。

HA！HA！HA！ざまーみやがれ！

【続きまして、二順目第一試合を開始しますので出場者の方は転送者タの所までお越しく下さい。】

アナウンスが流れた後ヴァルさんがリアの手をつかみ歩き出した。

ヴァルさんはあまり物言わぬ人だがその分態度で表してくれるからわかりやすい。

「そうか、次はヴァルさんとリアか・・・」

これはあつという間に決着がつくだらうなと思った。

が、試合が始まってみると、意外とリアは粘っていた。

「なんとも神々しい！！ヴァルキリーの剣が光を放ち始めたぜ！！」

スクリーンからはがしゃどくろの実況が流れてくる。

「それに対してリアルト選手もなかなかの手慣れだぜ！多彩な魔法や剣術で応戦してるぜ！！この戦い、どっちが征するか見ものですな！実況の座敷童子さんどう思いますか！！」

「あんたうるさい」

「グハ！なんともきつい一言をもらっちゃまったぜ！！っと、相変わ

「らず物凄い戦いが繰り広げられているぜ！」

「がしゃどくろのばかな実況を無視して画面を見てみると、なにやら会話が聞こえてくる。」

「せやあ！なかなか楽しませてくれる・・・どうだ、エインヘリヤルになる気はないか？」

「『ソードブラスト！』エインヘリヤルってなんですか！」

「はあ！！オーディン様のために働く英雄のことだ」

「『エルメキアブレイド！！』ボクは今のまま、狂式さんたちと暮らしますから遠慮しておきます！」

「つつ！そうか、それは残念だ」

「あいつら、戦いながらなんて会話してやがる・・・」

「お互いに攻撃を仕掛けてたそれを攻撃で止めるといふ高度な戦いを繰り広げていたが、ヴァルさんがリアの剣を弾き飛ばし、リアに剣を突きつける。」

「く・・・参りました」

「『ついに決着だあああああ！！今の戦いは網膜に焼き付けとけよ！！』って俺は目自体がないけどな！！』」

「だから言つたら、ゼウスの旦那、普通にヴァルキリーが勝つってよめ」

「がはは、先ほどは殉が負けちまったから今回も大穴を期待したんだがな！」

ゼウスさんとベルゼブブが賭け事をしていたらしい。

俺はというとさっきから試合を見ながらチョコパフェを食っている。

「うう・・・負けちゃいました」

リア達が戻ってきた。

「なかなか強かった・・・大丈夫自身持って」

ヴァルさんがリアのことを慰めている。

なんか仲のいい姉妹みたいだな。

「ヴァルさんお疲れ、リアもなかなかがんばってたな。あそこまで粘るとは思ってなかったぞ」

俺はリアの頭を撫でてやった。

次の試合はラーさんだったはず。

同じテーブルについていたはずのラーさんの姿はすでになかった。

俺は食べていたパフェがなくなったので、再び注文しに席を立った。パフェ20人前を抱えて戻ってくるとすでにラーさんは試合を終えていたらしい。

「どうでしたラーさん」

俺が聞くとラーさんは首を振った。

「キョウジ殿、ラーさんは惜しくも・・・」



後ろからルシファーが教えてくれた。

どうやら、新しく参加した奴らしいかそいつに負けたらしい。

ラーさんだって決して弱くはないどちらかという強い部類に入るのに……

俺は驚きを隠せなかった。

「まあ、どんまいっすよラーさん」

頷くラーさんを見た後、椅子に座って画面を見るとメシアが丁度現れたところだった。

ほあ、相手はケルベロスか……この勝負はちと難しい物があるか……。

二つ目のパフェを食べながら考える。去年ケルベロスと戦ったときのことだ。

あの時俺は、厄介な頭を潰そうとして負けかけたんだよな……やはり冥府の門番をつかまされるだけあってなかなか強い。

画面ではメシアが苦戦しているのがわかる。

メシアの繰り出す大剣をひとつの頭が噛み押さえ、もう二つの頭で襲い掛かってくる。

大剣を放してそれをよけ、投げ捨てられた大剣を拾い攻撃を仕掛ける。

これの繰り返しだ。しかし、ケルベロスもバカではないようだ。

噛み付きに見せかけて爪で引っかいたり、だんだんとメシアを追い詰めていく。

これは……負けたか？

そう思ったとき、メシアが距離を取った。

「新技……キョウジに使うはずだったのに……」

あいつ、まだ俺に投げ飛ばされたこと根に持ってやがったのか。それはそうと、画面では大剣を空高く投げ飛ばしたメシアがケルベロスに向かつて走っている。

あいつ新技とか言ってたけどなににする気だ？

向かってくるメシアを迎え撃とうと構えるケルベロス。

メシアはその直前でケルベロスを飛び越えた。

ケルベロスが急いで振り返った瞬間、空高く投げられたはずの大剣がケルベロスを貫いた。

苦悶の声を出すケルベロスに対して、それを確認わかっていたかのようにメシアはその大剣の上に飛び乗った。

大剣が深々と地面に刺さる。その後メシアは腰に携えた短剣でケルベロスの喉を切り裂いた。

ほお、アレを俺にやる気だったのか。

人の事を殺す気か！

メシアが画面から消えて戻ってきた。

なぜかケルベロスの背中に乗ってるが

「お前、あんな技俺に使う気だったのか？」

コクンとうなづくメシア

「ああでもしなきゃ攻撃できないし、キョウジなら避ける」

確かに俺の特技は見切りだが下手したら俺でも死ぬぞあれ・・・つか下手しなくても死ぬ。

因みに、この後の試合はセフィダが特に見る必要はないだろう。

笑いながら黒い魔弾で相手を吹き飛ばしているセフィを見ると頭を抱えたくなるからだ。

セフィはすばしっこい相手は苦手見たいだが、今回の相手のベビーモスみたいな奴は得意らしい。

あつという間に勝利し戻ってきた。セフィはなんだかすごくすがすがしい顔をしていた。

チョコパフェを食べながらゼウスさんやベルゼブブ達と賭け事をしたりしていると、自分の番が来た。

「あーやつと俺の出番さね、ちよっくら行つて来るわ」

「おう、がんばってこいよ！」

「お前に掛けてるんだから負けたら許さんぞ」

なにやら複雑な気分だが、まあいいか、これから思いつきり暴れるんだ。

- 視点：リア -

今、キヨウジさんが画面に現れたのを見て興奮するセフィをなだめています。

キヨウジさんの対戦相手はジュンさんが負けた暗黒騎士とかいう人です。

なにやら話をしているみたいなんです。ボク達には聞こえません。

『ここに来て準優勝の鎖野狂式の戦いだ！新たに参加した暗黒騎士とか言うやつも災難だぜ！』

画面では暗黒騎士が剣を抜いたところだった。どうやらこれから始まるらしい。

暗黒騎士が突き出す剣をポケットに手を入れたまま避けるキョウウジさん。

相変わらず余裕そうですね。

繰り返される攻撃を華麗に避けて時々足払いだのをして相手の体制を崩していく。

キョウウジさんは相手と距離を取って何かをし始めた。このとき、やっとポケットから手を抜いた。

「気功！！」

画面のキョウウジさんの周りに、野球ボールくらいの大きさの黄色い玉が五つ浮かんでいた。

「これから飛ばすぜ！ちゃんとしてこいよ」

キョウウジさんは相手を挑発して一気に駆け出した。

でも、相手はジュンさんを倒した『深き三閃』を放ったところだった。

難なくそれを避けるキョウウジさん。

相手の懐まで潜り込むと空手の正拳突き見たいな感じで相手を殴り飛ばした。

殴り飛ばされた暗黒騎士の腹部の鎧が見事にへこんでいる。

あの正拳突き、どんな威力あるんですか！？

何事もなかったかのように立ち上がる騎士に対して容赦なく攻める

キョウジさん。

黄色い気の玉を飛ばしたり、手の平を押し付けたと思ったら相手の左手の籠手が吹き飛んだり、かかと落としで地面がえぐれたり。あの人ホントに人間ですか？

とか聞きたくなるようなことばかりするキョウジさん。

このとき、絶対に逆らわないようにしようと決めた。

「ふはははは！この程度か狂式！我は少しもダメージを食らってないぞ！」

画面から暗黒騎士の声が響き渡る。

明らかに鎧はぼろぼろなのになぜかキョウジさんが怪訝そうな顔をして相手を睨んでいる。

「ふむ、見た感じあの鎧は呪いが掛かっているね」

「うわぁ！いきなり後ろから現れないでくださいルシファアさん」

「いやぁ、ごめんごめん癖だね」

「で、呪いってどういことですか？」

「痛みやダメージをすべて消して、動かない体を無理に動かすような感じの呪いかな。」

「それって・・・普通に着てたらすぐ死んじゃいますよ？」

「そうだね、でもこのバトルでは絶対有利な代物だね。副作用もあるみたいけど」

「副作用って？」

「見ていればわかるさ」

そういわれて画面に視線を戻すとなにやら暗黒騎士が人として危ない領域に踏み込んでいた。

「ゲヘヘ、お、お前だけは、絶対にゆるさ……」

うわ、副作用って精神破壊のことだったのか。

「アレを倒すには消し飛ばすくらいしか手が無いはずだけど、狂いはなにか策でもあるのかな？」

画面を見ているとキョウジさんが気功で気弾を五個に補充しなおした。

「お、あの技を使う気だな」

「掠めただけで私を追い詰めたあの技か」

ゼウス様とオーディン様が話しているがボクは画面から目が離せなかった。

「我が身をまとう気よ、我が身を守る壁となれ！『金剛！』」

キョウジさんの体の色が黄色くなる。

「我が攻撃は絶対の一撃、全てを滅する破滅の力となれ！『爆裂！』」

「『！』」

キョウジさんの立っているところから爆発でもあったかのように地面が抉れた。

「我が拳は宇宙ひそさえも分かち星さえも砕く霸王の拳、神々さえも打ち砕き悪魔たちをも地に伏せる。奥義！！『狂羅霸王拳』」

一瞬にして近づき、拳が相手に当たったかと思うと物凄い土煙と轟音で画面は見えなくなってしまった。

「な、なにが起こったんですか？」

「アレは狂の奥義の一つで、本来ならば星をも砕き、銀河さえも分かち霸王の一撃を放つ技だよ。あんな技ここ以外で使ったらそれこそ太陽系が吹き飛ばす程度じゃすまなくなるぞ。でも、その分反動はでかいらしいがな」

ルシファーさんの説明を聞いて画面を見ると丁度土煙が晴れたところだった。

地面消し飛び、キョウジさんが立っているところ以外底が見えない状態だった。

「うわ……あれであの人本当に人間なんですか？」

思わず聞いてしまった。キョウジさんに聞かれたら容赦なく殴られる一言だと思う。

「一応、人間だよ彼も」

『やっぱり狂式は強かった！！誰かこいつを止めてみる！！』

がしゃどくろが実況をしている隣で座敷童子はうつとりとキョウウジさんを眺めているのは見間違いではなさそうだ。

「あ、キョウウジさんお帰りなさい」

「おう、ただいま」

キョウウジさんが何事もなかったかのように戻ってきた。

「狂、あの鎧を着た奴どうした？」

「ああ、カフェの方で鎧ぶっ壊してたたき出してやった」

「ははは、君って奴は」

「キョウウ強いね！」

セフィがキョウウジさんに飛びつく。

メシアはなぜかケルベロスとじゃれている。

ボクはというと、椅子に座ってうとうとうとしている。

「あれ、そういえば香織のやつどこいった？」

「さきほど、お出かけになられましたよ。なにやら携帯にお電話があった見たいで」

「リア、眠いのか？」

ヴァルキリーさんが頭を撫でてくれながら聞いてきた。



「はい、少しばかり」

「こっちに寝る場所がある」

ボクはヴァルキリーさんに連れられて休むためにベッドが用意された部屋まで来た。

「ありがとうございます」

ヴァルキリーさんは笑顔で戻っていった。

ボクはそのままベッドに横になり、眠りについた。

第九話：百鬼夜行・バトルーナメント〜激戦〜（後書き）

「どうだ？俺もなかなかやるだろう」

お前、誰に何を言ってるんだ？

「俺に消滅させられた奴が何言ってるんだ？」

な、何のことかな？

「いい加減あきらめろ、あの暗黒騎士とか言うのお前だろ？」

な、な、なわけないだろ………（汗）

「その腰の剣、暗黒騎士がつけてた奴だろ？」

な！マジで！？全部外したはず………

「にま〜」

はめやがったな………！！

「いい加減自白しろって」

………逃走………！！

「あ！まてやゴルア！」

ヒラリ

メモ用紙に何か書いてあるようだ。

ご愛読ありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

## 第十話：登場人物紹介（前書き）

今まで出てきた主な登場人物の紹介です。

## 第十話：登場人物紹介

百鬼夜行・バトルトーナメント個人戦も中盤に差し掛かってきたねえ。

「そうね、で、迅渡はなんであたしを呼んだのさ」

狂武たちがCBTで忙しそうにしてる中、香織さん物凄く暇そうにしてたからさ

「いや、そうじゃなくてなにをするために呼んだのかって事を聞いてるの！」

ああ、それはタイトルの通り、登場人物の紹介をと思ってね。

「ふうん、具体的にはなにをすればいいわけ？」

これから名前を言っていく人について知ってることを片っ端から言ってくればOKさ。

「それってあたしばかり大変じゃない？」

それではいつてみよお！！

「無視するな！！」

名前 前 鎖野狂式くさりのまきうじ

年齢 17歳

性別 男

血液型 O型

好きな物 甘い物全般、特にチョコレートパフェあと子猫

嫌いな物 辛い物全般

特徴

銀色をした髪の毛を肩より少し長めに伸ばし、首の辺りで束ねているのが特徴。

普段はダークな服を好んで着ている。髪の色は産まれつきらしい。俗にいう麗人と言う類の顔をしており、声もアルトやソプラノと言った高い声質しているが、あえて低い声で喋っている。言葉使いが悪いのは女性っぽく見られないためだと考えている。

合気道と気功術の使い手であり、合気道では全国優勝を果たしている。

父親が気功術の師範で、母親が合気道の先生だと狂式自身が言っていた。

性格は短気でマイペースな上、自己中心的だけど面倒見がいい。

名前 前 原野殉はらのじゅん

年齢 17歳

性別 男

血液型 B型

好きな物 スポーツ全般と女の子。あと変わった味のする物

嫌いな物 テストと犬、嫌いではないが辛い物が苦手  
特徴

背が低く、幼い顔つきをしている。童顔という奴だ。

茶色く染めた短い髪をワックスを使って固めているが、そこがまた可愛く見える。

高校にあがるまでジェットコースターに乗れなかったと嘆いているのを聞いたことがある。

姉には絶対に逆らえない、なぜなのかは語ってはくれなかった。

中学までは柔道部で主将をやっていて県大会で優勝している。

また、家がお寺で、その書庫で見つけた札術指南書を読み、独学で札術を体得した。

性格はおおらか。

名前 前ありしまかおり 有島香織

年齢 17歳

性別 女

血液型 B型

好きな物 お菓子とケーキ類

嫌いな物 下品な奴とジングスカン

特徴

黒い髪を腰辺りまで伸ばしているのが特徴。

顔は比較的整っており、綺麗ではあるが狂式と一緒に居るためかあまりその綺麗さが目立たない。

男勝りな性格で、狂式に対してのみ攻撃的である。

学校靴の中に入っている投擲物は毎日変わる。  
友達思いな性格で、幼いころの狂式を知る唯一の存在。現在は狂式に惚れているが素直になれないでいる。  
性格はしっかり者で几帳面。

名前 前津三木聖子つみきしよじ

年齢 16歳

性別 女

血液型 A型

好きな物 小動物と花

嫌いな物 特になし

特徴

黒いブラウンの髪を首元辺りで切りそろえているのが特徴。

学校一の美人で整った顔つきに幼さが少し残るくらいだ。

話すのが苦手の内気がちに見られるが実は結構積極的。おしとやかではあるが思い立つと即座に行動に移す。

家が神社で巫女の血を色濃く受け継いでいるためか、霊力がある。

落ち着きがあり知的だが、おつちよこちよいなのが玉に瑕だ。

性格は心配性でマイペース

名前 前セフィリアン・シート



年齢 人で言う15、6歳

性別 女

血液型 魔族なので不明

好きな物 テレビドラマとホットミルク

嫌いな物 怖い話

特徴

ライトグリーンの短い髪とその髪に隠れるようにひっそりと生える小さな角が特徴。

別世界ケルトリアで魔界の王、魔王をしていたが、城を抜け出した際に卑しき勇者と名のる人間に襲われ魔力を暴走させる。

これが原因で地球に飛ばされて狂気に助け(?)られる。

性格は無邪気で純粹、無鉄砲な所に手を焼いているらしい。

名前 前リアルト・シャルン

年齢 見た目14、5歳

性別 女

血液型 本人も不明

好きな物 恋愛小説や少女コミック

嫌いな物 虫とカエル

特徴

黒い髪を雑に乱していて、目の色が左右で違うオッドアイなのが特徴。

目の色は左が赤で右が青色をしている。

別世界セルレイヌで世界を恐怖のどん底に突き落とした魔王を仲間

ともに倒した勇者。

魔王の最後の攻撃が暴走しそれに巻き込まれ地球に召喚されてしまった。

性格はしっかりしていて礼儀正しく、周りをよく見れるが肝心なところがいつも抜けている。

名前 前 メシア・クルース

年齢 見た目15歳

性別 女

血液型 どうやらB型らしい

好きな物 強者との戦闘、スポーツ全般

嫌いな物 読書

特徴

赤色をした髪の毛を背中の中半ばくらいまで伸ばしているのが特徴。リアと同じ理由でこの世界にやってきた、戦いを好む戦士。普段は喋らずになにを考えているかわからないが勘は鋭く、警戒心が高い。

見た感じからして狂気に惚れていることがわかる。

性格は生真面目

名前 前 イヤクウ・ベルモント

年齢 見た目14歳

性別 男

血液型 不明

好きな物 知識を増やすことと実験

嫌いな物 特になし・・・けれど電子機器が苦手

特徴

短髪で紫色の髪をしている。普段からバンダナや帽子で髪を隠しているのが特徴。

リア達と同じ理由で地球に来ている魔術師。

お調子者であるが、三人の中では一番の切れ者。

とあることを切っ掛けに狂気に料理を教わっている。

性格はせっかち

名前 前 フィヴ・ラウシン

年齢 人で言う13歳

性別 男

血液型 不明

好きな物 ゲームと遊ぶこと

嫌いな物 パズル

特徴

青色をした癖のついた髪をしており、セフィ同様頭に小さな角が生えている。

髪の長さは一般男子のそれとさして変わらない。

セフィの側近であり、フィルの双子の兄である。

地球に来たのはセフィの魔力の暴走に巻き込まれたためだ。

性格は単純

名前 前 フィル・ラウシン  
年齢 人で言う13歳  
性別 男  
血液型 不明  
好きな物 音楽鑑賞  
嫌いな物 足のたくさんある生き物  
特徴

フィヴと同じだが髪の長さが若干フィルの方が長い。  
仕える者としてはフィヴより向いていると思われる。  
こちらに来た理由もフィヴと同様。  
性格は冷徹

ふう、一通り紹介は終わったけな！  
つて、なんでぐったりしてるんだ？

「あんたがあたしばっかりに喋らせるからでしょ!!」

HA! HA! HA! それは失礼!

「それに、なんであたしの紹介だけあんたが言ったのよ! 余計なこ  
とまでベラベラと」

隠し事はよくングへ！

や、野球ボールは痛いです……

「うるさいわよ！」

申し訳ない……

「でも狂気のやつ、辛い物苦手とか言ってるくせによくあの激辛カレー（第五話参照）食ったわね」

ああ、アレは狂気のやつだけ激甘カレーだったからだよ。

「……なんであなたはそんなこと知ってるのよ」

なんでってなぜでしょう。

「はぐらかすな！」

それではC B Tで出てきた名のある者共の軽い紹介でもしていきま  
すか。

せつかく知識として色々調べたことだし。

「へえ、あんたでもそんなことするんだ。」

あ、失礼なこれを見よ！

【バサッ】

「なにこの模造紙の山……」

俺が調べたCBTの名のある者たちのプロフィールだ！

「着火」

ぬわあ！！俺の努力の結晶が！！

「あら狂式来てたの？」

「ん、今来た。お前を探してた」

「狂式・・・／／／」

「殉に頼まれてだけど」

「あ、っそう・・・」

お、おのれ狂式・・・俺の努力の結晶をよくも塵と化してくれたな。

「しるか負け犬」

ま、負けいぬってお前・・・

「相変わらずの毒舌ね」

「褒めるな照れるだろう」

「いや褒めてないし、すっごく棒読みね」

負け犬・・・

「さて、邪魔なものも沈めたことだし、戻るぞ。そろそろ準決勝が始まんのだ」

「え！？セフィちゃんとメシアちゃんのバトルは！？」

「ああ？そんなもんとつくの昔に終わっちまったぞ」

「そんなあ！！すごく見たかったのに……」

「心配すんな、聖子が座敷童子にビデオ撮影頼んでるから。」

「そ、そう、よかった……って待ちなさいよ！あんた歩くの早い！」

以下、百鬼夜行・バトルトーナメント 名のある出場者一覧です。  
プロフィールは全て燃やされました。

〈神々・神獣編〉

ゼウス、オーディン、ロキ、ヴァルキリー、ラー、ヘラクレス、シヴァ、ヴィシヌ、ブラフマー、ポセイドン、ハデス、アポロン、トール、ハヌマーン、オシリス、イシス、セト、フェニックス、ペガサス、ユニコーン、白虎、玄武、青龍、朱雀、麒麟

〈悪魔・魔族編〉

サタン、ルシファー、ベルゼブブ、アザゼル、バフォメット、リヴ  
アイアサン、ベビーモス  
、ベリアル、サキュバス、インキュバス、エキドナ、ケルベロス、  
ヘル、フェンリル、ヨルムンガンド、ヴァンパイア、メデューサ、  
ゴーゴン、ガルム、死神

〈ドラゴン・モンスター編〉

ワイバーン、ウロボロス、ラミア、ヒドラ、テュポーン、アポピス、  
応龍、黄龍、白龍、蛟、黒龍、龍神、雷龍、八岐大蛇、ナーガ、ミ  
ノタウロス、キマイラ、グリフォン、ガーゴイル、デュラハン、孫  
悟空、イフリート、鶴、バハムート

〈妖怪・妖精・精霊・幽霊編〉

一反木綿、イズナ、天邪鬼、牛鬼、九尾の狐、管狐、天狗、猫又、  
雷獣、鎌鼬、エルフ、シルフ、ウンディーネ、サラマンダー、ピク  
シー、ジャック・オ・ランタン、ドライアド、ケット・シー、リッ  
チ、レイス、キョンシー、雪女

・・・ETC



などなどです。

若干有名ではないのも居たかと思いますが、一通りはこんな感じですよ。

え？立直りが早いって？そうでなかったら狂気の相手なんてやっつけられませんからね！

それでは俺もこの辺で！！

## 第十話：登場人物紹介（後書き）

「そついやさ、この後団体戦もあるんだろ？」

そつだが、それがなんだ？

「個人戦、ここまで引き伸ばして書ききれぬのか？」

………任せろ！

「お前、その言葉の信頼度がどれほどのものかわかってるか？」

100%だろ？

「マイナスな」

マジすか……

「落ち込んで暇あったらさっさと書いてこい」

アイアイサー

「おし、迅渡もいなくなつたし俺も次の試合があるからな。それじゃ」

第十一話：百鬼夜行・バトルーナメント！〜個人戦終盤〜（前書き）

個人戦終幕までもう少しです。

この後にある団体戦は短めで行きたいと思います。

では、どうぞー！！

## 第十一話：百鬼夜行・バトルトーナメント！個人戦終盤

（視点：狂式）

現在、バトルフィールドで相手とにらみ合っている、  
なんでこう戦う相手全てが強い奴ばかりなのだろうかと疑問に思う。  
俺の前に対じしてる相手はニヴルヘイムの女王ヘルだ。

ヘルはオーデインさんと義兄弟の契りを交わしたロキの娘なのだが、  
詳しくはまあ、北欧神話のヘルで調べてみてくれ。

ってそんなことはどうでもいいんだが、こいつ、見た目に反してや  
たら強い。

一撃一撃がやたらと重く、それでいて早い。

すでに幾度か撃ちあった、俺と同じで攻撃を見切りやがる。

だが、なぜか俺と動きが似てるんだよな・・・

相手の様子を伺っていると、相手が先に仕掛けてきた。

正面からまっすぐに突き出された拳を屈んでかわし、足払いを仕掛  
ける。

それをバクテンで回避する。回避ざまに俺のあごを狙って蹴ってき  
たのをギリギリで回避する。

それから距離を取り、相手の様子を伺う。

見切り型がここまでうざかったとはな・・・。

「やはり貴方は強い・・・」

彼女が唐突に喋り始めた。

「だから・・・どうだっただけだ？」

「べつにどうというわけではない、倒しがいがあるというだけだ」

「それだけか」

「ここからはわれも本気で行く、負けたときの言い訳を考えておくことだ！」

『魔功！』

「!?!」

彼女は魔力で野球ボールくらいの球体を五つ作り出した。完全に俺の技をコピーしてやがるのか……

『気功！』

俺も気功球を作り出す。

ここからはそれなりにマジで挑まないとこちらも唯ではすまないだろう。

『気功弾！』 『魔功弾！』

互いに自分の作り出した功球を放った。

それがぶつかり合い爆発が起きた。それを切っ掛けに激戦が始まった。

繰り出されたハイキックを上半身を反らし回避するのと同時に相手の脇腹目掛けて蹴りを繰り出すが、それを右手で払われる。

そのままかかと落としに切り替え攻撃を仕掛けるも体を横に反らしかわされる。

この一瞬の隙を狙って出された正拳を受け流し、回し蹴りで相手の顔を狙う。

だがその足をつかまれ、投げ飛ばされてしまった。  
これは・・・予測していたこと！

投げ飛ばした体制のヘルに気功弾を打ち込む。  
それも、後方への跳躍でかわされる。

着地した瞬間、地面を蹴って相手との距離を縮める。

間合いに入った時にはすでにヘルが攻撃を仕掛けてきていた。

『まじゅうしょう魔功衝！』

手に平で魔功に衝撃を与え、衝撃波を相手に打ち込む技だ。

気功衝きこうしょうとまったく同じ技か！ならばその弱点も同じ！

体制を低くしてそれを避け、相手の懐に潜り込む。

突き出された腕をつかみ背負い投げの要領でヘルを投げる。

さつきと立場が逆転した。

『魔功弾！』 『気功弾！』

爆風によって吹き飛ばされる。

相手との距離はおよそ100mくらいだろう。

『気功！』 『魔功！』

この状態になるまで5秒と掛かっていない。

常人なら動きを見ることすら難しいだろう。

「やはり真似ただけでは倒せる相手ではないか」

そう言ったヘルは魔力で剣を作り出した。

「魔剣・・・こおりのげきてい氷乃撃帝。切ったり触れたりしたものを即座に凍り

つかせ砕く剣だ。」

「神器や業物じゃあなさそうだな」

「ふ、わが特別製だ」

しばらく無言のだったが、どちらからともなく駆け出した。けれど、剣を持っているヘルの方がリーチが長く、攻撃を避けるしかない状態になっている。

避け続けているのにも限界が来たのか狂式がバランスを崩した。

「もらった!!」

ヘルは魔剣が狂式を貫いた。

狂式は一瞬にして凍りつき砕け散った。と、思われたが剣を突き刺したはずの狂式の姿はどこにもなかった。

「気功術、偽像気ホウノウキ」

「な!?!いつの間!」

急に背後に現れた狂式に驚くヘル

「いつの間に……か、最初からだ」

「……それでは、われは最初から幻を相手にしていたということか!」

前転をして狂式との距離を取るヘル。

睨みつけるヘルに対して涼しい顔をしている狂式





よう………」

狂武の右手に気功球が集まり、その手の周りを高速で回転し黄色の輪が描かれる。

左足を前に出し、右手を隠すかのように半身になる。

相手を見据え、上半身を捻る様に右手の拳を相手に向けて衝きだした。

「奥義！！『五激気想拳』」

突き出された拳から黄色い輪が相手目掛けて飛んでいく。

飛んでいく最中にだんだんその輪を狭めて行き、相手に当たる直前には一つの光球になっていた。

その光球が当たると、とてつもない光が視界を覆いその光が晴れると、ヘルの居た場所から半径50mほどが球状に消し飛んでいた。大気や空気、色や光、音までもが消し飛ばされたらしくその場所だけ何もない黒い空間が見える。

グウ……やはり……きついか……」

気功術は名の通り、自分の気を使い技を放つ。

すなわち、上でも述べたような精気、狂気、正気、覇気などの気力を消費するため、その気力の消費が激しければ生きる屍と化してしまふのだ。

ここ以外で使ったら……間違いなくさよならだ……」  
思考が途切れたと同時に視界はホワイトアウトし、気づくとカフェに戻ってきていた。

なんとも言えないようなバトルフィールドで起こったことはカフェに戻れば全てキャンセルされる。

痛みも疲れも肉体的損傷も精神破壊も全てだ。

「う……ヒック……」

隣には対戦相手のヘルが居るのだが、座り込んで泣いてしまっている。

おいおいおいおい、俺なんかしたか？  
このままにしていけるわけもなく

「あゝ……すまんが、何か飲み物持ってきてくれ」

ウェイトレスの少女にそう頼むと俺はしゃがんでヘルの背中を撫でてやった。

「おい、大丈夫か？」

俺が聞くとヘルはコクコクと頷いた。

ウェイトレスの少女が持ってきたアイスティーをヘルに渡しゆつくりと飲ませる。

「どうした？」

「……さっきの、思い出したらすごく怖くなって……それに負けたのも悔しくて……ヒック」

また泣き出しそうになったでととりあえず謝った。

さっきのバトルの奥義あれが原因らしい……。

「いや、すまなかった。まさかここまで恐怖するとは思ってなかった。本当に申し訳ない。」

ヘルは何度か頷いていたので許してはくれたのだろうが責任は俺にあるわけで、落ち着くまでそばに居ることにした。





二人の襟首をつかみ引きずって殉やオーディンさんが居るテーブルに戻っていった。  
その後ろで顔を赤くしながら狂気のことを見つめていたヘルには気づく様子はこれっぽっちもなかった。

〈視点：メシア〉

メシアです……。

えと、キヨウジすごく強かった。

勝てるなんて思っていた自分がまだまだだつてことがわかった。

視点もつのもって何だが不思議……です。

キヨウジの戦闘中に起きてきたリアがなぜか引きずられて戻ってきた。

あとセフィも。

何があったかは聞かない、聞いてもしようがないと思う。

だつてリアとセフィだから。

次の試合はオーディンさまとルシファー、どっちもかなり強いからどうなるか楽しみ。

強い人同士が戦うのはいい勉強になる。

とりあえずまずはキヨウジに勝てるようになることが目標……。

勝てたら・・  
なんでもない。

今キョウジはチョコレートパフェをたくさん食べてる。  
多分4桁超えてると思う。

・・・・・・・・私？なにしているか？

ケルルンの上に乗っかってる。

ケルルンって何かって？

ケルルンはケルルン・・・・・・・・。

あ、試合・・・・・・・・始まったみたい。

試合が始まるとオーディンさまが波動を打ち出した。

それを軽く弾くルシファー・・・・・・・・参考にならない。

ルシファーが長いその爪で切りかかる。

それを避けて魔槍グングニルを突き出す。

ルシファーがグングニルを魔力で吹き飛ばす。

なるほど・・・・・・・・絶対にあたるのなら別の何かに当てれば避けられる。

何かメモ帳のようなものにメモを取っていく。

・・・・・・・・・・・・・・・・視点、もういらぬ

（視点：殉）

お、なんだなんだ？

俺視点なのか？おっしやあ！張り切っちゃうぜえ〜！

今は画面でオーさんとファーさんがバトってるんだけど、いやあ〜ふったりともつえ〜のつえ〜の。

さっきの狂弐とヘルちゃんバトルなんか目じゃないくらいすげーのな。

でも狂弐のやつ、いつの間にあんな技習得したんだ？

いやあ〜、俺の知らないところで成長してるんだなあうんうん

「キモイぞ殉」

「にゅわあああー!!」

急に話しかけてくるなよびっくりするなあもっ!!

「ってなにがキモイんだよ！酷くねえか!？」

「いや、人の顔みてニヤニヤしてんのキモイと言わずになんて言うんだ？なんなら気持ち悪いぞ存在が、とでも言ってるのか？いやこれマジなだけだな」

「ひ、ひど・・・」

なにもそこまで言わなくても・・・

まあ、だいぶなれたけど傷つくんだぞこれでも。

そんなことは置いといて画面を見るとフィールドがとんでもない事になってるよ。

あちこちにクレーターができてるし、お互いにぼろぼろだ。

これ、決着つかねえんじゃねーかななんて思う。

まあ、暇だし最後まで見てやるうじゃんか

・・・・・・・・・・・・・・・・

.....

.....

.....

あ、決着ついた。30分近くかかったな。

結果はオーさんが魔槍でファーさん貫いて終わり。

二人が戻ってきた。

「負けてしまった」

「がっはははは、気にすることはない！」

「だああ!!いつになったらおれあオーディンや狂式と殺りあえるんだあ!!」

「.....」

オーさんは相変わらず喋らないし、サタさん叫ぶし、やりたい放題だよ。

狂式なんてパフェ何杯目だよ。

「そついえば、今回の優勝賞品ってなんだかわかりますか？」

俺がそう聞くとベルゼさんが応えてくれた。

「どうやら、カフェオーナーの知り合いのお店の限定チケットらしい」



「っと、言いますと？」

「年に二度しか開店しない幻の店でお客の注文するものなら何でも作ってくれるらしい、しかも全てが至高の味と来てる」

「なんていうものを賞品にしてるんだ……」

「それ以外にもあるらしい。我輩もよくは分からないが草薙剣だとか星の結晶だとか言われているね」

「星の結晶ってなんすか？」

「星の消滅を凝縮した宝石だね。滅多に取れるものじゃないし、下手したら神器より貴重なものだよ。不確かな情報だけどね」

「……」

「いやもう言葉がでないっす。」

「ベルゼさん情報早すぎですよ。」

「その情報どこから仕入れているか教えてほしいですよ……。ベルゼさんと話している間に殆どの試合が終わったらしい。」

「次は、私の出番か」

「なんていいながらヴァルちゃんが立ち上がった。」

「ヴァルちゃんががんばってね」

「その呼び方は……もういい、好きにしてくれ」

あ、なんかちよつと肩落としちゃったけど気にしない！

俺は、頭を切り替えて団体戦のことを考えた。

やっぱり、強敵はインキュバス達だな、あの悪夢は厄介だ……。

他にも精霊チームなんか油断できないな。

なぐんて考えてると画面にヴァルちゃんの様子が映し出された。

相手はあのラーさんを打ち破った相手だ。

大丈夫だとは思うけど不安はぬぐいきれなかった。

あいつ………何者なんだ？

第十一話：百鬼夜行・バトルトーナメント！〜個人戦終盤〜（後書き）

・・・お前、色々と奥義使うよな。  
いくつあんだよ。

「あと8はあるぞ！」

でも、地球じゃ使えないんだろ？  
いみねえじゃん

「ふ、この俺がそれを考えてないわけないだろ！」

・・・使えるのか？

「当たり前だ！！全力出せば確かに気力なくなって大変なことになるが抑えれば問題ない！！」

抑えてどの程度の威力がおありで？

「ふむ、軽く地球は吹っ飛ばせるな。最終奥義なら」

この世のために死んでください。

「そりゃ無理だ。俺にはまだ世界最高のパフェを食べるという野望があるんだ！！」

そんな野望捨てて地に帰れ

「お前を地に返してやろうかあ？」

やめる……

ってか、お前奥義さ読み方なんて言うのか教えるよ

「んあ？読めねえのかバカ迅速」

俺は読めるが読めない人とか居るだろう。

「はいはい、言い訳はいいから黙ってる。

最初に使ったのは『きょつらはおつけん狂羅霸王拳』、次に使ったのが『ごげきそつけん五激気想拳』  
ってんだよく覚えときな！」

はいはい、狂弑さんありがとうございましたー（棒読み）

「んあ？んだてめえ俺のことバカにしてんのか？おら、ちょっとこ  
つち来いよ」

ば、ばか！やめる！！い、痛い！！耳を引っ張るな！！千切れる！  
千切れる！！

そ、それでは！！また次の話の後書きで！

「おらあー！」

いたあ！！ブチっていった！ブチって！

第十二話：百鬼夜行・バトルトーナメント！〜個人戦終幕〜（前書き）

いやあ、色々とありましたが個人戦、無事終幕いたしました。続きましての団体戦もがんばりますので、もうしばらくお付き合いくださいませ。

## 第十二話：百鬼夜行・バトルーナメント！～個人戦終幕～

（視点：狂式）

今、パフェ食いながらヴァルさんと謎の剣士の戦いを見てるんだが・・・ヴァルさんが押されている。

珍しいな・・・あのヴァルさんが俺以外の人間に遅れを取るはずがない・・・いや一人だけ俺が認知してる中でのいるな、ヴァルさんを倒せる奴が。

俺は思わず笑みをこぼした。今までどつちが強いか定かではなかったが・・・ここで決着をつけてやる！！

画面ではヴァルさんの剣を物ともせず攻撃を仕掛ける謎の剣士

「くっ・・・！！」

ヴァルさんが距離を取ろうとするが、謎の剣士はそれを許さず一気に間合いを積み、攻め立てる。

だが、ヴァルさんも負けずに切り返す。

「な、なんとという接戦だあ！！こいつあ俺もびっくりだ！ヴァルキリー相手にここまで優勢を取れる奴はこの会場にも数えるほどしか居ない！！あの剣士何ものだあ！？」

実況のがしゃどくろが騒ぎ立てるが正直ここまで来ると痛いだけの存在である。

「あ・・・実況の座敷童子ざせきどうしです、一言。骨野郎耳元みみもとでうげえんだよ」

座敷童子ナイスだ。

俺は冷徹な実況に心中で拍手を送りながら試合を見ていた。

やはり遊んでるとしか思えないような戦い方をしている。

そろそろ試合が始まってから20分が立とうとしている。

この空間での時間は元の世界には反映されないらしい、完全に孤立した空間ってやつだ。

なもんだから、どんだけ時間が経っても別段問題ないんだが……そろそろ飽きてきた。

それを察したかのように謎の剣士がヴァルさんを倒した。

『何と言つことだあ！！あのヴァルキリーが負けてしまったああああ！！！！』

『うるさいって言うてんだよ骨』

【バギィ】

『すまねえ、童子さん』

なにやら実況室では面白そうなことが起こってそうだが今はヴァルさんを迎えるほうが先決だ。

「どんまいよ〜ヴァルちゃん、今回は相手が悪かったただけだって、何せ俺の見た感じなかなかの使い手よ？」

殉がヴァルさんの肩に手を乗せるが軽く払われる。

地面にひざをついて落ち込んでいる殉は無視してヴァルさんに声を掛けた。

「お疲れ様ですヴァルさん、あいつどんな感じでしたか？」

「強い、本気を出していなかった。」

「そうですか、ヴァルさんの仇俺が取ってきますよ」

「・・・面目ない」

俺とヴァルさんの会話が終わると同時に実況の骨が喋り始めた。

『これで残り16人となったわけだ！！残った16人の紹介をしていくぜ！！』

一番目は前優勝者 オーデインだ！！

二番目は言わずと知れた 鎖野狂弑！！

三番目は見事ヴァルキリーを打ち倒した謎の剣士！！

四番目は巨大な狼 フェンリルだ！！

五番目はあの名作からの参戦 エル カイザー ！！

六番目は地獄の王 サタン！！

七番目は百の頭を持つ竜 テュポーン！！

八番目は雷を司る聖獣 麒麟！！

九番目は実態を持たない レイス！！



十番目は地獄に住む蠅の王 ベルゼブブ！！

十一番目は狡猾なトリックスター ロキ！！

十二番目はオリュンポスの長ゼウスだ！！

十三番目は天使長 ミカエル！！

十四番目は前大会惜しくも11位の  
みだればかがみ乱刃鏡

十五番目は見かけは可愛くても侮れない ケット・シー！！

十六番目は炎の魔人 イフリート！！

以上が本トーナメントを勝ち上がった猛者共だ！！この中でいったい誰が優勝するのか！！！！』

『馬鹿ドクロつるさい、頭もぐよ？』

『童子さん、それだけは簡便だぜ……ってこれから各ブロックの対戦相手を発表するぜ！！』

まずはAブロックDA！！

オーティンVSイフリートとキリンVSベルゼブブ

次にBブロックだZE！！

ロキVSケット・シーとテュポーンVS謎の剣士

Cブロックに来るのこいつRA！！

鎖野狂式VSサタンとレイスVSフェンリル

最後のDブロックはこの四にNN!

ゼウスVSエルデ イザー とミカエルVS乱刃鏡

決勝戦はABブロックからとCDブロックから各1名づつだお前ら  
あ!!最後まで会場湧かせやこらあああああ!!!!!!!!!!  
!!!!

【バキスコーン】

多分、実況の骨が座敷童子の怒りを買ったんだろう・・・

「おい狂哉」

「何だよ・・・・・・札術師」

「名前呼べよ!!!!ってそんなことどうでもいいが、何で乱刃がここに居るんだ!?あいつって確か新作の主人こ「それ以上喋ると母なる大地に帰る破目になるぞ?」すいません・・・」

それは置いといて、奴と当たるのは決勝か。こっちの山での難関は初戦のサタンと次上がって来るであろうフェンリルである。

参ったね、今まで見たいに一筋縄じゃ行かないか。

俺は試合を見ながらこの先の展開を予想した。

多分準決勝にはオーディンさん、謎の剣士、俺、ゼウスさんの四人が上がってくるだろう。

いつになく真剣な顔で画面を見つめていた。

（3時間後）

参った・・・まさかここまでとは。

たった今、上位4位が決定した所だ。

俺の予想ではオーデインさん、とゼウスさんが上がってくる・・・はずだった。

しかし実際が上がってきたのはベルゼブブ、謎の剣士、俺、エルカイザー　とかいう4人だった。

「んで、実際のところ勝てそうなのか？」

「どうだろうな・・・ロボットだしでかいだろ？動功術でどこまでいけるか」

今更ながら、説明しておくが一口に気功術と言っても導引、行気、吐納、内丹、存思といったようにいくつかの種類がある。上、内気功と外気功という使い方の違う方法がある。

内気功は自分の内側、つまり肉体強化や治療能力の向上などに向いているのに対し、外気功は気の放出などの遠距離での攻撃や治療などに向いている。

狂武が普段使っているのは導引の中の動功術という奴の内気功だ。動功術は攻撃より護身に向いているため、戦闘でも狂武から仕掛けるということはない。

ここまで説明して思う、奥が深い・・・。。  
他にも色々説明しなければならぬことはあるのだが・・・。コメディーなのであえて飛ばすことにしよう。

「まあ、お前なら奥義使えば倒せそうもんだがな」

「軽く言うな殉、アレはアレで使った後しんどいんだぞ。特に最終奥義なんて使ったら俺だっけどうなるかわからん」

どうやら狂式もかなり真剣になっっているらしい、いつものおちゃらけた雰囲気とは違い、とてつもないプレッシャーを感じる。

『勝ったのは謎の剣士だあ！！決勝戦進出決定だぜ！！！！』

実況の骨があまり意味のない実況を再開している。

【続きまして、準決勝2戦目を始めます。】

もうベルゼブブと剣士の戦いは決着がついたらしい。

まだ開始から5分と経っていない。

流星というべきか……

「俺の番か……行ってくる」

それだけ言うと、席を立った。

がんばれと言う声援を背にフィールドに転送された。

「ここまで上り詰めたその武勇、賞賛に値する！！」

これでも、前大会での準優勝者だ。なめられるわけにはいかない、いやそんなこと俺のプライドが許さない。

それなりの礼儀とこれでもかという威厳を見せ付ける。

だが、相手は何も言っていない。

「なれどその武勇！ここで終わらせてくれる！！」

俺はその言葉を言うのと同時に地を蹴り、自分の10倍はあろうかという巨大ロボット、エル カイザー の中腹部まで跳び上がり、そのまま相手に蹴りを入れた。

相手もそれを合図にしたように動き始めた。

こっちの蹴りはまったく意味を成さず、相手の攻撃を避けるため飛びのいた。

こんな馬鹿でかいロボット相手じゃ合気道なんか何の役にもたたねえよなあ……。

やっぱ奥義でも使わねえと勝てそうにねえか。

そんな事を考えている間も相手の周りを走り回り、ひざなどの関節部分に攻撃を入れる。

くっ！このときほどあの道士タオシ（前大会で16位決めの時に戦った相手）の武器を作り出す技が羨ましいと思ったことはないぜ！！

着実に攻撃を決めているのにまったく言っていないほどダメージの見られない相手に、少し苛立ちを覚えつつも、冷静に状況を判断していく。

このままだとこっちの体力を尽きて終わるか……仕方ない。

『気功！』

気功球を作り出し、隙だらけの相手の足に技を決める。

『発勁！』

相手の内部に衝撃を与える技だ。

硬い殻に覆われていたり、鎧を着た奴なんかには有効な技なのだが、果たしてロボットにも通じるのだろうか？

今までたいした変化はなかった相手だが、この時ばかりは大きくバランスを崩した。

どうやらそれなりには有効らしい。

それは相手にもわかつたらしく俺を近づけまいと戦い方を変えてきた。

大きさに反して割と早い。

それでも、俺の方が数枚上手で着実に発勁を決めていく。

途中わけのわからないシールドを何度か張ったがそのシールドを『  
虎月脚』と『轟龍掌』で打ち砕いてやった。

このバトル……もらった!!

そう思ったとき、相手が地面から剣を引き抜き始めた。

どうやらこのままでは勝てないと見て最後の切り札を使うらしい。

地面から引き抜かれた剣を俺が居る所目掛け投げてきた。

それを横に大きく跳躍して回避するが、剣が突き刺さった場所からとてつもなく大きな爆発が起こった。

「しまっ!!」

流星にそこまで予想してはいなかったためその爆風に吹き飛ばされてしまった。

直撃こそ受けなかったもののダメージはそれなりにあった。

くあっつう………やってくれる!

すぐさま立ち上がり、俺も構えを取る。

こいつには時間の掛かる奥義は使えない……っと、なんとアレしかないか。

「体内に収束せし気によりて、我は光をも上回り時さえも越える瞬  
神!!奥義!!」『瞬拳』

俺と数名以外にはなにが起こったかわからないだろう。

説明するところなる。

俺と相手との距離は約30m、俺が奥義を発動した瞬間光より早く



俺は気功球を作り、相手は一気に間合いを詰めてきた。

俺が相手の間合いに入ると容赦のない剣舞が俺を襲った。

この剣速と技量・・・ヴァルさんの比じゃないな。

その剣舞を全て紙一重で避けきり、反撃に移った。

上段からの振り下ろしの際にできたほんの一瞬の隙にローキックを繰り出す。

それを剣の側面で止められる。

その体制から相手の剣舞と同じくらいの速度の拳を繰り出す。

しかし、全て当たっているにもかかわらずまったく怯む様子がない。それどころか剣を構え切り掛かって来た。

なるほど・・・硬気功か！

相手の剣士も気功術の使い手らしい・・・しかも俺とは違う外気功型の。

相手を思いきり蹴り飛ばし、自分も後ろへ跳躍し距離を取る。

すると、剣士は斬撃に気を混ぜた物を飛ばしてきた。

それなりの速を持っていたがこの程度なら見切りきれぬ！

幾度が打ち出されたその飛ぶ刃をかわした時だった、悪寒を感じその体制から前に転がるように飛ぶ。振り返ると、今まで自分が居た所に雷撃が落ちた。炎のおまけつきでだ。

「厄介な剣を持っているな・・・」

このまま続けても拉致があかないだろうと予測した。

あまり使いたくはないのだが、この際贅沢は言ってられないだろう。相手の攻撃のが一瞬止んだ今、俺は自分のリミッターを解除した。

「我が内に眠る狂気よ！今こそ全てを解き放て！！」

この状態は今までの俺とは比べ物にならないほどの力を発揮するがその分正気と生命力を蝕んで行く諸刃の技だ。



だが、その分何の前置きも無しに奥義を連発できる。  
繰り返される雷撃と斬撃を避け、相手に『瞬拳』を使ったが、見事に防がれる。

反撃の氣斬撃を見切りつつ今までに使った奥義を連発して使っていない。

それにもなつて、剣士も今までのような小技ではなく大技を使うようになった。

相手が、まったく持って喋らないのは色々と事情があるからだろう。

『爆裂脚』

『獅子猛烈撃』

相手の技を避け、こちらの技を決める。

けれど硬気功のせいであつたくダメージが出ない。

多少なりとも衝撃は通っているはずなのでいつかは倒れるだろうがそれまでこちらのバーサーカー状態が持つかどうかだ。

この激戦を・・・始まつてからすでに60分以上繰り返している。そろそろ俺の正気が保てなくなつてきた。

ここいらで、決める!!!!!!

『氣縛』

名の通り、気で相手の動きを封じる技だが、こいつ相手には3秒と持つまい。

だが、一瞬でも攻撃が止めばこちらの物だ。

『爆裂!』

『金剛!』

連続で肉体強化を行い最終奥義を発動させる準備を整えた。

『最終奥義！真・霸王狂羅滅裂功！』  
しん・はおうきやうらめつれつこう

俺がこの技を放ったとき、相手も何かを言った気がするがすでに自分の技の轟音で何も聞こえない。

俺の拳と相手の剣がぶつかった瞬間、意識が吹っ飛んだ。

気がつく俺はカフエで剣士と肩を並べて立っていた。

わかっていた、こいつはまだ全力を出し切っていなかった。多分7割〜8割といったくらい力だっただろう。それでも俺は全力でぶつかれてそれなりに緊張感があり、充実できた。

「満足だ、ありがとう……」

俺はそれだけ自分を待つ奴らの元へ向かった。

〈視点：リア〉

いや、なんとも物凄い戦いでした……  
二人とも人間離れた動きと技で目で追うのがやっとなりました。

しかも、最後なんてお互いに奥義ぶつけ合ってとんでもない爆発が起きて、やっと画面が見れるようになったら何にもないし、誰も居ないし……  
これ、どっちの勝ちなんだろう？

『な、なんていうことだ！今の判定は二人の消滅が同時つつうこ  
とで引き分けだそうだ！！ってことはなんだ？優勝者が二人つてこ  
とか！？こいつぁ前代未聞だぜ！！だが、お前らよくやった最高  
のファイトだったぜ！！！』

どくろさんが実況をしているけど、たぶん誰も聞いてない。

「キョウウーーおつかれさま！すごかったよー！！」

「お疲れ様ですキョウウジさん」

「キョウウジ……お疲れ様」

「おつかれ」

皆戻ってきたキョウウジさんに群がっている。  
それだけすごかったんです。

【ただいまの試合の結果、両者優勝ということに決定いたしました。  
賞品を授与しますので転送者の所までお越しください。】

わあ……キョウウジさん優勝だ。すごいや……でも、優勝賞品  
つて一つじゃないのかな？

ボクが疑問に思っているけどジュンさんが色々教えてくれた。

授与が終わって戻ってきたキョウウジさんが持っていたのは黒い宝石

だった。

「どつやら“銀河の理”つつう宝石らしい」

……とりあえずすごい物らしい、ゼウス様やオーディン様が色々ときょウジさんと話している内容からしてとてつもない力が凝縮された物なんだって。

それで、もう一人の人は幻料理チケットをもらって早々にどっか行っちゃったらしいです。

「おつし、次は団体戦だな！」

あ、すっかり忘れてましたけど、まだ団体戦が残ってるんですね。約束もあることですから、汚名返上のためにがんばります。

第十二話：百鬼夜行・バトルーナメント！〜個人戦終幕〜（後書き）

.....

「いやあ、完敗だったなあ！」

.....

「?どうした、なんか暗くてキモイぞ」

結構酷いこと言うなあ前・・・

「これが普通だ我慢しろ」

俺の苦勞も知らずに.....

「まあ、知る気もないが次は団体戦だろ?やっと、ラウシン兄弟やイヤクウの出番が来るんだから気張れや」

はいはい、がんばってきますよ  
それでは

第十三話：百鬼夜行・バトルーナメント！〜団体戦編〜（前書き）

長編って疲れる・・・。

ってことで、初戦と第二戦飛ばしました。

が、その分物凄いバトルが繰り広げられております。

### 第十三話：百鬼夜行・バトルトーナメント！〜団体戦編〜

- 視点：狂式 -

・・・なんつーか以外だったな。

あいつらあんなに強かったのか。

今は第3戦目なんだが・・・っとは言ったものの団体はもともと参加数が少ないからすぐに準決勝になっちまうんだが、リア達もセフイ達も普通に勝ちあがっている。

リア達は初戦が去年第三位の精霊チームだったが、難なく打ち破り、セフイ達も去年ランクインしてる西遊記チームを軽く撃破している。俺たちはというと・・・ゴーン三姉妹のチームに苦戦中だ。

おおまかなルールは個人戦と同じだが、チームリーダーと呼ばれる存在が戦闘不能に陥った瞬間バトル終了となるのが大きな違いだろう。

チームリーダーは最初に決めるが決めた後は変更することができない。

「おい殉、メデューサ抑えろ！！聖子はレウリユアレを頼む！！」

俺らのリーダーは聖子がやっているが、チームでの役割なんざあったもんじゃねえ。

自分のやりたいように動いている。

よくこんなんで前回優勝できたと関心するほどだ。

「あ！狂式てめえ！抜け駆けすんな！」

俺が相手のリーダーであるステンノに仕掛けたとき、横から殉の符術弾が飛んできた。

符術弾が飛んできたほうを見ると殉がメデューサそっちのけでこちらに攻撃を仕掛けている。

「バカ殉が！！聖子があぶねえ！！」

聖子は霊力で大気の壁をつくって二人を抑えていたがじりじりとその距離を詰められている。

俺と聖子との間には殉が居るのでまっすぐ聖子の元に行くことができない。

しかし、周り込んでいるほどの余裕はない。

仕方ない！！

俺は瞬時に殉の元まで行くと

「だらああああああ！！」

背負い投げの要領で、思いっきり殉をメデューサとレウリュアレ目掛けて投げ飛ばした。

「き、狂弑！！貴様〜！！！！」

チユドーンとか言う音が聞こえたが気にせず踵を返し、ステンノを撃破した。

まったく、危うく負けるところだったぜ。

「狂弑てめえ！！なんてこせ【ヒュイン】」

フィールドからカフェに戻された。

なんか痛い奴の台詞とかぶってたけど気にしない。

とりあえず、耳元でギャーギャー騒ぐ殉を拳で黙らせた後会場に戻った。



画面では今、セフィたちが戦っている。

「キョウジさんお疲れ様です。」

「ああ、つたく危うく負けかけたぜ」

なんて話しながら画面に目をやると見事なコンビネーションでフィヴとフィルが技を決めているところであった。

やるなあいつら、これで出番少しは増えるんじゃないか？

因みにあいつらはセフィがリーダーらしい。

目印のティアラをつけている。

そんなことを考えている間にもバトルは続いている。

「魔王さま！そつちに一人行きました！」

「ふふふ、あたしの力をみせてあげ、魔王様には指一本触れさせない！！」「」

セフィが何か技を使おうと両手を前にかざしたとき、横からフィヴが来てセフィを吹っ飛ばして、向かってきた相手に雷撃を食らわす。

「魔王様！お怪我はありませんか！」

俺は思う、なんて空気の読めない奴だろうつと。

画面越しでもわかるほどにセフィは怒っているというのにフィヴを物凄い笑顔で「魔王様のご事は命に代えてもお守りいたします！どんな傷も負わせませんからご安心を！」とかほざいてる。起き上がったセフィは鼻の頭を少しすりむいていた。

「魔王様お怪我を！？いつたい誰が！」

「お前だ馬鹿者が!!!」

セフィの容赦のない魔弾でそのまま戦闘不能に陥ったフィヴをやれやれといった感じで眺めていたフィル。

相手のリーダーはすでに捉えられており、勝負は決してフィヴも気絶しているにもかかわらずセフィの怒りは収まらないのか、相手のリーダーをこれでもかと言うほどボッコボコにしていた。

「あ、次は準決勝ですね。キョウジさん行きましょう!」

「行くつてどこへだよ」

「何言ってるんですか?次、ボク達とキョウジさん達のチームの対戦ですよ」

「.....はあ!?!」

ちよつとまで、そんなの初耳だぞ。

俺はテーブルの上に置かれたトーナメント表(殉が映してきたもの)を見た。

確かに、準決勝でリア達と当たるようになってるが.....  
これは少し飛ばしすぎじゃねえか?おい、どうなんだよライターさんよお

< 黙秘権だ >

後で覚えとけ。

殉や聖子はもうテレポーター転送者の所に行ってるみたいだし、俺も急がないと。

「キョウジさん、急いでくださいよ」

「おう、わりい今行く」

リア、お前待っててくれたのか……。今更だがいい奴だな、今度なにか特別に作ってやるか。

俺たちが転送者の所につくと、殉が遅いぞと言ってきた。

まあ、俺が悪かったわけだし、素直に謝ったが、こんな奴に……。なんて気持ちのほうがはるかに大きかった。

控室で話し合ったが、結局うまくまとまらずグダグダのままフィールドへ飛ばされた。

フィールドに着くとイヤクウが詠唱を始めていた。

「まずい、散れ!!!」

俺たちは即座にその場を飛びのいた。

その直後、今まで俺らが居た場所を氷の矢が襲った。

こうして、俺たちとリア達の勝負が幕を開けた。

- 視点：リア -

今は控室でキョウジさんたちと戦うに当たったの打ち合わせをしています。

「メシアはジュンさんを抑えて、あの人は遠距離型だから接近戦には弱いと思うんだ。で、イヤクウはフィールドに着くと同時に詠唱始めて、使う技は範囲の方がいいかな。その間にボクはシヨウウコさんに攻め入るよ。キヨウジさんは無視、近寄ってきたら極力戦わないうで距離を取って。キヨウジさんは接近戦が得意だから近づいたらたぶんやられる。いい？」

「コク」

「まかせて」

メシアとイヤクウはそれぞれ返事をした。

その後すぐにフィールドに飛ばされた。

イヤクウは作戦通り呪文を唱え始めた。

メシアは飛びのいたジュンさん目掛けて駆け出している。

ボクは一度キヨウジさんを見て、居る場所を確認してからシヨウウコさんに向かって駆け出した。

シヨウウコさんとボクの直線状に遮るように立っていたキヨウジさんはさっきの回避行動で大幅にその位置をずらしている。今ならキヨウジさんが体制を立て直すより早くボクはシヨウウコさんの所にたどり着ける！

ボクの中ではそう確信していた。にもかかわらず、キヨウジさんはボクの前に立ちはだかった。

とっさに足を止め、横に転がるようにして回避行動を取る。すると、今ボクが居た場所がえぐられている。

危なかった、一瞬でも遅ければいきなり負けるところだった。

今のでわかったかと思うが、このチームのリーダーはボクだ。

つと、そんなことよりなんでキヨウジさんがこんなに早くこの位置まで戻ってこれたのかを考えた。ボクが確認したときはまだ回避行

動の前転と途中だったのに。

一瞬キョウジさんから目を離してキョウジさんが居たであろう場所を見ると、その位置も大きくえぐられた様になっていた。

なるほど、崩れた体制のまま地面を思いっきり殴るか蹴るかして今の位置までできたのか。

ボクとキョウジさんの距離はおおよそ20m。この距離は正直言って危ない。キョウジさんなら一瞬で詰められる距離だ。

けど、動くに動けない。下手に動けばキョウジさんの技の餌食、それを避けても後ろで控えてるシヨウゴさんの遊撃までは対処できない。

そんなギリギリの状態を打ち破ったのはメシアだった。

ボクの危険な状態を見て、戦ってたジユンさんを力づくでキョウジさん目掛けて吹っ飛ばしたのだ。

ボクはその隙に大きく後ろへ跳躍して距離を取り、体制を立て直した。

ボクを真ん中に右にイヤクウ、左にメシアだ。

「殉てめえ邪魔すんじゃねえ!!」

「うるせえ！お前こそさっさとけりつけりゃ良かったじゃねえかよ！」

キョウジさんとジユンさんが言い争っている。

今がチャンスだ！

「行くよ！」

ボクがまっすぐ駆け出し、右方向にイヤクウ、左方向にメシアが駆け出して二人を囲んだ。

『レイ・ブレード！』

『エリアブリザード！』

『ブレイカーアース！』

ボクは剣から光を放つ斬撃を飛ばし、イヤクウはキヨウジさん達が居る場所のみに雹を含んだ吹雪を起こす。そしてメシアは大剣で地面を切りつけ、キヨウジさん達の足場を崩した。

「！いい争いなんかしてる場合じゃなかつ！クツウ！」

「防御が間に合わな！ぐあ！」

キヨウジさんとジュンさんがボク達の攻撃を直撃して倒れた。

これを好機と見てシヨウコさんを倒しに向かった。

三人でシヨウコさんを囲み、それぞれ技を出すけど、大気の壁で阻まれて殆ど届かない。

しばらく攻撃を続けていると

『やふしぐれ矢符時雨！』

『気弾！』

後ろから二人の攻撃がボクを襲った。

その攻撃を、とっさに動いたメシアが大剣を盾に防ぐ。

一旦三人から距離を取って様子を伺う。

「おい殉、あれやつぞ」

「え、あれやるの？嫌なんだけどなあ……」

「つべこべ言うな！聖子もいいよな？」

「あまり気は進みませんが、負けたくはないですから。」

「はいはい、わかりましたよお。」

どうやら取って置きの技を使うらしい。

ジユンさんが札を取り出して何かを唱え始めた。

「我等が人に在りし二つの意思を逆転し、御身を操りて対者を葬れ  
！『意転呪符いせんじゆふ！』」

ジユンさんが持つていた札が弾けると、光の粒子が三人を覆った。  
しばらくしてそれが晴れると、三人は何も変わらずに立っていた。  
いったい、なにが起こったんだ？

その疑問はすぐに解決した。

「ふう、なんで表は私のことを封じこめるのでしょうか」

「シャハハ！しょうがねえだろう、裏なんざお呼びじゃねえつつう  
こつたるう！」

「久々だからあまり慣れてないけど……彼等が相手なら十分か  
な」

三人ともさつきまでと雰囲気ガラッと変わっている。

キョウジさんなんか物凄く丁寧な言葉遣いで私とか使ってるし、ジ  
ユンさんは半分狂ったようになってるし……もともとおかしかつ

たけど、シヨウコさんも男みたいな喋り方をしてる。  
どうなってるんだろう。

「シャハ！おい、その黒髪い！」

ジユンさんがボクを指差してきた。

「なにが起こってるかわからないって顔してんなあ、俺が教えてやるよ。俺たちやよお、裏人格って奴だ。人間誰しも裏と表があるだろお？その裏側を無理やり表に引き釣り出したわけだあわかつたかあ？」

そんなことができるんだ……。

「つつうこつて行くぜおらあ！！」

特攻してきた裏ジユンさんをメシアが止め、その後ろからやってきた裏シヨウコさんをイヤクウが魔法で誘導した。

その後ろで腰に手を当てて立ってる裏キョウジさんがため息をついている。

「はあ、なんで私がこんなことをしなくてはならないのですか……」

「つるせえなあ、戦え銀尾ぎんお！おら、『呪符刀じゆふとう』だあ！」

「小鎌これん、そう怒鳴らないでください。巫様みよつさんも何か言ってあげてくださいよ」

「仕方ないんじゃか、分かり合えないんだもの」



「そついつこつた！」

裏キヨウジさんが裏ジュンさんが札で作った2本の剣を逆手に持って構えた。

「赤青眼せきせいがんの君、リアさんと申しましたか……参りますよ！」

なんて言うやいなや、とんでもない速さで100mの間合いを積み、双剣乱舞をはなつて来た。

逆手持ちにもかかわらず、首元を狙った正確な突きや左右からの首と腹を狙った交差切りなど、高度な技ばかりだ。

キヨウジさんにこんなことができるなんて思ってた……。

いや、正確にはキヨウジさんじゃないのか。

ボクが攻撃を剣で受け流していると、唐突に裏キヨウジさんの姿が消えた。

！？どこに行つた！

「うわぁ！」

イヤクウの叫び声が聞こえ、そつちに目を向けるといつの間にも移動したのか裏キヨウジさんが、裏シヨウゴさんとのコンビ攻撃でイヤクウを切り刻んでいた。

「イヤクウ！」

「リア！危ない！！」

「油断大敵じゆんたいてきつう諺ことわざってしつてつかあ？」

イヤクウに気を取られ、油断しきっていたボクの背後から裏ジユンさんが札を爆発させてきた。

「ぐわあ！」

数メートル飛ばされた。

ボクに気を取られていたメシアも、裏シヨウコさんの霊力の籠った蹴りをもらって僕の近くまで転がってきた。近くにはイヤクウも倒れてる。

つ・・・強い、流石去年優勝しただけある・・・。

でも、勝てない相手じゃない。今のキョウジさんは早いけど、強い相手じゃない。

もし、ジユンさんの使う札術が魔法に順ずる物ならボクの魔法で解除できるかもしれない・・・。元に戻ったときキョウジさんが居なければボク達にも勝機はある！

「メシア、イヤクウちよつと耳かして」

倒れた状態でヒソヒソと話しをした。

「いい？今のキョウジさんは強くない、早いだけだからメシアが止めて、僕とイヤクウでキョウジさんを倒す。その後ボクの『スペルキャンセラル』でジユンさん達を元に戻せるかやってみる。元に戻せればボク達でも勝てるよ」

「わかったやってみるよ」

「任せて」

ボク達は起き上がって構える。

「そろそろ、止めときますかあ」

裏ジュンさんと裏シヨウコさんがボクたち目掛け突進してきた。裏キョウジさんはそれを見ている。思ったとおりだ！

「今だ！」

ボクの掛け声とともに、突進してきた二人よ避け、裏キョウジさんを仕留めに掛かった。

「な!？」

不意に狙われてパニックになっている裏キョウジさんのことをメシアが大剣で押し倒した。

そこにボクの剣とイヤクウの『ライトニングチャージ』が裏キョウジさんを貫いた。

断末魔の叫び声を上げて裏キョウジさんは動かなくなった。キョウジさんごめんなさい!!

「つつかえねえ〜なあ〜銀尾のやつあ」

「余裕で居られるのも今のうちですよ！」

ボクはすぐさま裏ジュンさんの懐へ潜り込み、『スベルキャンセラール』を使った。

青い光が裏ジュンさんを包むと、元のジュンさんに戻った。成功した！

そのままジュンさんを突き飛ばし、それに巻き込まれた裏シヨウコ

さんにも同じ技を使う。

二人とも元に戻した。

これで、向こうの戦力を大きくそいだ。

「一気にたたみ掛ける」

メシアが大剣をブーメランのように投げる。投げられた大剣はまっすぐジュンさん達目掛けて飛んでいくが、立ち上がったばかりのジュンさんに防がれてしまう。

それを待つてましたかとばかりにメシアが大剣をキャッチして、ジュンさんを一刀両断にした。

これで、残りはシヨウコさんだけだ。

「シヨウコさん、これで残りは貴方だけです。降参してくれませんか？」

「……………仕方……………ありませんね、勝ち目……………ありませんものね」

こうしてキョウジさんたちとの勝負に決着がついた。

……………勝てるなんて思ってた。

カフェに戻るやいなやボクは立てなくなってしまう、キョウジさんにおんぶしてもらって会場に戻った。

第十三話：百鬼夜行・バトルーナメント！〜団体戦編〜（後書き）

「次でCBT終わりか？」

そうしたい……。

そろそろネタが溜まってきたからさっさと終わらせないとわからなくなる。

「でも、まさか負けるなんてなあ」

リア達は団体戦が基本だろ？なら負けてもしょうがないだろう。

「俺、内側で見てただけだけだな」

なんだ、あれ内側から外の様子見れるのか

「おう、じゃないと暴走したときどうすんのさ」

暴れっぱなしとか？

「冗談じゃねえ！俺の体をわけのわからん奴に勝手に使われてたまるか！」

わけわからんて、裏の自分だろうに……

「そんなのしるかあああ！！！！」

あゝ……嫌な予感がするから俺はこの辺で……逃走！！

「あ……マテや……俺に覆ひ晴らしをせろおおおお……！」

第十四話：百鬼夜行・バトルトーナメント！〜終幕〜（前書き）

百鬼夜行もついに終幕です！今回は意外な人物の視点で物語を見ていきますのでご期待ください！

第十四話：百鬼夜行・バトルトーナメント！〜終幕〜

視点：フィル

まったく、フィヴのバカさ加減にはいい加減いやけがさしてく……ん？

なんだ、僕視点なのか。

丁度いい、一緒に笑ってくれよ。フィヴのバカすぎる行動をさ。

ついさつき決勝戦への切符を掛けた戦いが始まったんだけど、フィールドって言うんだっけ？

に出た瞬間にフィヴ……バカが相手に向かって突っ込んでっただよ。

それでボゴボコにやられて帰って（投げ返されて）きたんだよ？

これを笑わずになにを笑うというんだい？

とりあえず、戻ってきたバカに蹴りをお見舞いしといただけ……さて、どうやって崩していこうかね。

相手をじっくりと観察しながら攻略方法を考える。

自慢じゃないけどここまで勝ち上がってきたのって僕のおかげなんだよ？

初戦の時は僕の指示がなかったら負けてたし、二戦目はバカが余計なことしてくれたおかげで魔王様に僕の技が直撃して危うく絞め殺されるところだったし……。

まあそんなことはいいとして、今回の相手は厄介そうだな。

尻尾の二本ある猫と九本の尻尾をもつ狐とイタチか、曲者はイタチか。

前者の2匹は半端ない魔力を持つてるし、イタチは魔力は少ないが恐ろしく早い。

まずは様子見ながら作戦を考えるとしよう。

フィヴの頭に足を乗せてぐりぐりとしている魔王に声をかける。



「魔王様、適当に仕掛けてくれませんか？」

言っちゃ悪いが、なんでこんなのに様なんでつけなきゃならないんだろう……。

「まっかせて！」

フィヴの頭を思いっきり踏みつけて、お得意のダークボールを放つ。ダークボール（通称意DB）は魔力を圧縮してできた物を投げつけるといふ、本来ならばなにに使うのか使い道すらもわからないほど初級も初級の誰しもができる技を、魔力の桁違いな魔王が使つと恐ろしい攻撃技に変わる。

DBは、ぶつかれば弾けるという特性を持っているわけで、魔力の量によつて弾けたときの衝撃が大きく変わる。最弱だとそよ風程度だが、最強だと樹齢3万年の東京　ムより太い幹を持つ大木を一発でへし折る。魔王が使つてるのは後者ほどの威力をもっている。は？なんで東京　ムなんか知つてるかって？テレビで見たから。まあ、そんな恐ろしい物を撃ちまくっている魔王を横目に、相手の動きを見る。

……よし、まずはあのイタチから潰すか。

ついでに言つと向こうの頭は狐だ。

魔王もフィヴも考えて戦うなんてことしないから僕がしっかりしないと……。

それにキヨウさんも油断できないしね。僕はまだあいつを信用したわけじゃないんだ。

「魔王様とばk……フィヴ、まず、あのイタチを潰してから狐を叩く方向で行きます。よろしいですね」

「任せろ！」

「今明らかにバカって言おうとして言い直したよね！フィルの癖に生意気だぞ！」

そこで一生ほざいてるって思う。

口にしても仕方ないから思うだけだ。

さてつと、戦闘開始です！

僕は魔力で剣を作り出す。被るかも知れないけど得意分野は双剣だ。逆手持ちじゃないけど、裏のキョウさんの戦い方はいい参考になったと感謝しておく。

ついでに言うとフィヴは接近魔法型だから相手に直接魔力を打ち込むという戦い方をする。

確かに、相手の体内に直接魔力を打ち込めばかなりダメージは大きくなるが、その分リスクが大きすぎる。僕はそんな無謀なことはいない。

魔王のDBが止むと同時に駆け出してイタチと対峙する。

前回の戦いを見る限りだとすきなときに尻尾や足先を鎌に変化できるらしいな。

そんなのかんけないけど・・・ね！

右手に持つ剣を突き出し、回避したところを狙って左手に持つ剣で払う。

しかし、尻尾を鎌に変えて防がれてしまった。

チツヤっぱり防がれるか。だが、その体制でこれが避けられるか？突き出していた右手の剣を体制の崩れているイタチ目掛けて横薙ぎに払う。

けれど剣先を少し掠めただけで避けられてしまった。

なかなか・・・やるね。

一度距離を取ろうとイタチが動くが、そんなことはさせない。

左手に持つ剣を投げで退路を塞ぎ右手に持つ剣でイタチを追い詰める。そして

「ファイヴ!」

「任せて! 『魔波!』」

完全に僕に気を取られていたイタチは僕の背後でチャンスを待っていたファイヴに気づくことができず、ファイヴの改心の一撃を頭にもらつてそのまま退場となった。

「次はあんただよ。」

剣を狐に突きつけて宣言した。

「余も舐められたものじゃのう」

相手の狐が喋り始めた。

やはりそれだけの力は持つてたか。

「おぬしらのようならし共に風切がやられるとはのお」

なんていいながら土煙で自分の姿を隠した狐。

あのイタチ、風切って言うのか。

今更ながらこの獣たちにも名前があることを知った。

そんなのどうでもいいけどね。

土煙が晴れると、そこには和服って言うの? なんか時代劇とかに出てくる姫様みたいな服を着た女の人立っていた。しかも9本の尻尾と狐の耳は健在で。

「うは！すごい美人さんだ！」

隣で興奮してるフィヴを剣の柄で容赦なく殴り倒してから再び狐を見た。

あいつ女だったのか。因みに、隣に居た猫まで人型化している。

なかなかカッコいい男の人だ。服装は狐と違って黒いタンクトップに紺色のジーンズという、いかにも今風な服を着ており2本の尻尾と猫耳はこちらも健在だ。

「そんな格好になったから何かがわかるわけ？」

剣を突き付けなおして問いかける。

別に問いかけたからなんだというわけではないが流利的にこう言うておいたほうがいい気がしたからだ。

「そうじゃの、「君たちに勝てる」くらいかのお。って双尾なぜ余の台詞と取ったのじゃ」

「.....」

「相変わらずだんまりじゃの、少し寂しいぞ」

ヨヨヨといった感じにその場に倒れるように座り込んだ狐を見ながらため息をつく。

はあ、なんだか戦うのがバカらしくなってきたな。剣をおろして飽きれていると

「あの野郎、ちょっと顔がいいからって調子乗ってんじゃねえぞ！」

隣でフィヴがわけのわからない闘志を燃やしている。

いや、もうなんかマジでうざくなったので、今までの恨みと口ごとの鬱憤を晴らすために剣で滅多切りにして退場させてやった。なにやら不思議そうな目で狐が僕のことを見ている。

「何か？」

「何かって、良いのか？仲間を退場させてしまってよかったのか？」

「別に構いませんよ、あんな空気の読めない馬鹿なんか居ても居なくても変わりませんから。」

「それなら良いのじゃがおぬし、顔がすごく怖いぞよ。」

「ほつといてください、生まれつきですから。じゃ、行きますよ」

すでに投げやりな感じで剣を構えて狐目掛けて走り出す。

すると、予定道理というのか猫の奴が邪魔しに来た。

やっぱり素直に頭はやらせてくれないか。

ついでに言つと魔王は後ろで眺めてる。

我関せずかこの野郎。

なんて思いつつ、剣を振るうが避けられる。

意外とヒョイヒョイと避けてくれるのだ。しかも動きが独特で猫のようだ。いや、猫なんだけどさ……。

避け方が3撃目が絶対に入れられない場所に逃げるのだ。

仕方ない……というより、もうすでにめんどくさい。

「魔よ集え！白狼の怒りを対なる刃に！我が激昂を切り裂く風に！

紫電を用いて全てを滅せよ！『紫封陣！』」

僕の持つ二本の剣に紫の電撃が纏わりつく。

それを四方に飛ばしで陣を描く。

「めんどくさいから一緒に吹き飛んで」

この技は本来自分が陣の中に入らないように使う術だ。

内方型術式陣って言う種類で、描かれた陣の中に居る者全てを無に帰す技だ。

ぶっちゃけ死ぬ間に周り巻き込んで死ねって感じて編み出された技なんだけど、発動と同時に走る紫電がすごく綺麗だから結構気に入ってるんだよね。

今からでも走れば陣から出られるがそれは相手も同じなので、逃げられないように剣舞を続けた。

「フィル！！早くそこから逃げて！！」

背後で魔王が何かわめいてるがそんなもん無視だ。

「おい猫、最後だし名前くらい聞いといてやるよ。」

「……………“ふたお”だ」

「フィルだ」

互いにフッと笑いあい……………退場となった。

それなりに面白かったけどさ、あの女狐を巻き込めなかったのが尺だったな。

会場に戻るとフィヴが物凄い勢いでつつこんで来るので避けて足を掛けてやった。

豪快にすっころんで転がっていきのをシカトしてモニターを見る。画面内では魔王が肩を震わせていた。

「……か、あの馬鹿！！あたしに一番めんどくさいこと押し付けてた！！」

最初は泣いてるのかと思ったら、激怒してました。どうか怒りが晴れて戻ってきますように。

「……苦労してるな」

「あまり言わないでください」

僕の肩に乗っかっている黒猫姿の双尾と会話をしながら観戦することにした。

「のう、わらしよそろそろ終いにせぬか？」

「そうね、あたしもそう思ってたところよ」

「気が合つのお」

「まったくね！」

なんだか無言のまま妙に不気味な笑顔で相手を見ている。

つと、次の瞬間お互いにその場を動かさないまま何かを飛ばし始めた。魔王は言わずと知れずDBと呼ばれる魔弾。

狐の方はよく分からないが針のようなものを飛ばしている。

「アレは妖力を込めた毛だ」

言葉にもしていないのに双尾が説明してくれた。

こいつ、心の中でも読めるのか？

「ああ、尻尾が二つに分かれたとき読めるようになった」

流石妖怪っつてか、じゃあ僕喋らないよ？

「それは私が変人に見られるからやめてくれ」

「……充分変だけどわかった」

話をしているうちに戦況が大きく変わっていた。

狐が優勢の状態だ。

なにがあつたか知らないが、おでこがぶつかりそうなほど顔を近づけて口喧嘩なんかで勝負している。

ギャーギャーワーワーと馬鹿らしい。

しかも魔王の奴、口喧嘩弱いからなあ……そのうち言い返せなくなつて泣き出すぞ。

「ふん、所詮おぬしのようなちびっ子にはその貧相な体がお似合いぞ！」

「そ、そんなことないもん！……もん。うう、うわあああん  
！」

ほら、言わんこつちやない。

「ば、ばか者！泣き喚きながらそのような魔力を！！」

【チュドーン！】

口喧嘩で負けたのが悔しくてか半べそ状態で開放した魔力が、運が



いいのか悪いのか狐に直撃した。  
そのせいで狐は目を回して倒れてしまった。

「なんか、あつけないというか情けない終わり方ですね。」

「……………ですね」

何て言うかアホ臭い。

見ているすでに頭が痛い。

魔王が狐を戦闘不能にしたので僕らの勝ちが決定したのだが……………。

次は決勝戦で、しかもリア達と……………駄目だ、まったくもって勝てる気がしない。

転がってるフィヴを引きずりながら控室へと向かった。

- 視点：イヤクウ -

ううゝまさかの決勝戦です。

キョウジ君たちに勝てるなんて夢にも思っていなかったので、心臓がどきどき言ってます。

「・・・イヤクウ！ボーっとししないで、」

「あ、ごめん」

緊張しすぎて頭の中真っ白ですよ・・・

「向こうはフィルさえ倒してしまえば後は力押しでどうにかなると  
思うんだ、だからまずはフィルを狙って。」

僕は頷いて杖を見た。

心を落ち着けなきゃ、魔力の伝達や収集に支障がでる。

「絶対勝つよ！」

なんか妙に気合の入っているリアルトを闘志全開のメシアを見つつ  
僕も杖に気持ちを込める。

絶対に勝つんだ。

僕たちがフィールドに着くと向こうはすでに戦闘態勢だった。

メシアとリアが全力でフィルを倒しに掛かった。

けど、フィルもそれをわかっていたらしく、

「ファイヴ今だ！」

『こりつけつかいれんく  
孤立結界練紅！』

4人を閉じ込めるように半円形に薄紅色をした半透明の壁が形成さ  
れていく。

僕は直感でアレは危険だと判断した。

そして、同時にリーダーであるリアルトをあの中に入れるわけには  
いかないと思うい、自分とリアルトの位置を変える魔法を発動した。



せつかくの視点持ちで活躍できると思っただのに……。  
だいぶ落ち込んでます。

「イヤクウ……ドンマイ」

僕たち4人を退場にした張本人にドンマイとか言われたくないよ・  
・  
今は会場でリアルトとセフィの一騎打ちを見守ってます。

最初は二人とも啞然としてましたが、あときの決着をとかなんと  
か言って戦いだしたわけで……。

言葉にできないほど激しい打ち合いを繰り返しています。

剣と剣が打ち合う音がひたすらに響く画面を見ながら、注文してい  
たオムライスを食べる。

僕、これ気に入ってるんですよ。

オムライスを食べているうちに決着がついたらしい。

『奥義！！霧雨』

リアルトの使った奥義霧雨がセフィを切り刻んだ。

霧雨は連続で繰り出す突きで相手を滅多刺しにする技なんだけど、  
流石魔王って言うだけあって、その殆どは防がれてたけど、決まっ  
た数発が致命傷になったらしい。

「僕たちが勝てる道理はこれっぽっちもなかったんですから、当然  
の結果ですね。」

フィルがさめた口調でそんなことを言った。

「なんで？あんなに強いのに」

「考えてみて、僕たちの元いた世界って争いが殆どなかったんだよ？力わあつても使い方に慣れてないんだから君達みたいに度を続けてきた人に勝てるわけないじゃないか。」

「じゃあ、なんでさっきはサシなら負けないとか言ったの？」

「フィヴがうるさいから適当にあしらっただけ」

「・・・そうですか」

確かにその通りだけど・・・決勝戦のわりにずいぶんとあっさりというか、盛り上がらなかつたね。

<準決勝白熱させすぎたから、沈鐘化方向で書いてみました。>  
さいですか。

こうして百鬼夜行・バトルーナメントは無事終幕したんだけど、この賞品・・・どうにかならないかな？

食べ放題チケットと竜の秘宝って書かれている球なんだけど・・・この球、バスケットボールの3倍くらいあるんでどうしたらいいやら困ってます。

リアルトはチケットを配ってからさっさとどこかへ言っちゃうし、メシアはケルベロスとじゃれてるし・・・誰か助けてくださいよぉ・・・

僕の悲痛な叫びが聞こえたのか、キョウジ君が秘宝を持ってくれました。

「おら、お前らいつまでここにいる気だ。さっさと帰るぞ！」

「……………はい……………」

長かった百鬼夜行も終わり、家に帰ったのだけれど、皆疲れてたの

か帰るなりベッドで横になってしまった。

なんていう僕もなんだけど。

疲れたんだからしょうがないよね。

起きたらまずシャワーを浴びようなんて思いながら眠った。

第十四話：百鬼夜行・バトルーナメント―終幕―（後書き）

いやあ、やっとCBTが終わったよ。

「マジで長かったなあ。」

その分盛り上がっただろ？

「あいつと戦えたのは良かったな」

おかげで俺もずいぶんネタが溜まったよ。

「お？じゃあ更新は早いのか？」

もちろんよ！つと言いたいところなんだけど、学校と部活とバイトがあるからそこまで早くは更新できないのさ。

「色々大変なんだな。なんていわねえからな、2、3日更新でいけよ？できなかつたらピ　して、ピ　するからな。」

なんとも生々しい脅しを・・・ヒイ！わ、わかった！がんばるか  
らー！！

ところで本編でのリアはどこ言ったのさ。

「あ？なにやら約束を果しに行くつつあったよ」  
詳しくは評価／感想をお読みください。

つと、時間が・・・。

そんなのって有りですか！？をお読みくださってありがとうございます。

これからも面白可笑しい物語を綴って行きたいと思えますので未熟な私ですが、読者様方の温かい目で評価していただけたらなっと思えます。

それでは！

「最後までかっこよく締めやがって、まあいいか。そいじゃーな」



## 第十五話：イヤクウの料理と狂気の秘密？（前書き）

更新かなり遅れました事、誠に申し訳ございません。

詳細は後書きに記載しますので、どうぞ本編をご覧ください。

## 第十五話：イヤクウの料理と狂武の秘密？

- 視点：イヤクウ -

プ。プ。プ。プ。プ。プ。

うるさく鳴る目覚ましを止めてベッドから置きだして着替える。  
窓から外を見るとこれから日が昇ろうとしているところなのか、淡い青色をしている。

この、朝と夜の入り混じった空をマジカルアワーと言っつて、ある漫画で書いてあったな〜  
なんて事を考えながら伸びをする。

部屋を出てリビングに行くとするでに狂武くんが起きていてコーヒーを飲んでいた。

「おはようございます」

「ん、おはようイヤクウ」

僕も椅子に腰掛けて入れてあったコーヒーを飲む。

最近がこれが日課になっている。

僕がコーヒーを飲み終って空になったコーヒーカップをおくと、狂武さんが立ち上がったってキッチンへ向かった。

それに続くようにイヤクウもキッチンに行った。

「今日は焼き鮭とサラダとジャガイモの味噌汁の3品を作ってもら  
う。前に一通り教えたものだから俺は一切口出ししないぞ」

「はい」

1週間ほど前から狂式さんに料理を習いはじめて、今日がそのテストの日なのです。毎日朝食と夕食を作るときに一緒にキッチンへ行き、手伝いをしながら色々教えてもらいました。最初の2日間はずっと千切りやら銀杏切りやらやらされて、次の日がお味噌汁の作り方、その次の日が魚の焼き方と狂式さんが作るのを真似しながらやってきたんですが、不安です。

「ああ、ついでにタイムリミットは1時間な、7時までに7人分仕上げよ」

「な、7人分ですか・・・」

「おう、お前が作った物がそのまま朝飯になるからな」

「わ、わかりました、がんばります」

イヤクウは前に狂式が使っていた青色のエプロンをつけて作業に取り掛かった。

まず鍋に水を入れて火にかける。

鍋の水が沸騰するまでの間に、ジャガイモを水で洗って皮を剥き適当な大きさに切っておく。

ジャガイモが切り終わったら次はトマトを8つに切って適当にむしったキャベツと斜めに切ったキュウリと一緒に皿に盛り付ければサラダの完成だ。

サラダを作っている間に鍋の水が沸騰したからここにさつき切ったジャガイモを入れる。

これではジャガイモに火が通ったらほうれん草を入れて2、3分ゆでて味噌を入れれば味噌汁は完成する・・・とあとは焼き鮭だ、フライパンに油をしいてそこに鮭を4切れ、くつつかない

ように入れて焼く。

順調にこなしていくイクウに感心しながら時計に目をやる。

意外と時間が経つのは早い物であと15分で7時になってしまふ。

「あと15分だぞ」

狂武はイクウに声を掛けるが当人には聞こえていない。

よし、鮭7人分は焼き終わったからあとは鍋に味噌を入れれば・・・

「できた」

「お・・・時間ギリギリだな」

「な、何とか間に合いました」

「それじゃあ配膳よろしくな、俺は寝てる奴ら起こしてくる」

「はい」

リビングをでて2階に向かう足音を聞きながら食器に盛り付けをしていく。

ある程度並べ終わったところにリアルト、メシア、セフィリアンの3人がパジャマ姿で降りてきた。

「イクウおはよう」

「・・・おはよう」

「みゅー・・・おはよう」

「3人ともおはよう」

最後の配膳を終えてエプロンをはずしたとき

ズドオーン！！

と音が2階から聞こえてきた。

多分ラウシン兄弟が狂式さんの餌食になったのだろう

ご愁傷様……

それから少しして、二人を引きずって降りてきた狂式さんが席に着いたところで「いただきます」をした。

「なかなか美味しくできてるじゃないか」

唐突に狂式くんがそう言った。

「え、これってキョウジさんが作った奴じゃないんですか？」

「いや、今日は全部イヤクウが作ったやつだが？」

その一言で全員が僕の方に向き直った。

「イヤクウいつの間に料理なんてできるようになったの？」

「クウっていつもぼくらと遊んでた記憶しかないんだけど？」

「朝ごはん作るときとか、狂式さんを手伝いながら色々教えてもらったんだよ」

女性人は狂式くんの名前が出た瞬間視線が鋭くなり、ファイルは関心の眼差しで、フィヴは黙々と食事をしながら僕を見てきた。

正直、結構怖い。  
特にメシアが怖い。

「ああ、今日俺出かけるから昼飯はイヤクウに好きな物作ってもらえよ」

苦笑いしている僕に狂武くんはとんでもないことをさらっと言った。思わず立ち上がって声を張り上げてしまった。

「そんなの聞いてないですよ!!」

「そうだろうな、言ってねえもん」

もう駄目だ……この人には常識は通じない。

いや、もともとわかってたことですし、僕よりもこっちの世界の常識はあるのですが、他人なんか知ったこっちゃねえみたいで……

253

「僕、オムライスが食べたい」

「あたしチャーハン！」

「ボクはハヤシライスが食べたいな」

「……ハンバーグ」

「ちょ、好き勝手言わないでよ！ 僕だってそんなに色々作れるわけじゃない」ほら、レシピ帳「……無用な気遣いありがとう  
ございます」

「ああ、お前ら材料がたくさんあるわけじゃねえんだからどれか一品だけにしろよ。それにこれも練習だぞイヤクウ」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

狂武くんは実に色々と考えて居るみたいですが・・・・・・・・自身なんてこれっぽっちもないんですから、何もいきなり任せなくてもいいじゃないですか・・・・・・・・

深く沈んでいるイヤクウを他所に他の面々は昼になにを作ってもらうかで討論をしていた。

「やっぱりチャーハンだよ！」

「ここはオムライスでいきましょう」

「側近の癖に生意気よフィル！」

「じゃあ言わせてもらいますが、この世界でのあなたの身分はキヨウジさんにお世話になっていいると言っ点では僕らと変わらないのですから、あまり命令など僕にはしないでくださいね僕には！」

にらみ合いを続けている二人を他所にさっさと食事を終えて自室に着替えに行った狂武がなにやら大きな荷物を持ってリビングに戻ってきた。

やっぱり服装は黒を主体にしたジーパンに赤いドクロ柄の黒いシャツ、そして薄手の黒い長袖のカッターシャツ・・・・・・・・って全部黒ですね。

「そういえば、出かけるって言ってましたけどいったいどこに行く





「あのとて言われてもファントム・メロディーはファントム・メロディーだが……って時間が、それじゃあ行ってくるわ」

「ちょ、キョウさん！」

止める間もなく出かけてしまった狂武くん、どこまでもマイペースだ。

「ところで馬鹿、さっき言ったファントムなんたらって何なのさ？」

「馬鹿って言うなよフィル、それはまあ置いてファントム・メロディーってバンドグループは今一番売れてる人達なんだよ。曲のつくりとか、歌声とかが凄くてCDの売り上げ300万部突破だって言われてるし、これ見て」

フィヴはそう言いながらビデオを再生した。

どうやら前回のライブ放送を録画したやつらしい。

『俺らのために集まってくれてありがとう！ 今宵はおおいに盛り上がるうぜえ〜〜！〜！』

『これから歌う曲は俺らが最初にバンドを組んだときに作った歌です、あんまり良いできとはいえないんですが是非聞いてください・・

・幻影の歌』

〜  
〜  
〜  
〜

広がる空のその向こうで キミはなにを探しているの

たった一人で歩く道で キミはいつたいなにを思うの

隣に居られぬ僕だから せめてもと奏でるその音は

空ふく風とあいまって キミに届けとファントムソング

僕はいつでも願ってる 強くて弱いキミだから

泣かないからとは言わないで 泣いた後には笑顔を見せて

キミには合えない僕が歌う 儚き霊のファントムソング

）　）　）　）

「ね、いい歌でしょ」

フィヴがビデオを止めるまで聞き入ってしまった。

誰もがうなずいた。 セフィなんか半分涙目だ。

「このビデオはジュンに借りたんだ、ジュンってファントム・メロデーの大ファンなんだって」

「狂式さんそんなことやってたんだ」

「今度キョウさんに何か歌ってもらおう」

上機嫌のフィヴや、半分涙目で感動しているセフィリアンが居るところ悪いと思っただけだ

「うん、ファントム・メロデーのことはわかったんだけど今日の

お昼ご飯のメニューどうするの？」

それまですっかり忘れていたか、僕がその一言を言った瞬間ピシッ  
て音が聞こえた気がしました。

「チャーハン作って！」

「オムライスです！」

「・・・ハンバーグ」

また言い争いが始まったのでため息をつきながら朝食の後片付けを  
してこっそりと部屋に逃げた。

あの言い争い、いつまで続くのかな？なんて思いながら・・・

結局、お昼はハヤシライスになりそれなりに賑やかに食事をした。

その後帰ってきた狂式さんにバンドのことで付きまとったフィヴと  
セフィリアンが狂式さんの怒りに触れたのは言うまでもないこと  
ですね。

## 第十五話：イヤクウの料理と狂武の秘密？（後書き）

前書きでも申し上げましたが改めまして、更新遅れまして申し訳ございません。

これにはとても深い訳が・・・

「言ってみるこの野郎」

えつとですね、PCがぶっ壊れてしまい修理に出したのですが戻ってくるまでに1週間とちょっと、設定だの何だのを終えるのに4日ほど・・・

それからすぐに投与しようと思ったのですが、Wordに保存していた下書きとありますが、そういうのが全て綺麗さっぱり消えてしまい遅れに遅れまくったと言う訳です・・・。。。

それに、そろそろ進路がかかわってくるので更新の方が週1ペースになると思われます・・・はい。

「よおつくわかった・・・星になりやがれえ!!」

ぐぐらぁ!~~~~~キラーーン

「第十六話はなるべく早く更新しろよ、それじゃな・・・あゝイライラするな、ジュンでも殴って気晴らししてくるか」

## 第十六話：狂武の心中（前書き）

スランプでくっす・・・。

かなりグダグダですが、お読み頂けたら幸いと存じます。  
今回はシリアスなところが多いです。

## 第十六話：狂気の心中

- 視点：狂気 -

小さな頃の自分が居る。

ああ、俺は今夢を見ているのか……。

小さな頃の俺は公園のブランコを漕いで楽しそうに笑っている。

あの頃は何も知らずに無邪気にはしゃいでたな。

この何の変哲もない生活がずっと続くと思っていた自分が居る。

それを冷めた目で見ている自分がいる。

景色が変わり、小さな自分と買い物袋を持った男の人とその隣を歩く女の人が居る。

『今日の晩御飯は　　の大好きなハンバーグにしましょう』

『ホント？　じゃあ早く帰ろうよ！　お星様とかお月様とか作るんだ！』

『ふふふ、転ばないようにね』

小さな頃の俺が二人の居た場所から走って振り向いた。

「……………いつまでも  
で目が覚める」

最近毎日見続けるあの頃の悪夢、ため息をつき重い体を起こして鏡をのぞく。

ずいぶんと、丸くなった自分が居る。

それを遠巻きに見てる心がある。

俺は、いったいなにを思い、なにを背負い、どこに向かつて、日々を過ごしているのだろうか……。

一階に下りて、顔を洗い、リビングに行ってコーヒーを入れる。そうだ、今は二人分入れるんだった。

コーヒーを入れ終えて少しすると、紫色の髪をバンダナで隠した少年がリビングのドアを開けた。

「おはようございます」

「ん、おはようイヤクウ」

その少年に挨拶を返し、キッチンへ向かう。彼に料理を教えるためだ。

彼の料理の腕はなかなかで教え始めて1週間しか立っていないのに、もう普通にこなすことができるようになっていた。

「できた」

「お……時間ギリギリだな」

「な、何とか間に合いました」

「それじゃあ配膳よろしくな、俺は寝てる奴ら起こしてくる」

「はい」

素直に関心しつつ、寝めすぎないように言って二階へあがる。

そのまま真っすぐ男子部屋に行き、寝ている二人を起こす。

最初は軽く揺すって、それでも起きないなら強めに、それでも駄目なら最終手段





相変わらず賑やかだな、と思う。  
車を運転しているのが篠追志乃しのすいこのバンドのリーダー的存在、その隣に座ってるのが丘秀平おかしゅうへい、暴走しがちな志乃さんを止めるのが役目それで、志乃さんの後ろで俺の隣に居るのが雅奈七尾主みやびなななおに楽器の調整をしてくれる機械いじりの好きな変わり者だ。  
ちなみに、今乗ってるこのスポーツカーも七尾さんの車で最高速度500キロの改造車だ。

「そうそう狂ポン、行きがけに漣継みぞつぐさんと華姫かひめさんの墓前に花添えて行くって話しんだけど大丈夫かな？」

「大丈夫ですよ、お気遣いなく」

「了解、それじゃ飛ばすよ」

漣継と華姫が誰かはいずれ分かることだろうし、今ここで明かすことではないので伏せておこう。

「俺は寝るんで、伊勢ついたら起こしてください」

「えー狂ポン寝ちゃうの？　なんか最近起きた面白い話とかしてよあ」

「嫌です、それにそろそろ高速道路入るんで起きててトラウマ増やしたくないですから」

そう言って即効で眠りの世界へ旅立った。

〈夢〉

一歩進むたびにカッーンと響く足音に耳をすまし、自分のいる場所を確認する。

どこだろう。

真っ暗で周りが見えないどころか、自分の足音以外何も聞こえない。ああ、そうか・・・ここは、俺の心の虚空の中か・・・

信じることを拒んで、弱い自分を隠して、自分を傷つけ、他人を痛めつけて、心にできた虚空を埋めるように何かを求め、埋められなくて捨てる。

そんなことをただひたすらに繰り返してくうちに、虚空はこんなにも広がっていた。

いつになればこの虚空を埋めることができるのだろうか・・・。

一歩進むたびにカッーンと響く足音に耳をすまし、自分のいる場所を確認する。

真っ暗で周りが見えないどころか、自分の足音以外何も聞こえない。ここは俺の心の中、夢の続きを願う場所。

ここは俺の心の中、なくしたものを求める所。

弱い自分を心の闇のその奥深くに閉じ込めた、悪夢のループが心を蝕むのとともに聞こえるかすかな泣き声、『・・・・・・・・ここから出して・・・・・・・・』

今日も俺は聞こえないフリをして、歩いてく。

〈夢終〉

うつすらと目を開けると見慣れぬ壁が見えた。

「お、丁度いいタイミングで目覚ましたね、狂ポン」

なぜか丘さんと雅奈さんが顔を赤くして他所を向いている。

車の中で寝ていたはずなのだが・・・。

「狂ポン、はい鏡！」

室内にあった等身大の鏡を俺の前まで持ってきた篠追さん。

鏡に映っていたのは、白い長めのスカートと淡いピンクのＴシャツを着た女の子だった。

「……女の子!？」

慌てて自分の格好を確認すると、鏡に映っているのとまったく同じ姿をしていた。

まあ、鏡なのだから当たり前のだが……髪をまとめていたゴムもはずされてばらけている。誰がどこからどう見ても女の子だ、それもかなり美人の。

たとえるなら、美しいの中に可愛いを踏まえた感じの美人だ。

なんかごつちゃになっただな……じゃなくて!

「なんで俺こんな格好してるんですか、しかもここどこですか」

今の今まで俺と顔をあわせようとしていなかった丘さんが、やっぱり俺と視線を合わさないようにしながら教えてくれた。

「ここは伊勢のライブ会場の控室で、その格好の原因はあれ」

丘さんが指さしたのは、控室の端の方で腹を抱えて笑っていた篠追さんだった。

俺は問答無用で篠追さんの腹を思いつき踏みつけた。

「うげえ」

変な声を上げて俺の見てくる篠追さんを、鬼の形相で睨む。

その顔をみた篠追さんはあるう事かこんなことを言った。

「鬼姫ちゃん、そんなに足上げたらパンツ見えちゃうよぉ・・・  
っあっはははははははははははははははは、は、腹いてえ〜」

俺の堪忍袋の尾は完全に切れた。

そりゃもう修復なんてできないくらいにブチっと

「消えろおおおおおおお!!!!!!」

俺の脚が完璧に篠追さんのわき腹に直撃した。

なにやらつぶれた蛙のような声をあげたが自業自得だ。

着せられていた服を脱ぎ自分が元着ていた服に着替えながら、なん  
でここに居るのか理由を聞いた。

「それは「丘ピンが運んだから」喋るな」

丘さんが転がっていた篠追さんに止めをさした。

ってか、こんなんライブ大丈夫なのか？

俺が不安に思っていると雅奈さんが肩を叩いてきた。

「なんすか？」

「ギターの調整しておいた、確認よろしく」

「雅奈さん、あざっす」

ギターを手に取って引いてみると、自分でも驚くほどイメージどお  
りの音が出た。

やっぱり雅奈さんの調整は凄い。

俺は雅奈さんを見てガッツポーズをして親指を立てた。

「あと10分で始めるんで準備お願いしまーす」

その声がかかった後、皆で楽譜を確認してステージにあがった。

「俺らのライブに来てくれてありがとうー!!」

難なくライブも終わり、握手会だのサインだのをして俺は近くの川沿いで一息ついていた。

ふと反対側の川沿いを自転車を二人乗りした男の子と女の子が通りすぎて行った。

女の子は髪の毛がすごく長く、肌の色が凄く白かった。

俺も肌の色は白いが、あそこまでじゃない。

おそらくは長期入院していた子なのだろう。

なんてことを考えていると、篠追さんが迎えに来た。

「なにやってるさ、帰るよアーツ君」

「普通に狂式と呼んでください」

今更だが、俺は本名を伏せてバンドに参加している。

もちろんメンバーは全員本名を知っているが、ファン達にはこう名のっている。

“ルアーツ” 適当に思いついた名前を言っただけで、別段深い意味はない。

「すぐ行きますよ」

俺は車に乗り、今日歌った歌を思い返していた。

- 大人になるため忘れた夢を 今思い出して抱きしめよう -  
- 僕らが捨てた大きな夢は まだ生きて僕らを呼び続ける -  
- さあ思い出して 冷めた心に夢を灯して -  
- 踏み出す一歩は夢に向かって 弱音を吐くな！前を見る -  
- 灯した夢は 折れることなき剣になるから -

「……ン！狂ボン！もうすぐ着くから起きて〜」

いつの間にか寝ていたらしい。

目を覚ますと信号待ちで車は止まっていたが周りの2人はぐったりとしていた。

「高速道路だからといって時速250キロはやめませんか？」

「それは無理だにや〜俺たちの18番目くらいの楽しみだから」

はぁ……この人、なに言っても無駄だ。

狂気も似たようなものなのだが、当人に自覚はゼロなのがお決まりだ。

「ああ、ここでいいっす」

駅近くの公園でおろしてもらいそこから歩いて家まで帰えることにした。

別れ際に近々遊びに来ると言っていたが、こなくていいのに。

さあて、帰って夕飯作らないとな。

## 第十六話：狂武の心中（後書き）

普段は最強にて最凶の狂武の心の中を書いて見ました！

なにやら黒い物がグルグルと渦巻いているようですね・・・。

さてはて、狂武の秘密はいつになったら解き明かされるのでしょうか！！！

「……………あんたさ、性格悪いとか言われたりしないの？」

おやおや香織さん、その手の言葉は俺にとって褒め言葉ではないですよ。

「そう、勝手に言っただけ変体野郎」

ひ、酷い！ 流石にそれは傷つく・・・

「はいはい、でもこんだけ焦らしたんだからちゃんといつの過去も書くんではないかね？」

モチのロンですよ！

「あゝはいはい、あんたと話していると疲れるから帰るわ」

それでは俺もこの辺で！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8664d/>

---

そんなのって有りですか！？

2010年12月11日00時56分発行